モノハ幹事ノ檢閲ヲ經ヘシ

第六則　入札請負ヲ以テ修繕ヲ加ヘ難キ箇所及ヒ日用雜作等ニ充ル爲メ用達中ヨリ月番ヲ以テ大工職一人乃至兩三人ヲ傭ヒ入ルトキハ毎日其箇所人員及ヒ賃金ヲ帳簿ニ登記シ課長ノ檢印ヲ受クヘシ

第七則　庭掃除及ヒ草取下水浚等便宜ニ從ヒ臨時相當ノ人足ヲ傭使スルモ亦前則ニ準スヘシ

現金受取掛

現金ノ受領納付ヲ擔當スル所トス

第一則　計算掛第五則ニ據リテ大藏省出納局ヨリ官吏俸給其他一切ノ現金ヲ領取セントスルトキハ計算掛ヨリ拂切符ヲ領受シ同局ヨリ交換シタル現金ハ直チニ同掛ニ交付シ點檢ヲ受クヘシ

第二則　計算掛第十三則及ヒ第十五則ニ據リ雜收入其他一切ノ納付金アルトキハ計算掛ヨリ其證書ト現金ヲ領受シ大藏省出納局ニ納付シ成規ノ受領證ヲ取リ之レヲ同掛ニ交付スヘシ

受付掛

往復書類ノ授受ヲ擔當スル所トス

第一則　諸布告達等配付アルトキハ本課ニ其一部ヲ備ヘ課長及ヒ課員ノ閲覽ヲ經テ之ヲ該簿ニ插綴スヘシ

第二則　院中回達ハ課長及ヒ課員ノ閲覽ヲ經タル後回達錄ニ謄記シ他課ニ送付スヘシ若シ急施ヲ要スル事件アルトキハ不參課員ニ之ヲ通知スヘシ

第三則　總テ會計營繕ニ關スル布告達ハ庶務課ヨリ別ニ一部ヲ領取シ之ヲ本課ニ備フヘシ其他本院會計既濟ノ書類等ハ一切之ヲ保存シ後證ニ供スヘシ

第四則　諸衙門贈答書ハ總テ其件名或ハ表記ヲ送致簿ニ登記シ庶務課ニ送致シ受領證印ヲ受クヘシ

附則

前ニ載スル所ノ會計ノ事務ハ細大ヲ論セス愼重ニ取扱フヘシ但成規ナキモノニシテ各分掌ノ書記生意見アルトキハ之ヲ陳述シ課長ノ決ヲ受クヘシ





調査課細則

十九年四月二十日分課ヲ改ム

會計課ヨリ元老院ヘ同十四年一月十四日容冬事務局條例御改正（十三年十二月ニ改ス）相成候ニ付本課課務細則別冊ノ通致改正可然哉此段相伺候也

調査課細則　十四年二月二日

本課ハ法律規則等ノ照査編纂及外國書籍ノ飜譯ニ關スル事務ヲ掌理スル所トス茲ニ四課ヲ分テ照査、編纂、飜譯、淨書、受付ノ五トナシ本院事務局條例ニ基キ左ノ細則ヲ設ケ本課一切ノ事務ヲ整理ス

照査掛

法律規則ニ關スル照査ヲ擔當スル所トス

第一則　上局委員局及議官ヨリ法律規則ノ照査ヲ命セラルルトキ又ハ議案若クハ修正案ノ交付ヲ受ケタルトキハ課長ノ指揮ニ依リ其事件ヲ調査シ又ハ時宜ニ由リ各自ノ意見書ヲ出スヘシ

第二則　布告諸達等ハ各衙ヲ區分シ各款ヲ甄別シ毎回編入シテ其廢存改正等檢閲ノ便ニ供スヘシ

第三則　法律規則ノ廢存改正等ヲ照査シ若シ不備不明及ヒ矛盾等アルトキハ其意見ヲ課長ヘ陳述スヘシ

編纂掛

法律規則ニ關スル編纂ヲ擔當スル所トス

第一則　上局委員局及ヒ議官ヨリ法律規則ノ編纂ヲ命セラルルトキハ課長ノ指揮ニ依リ其事務ニ服從スヘシ

第二則　編纂稿ヲ脫セハ淨寫シテ之ヲ課長ヘ出シ上局ノ檢閲ヲ受ケ其印刷スヘキモノハ庶務課ヘ送付スヘシ

第三則　印刷ノ後其誤謬ノ有無ヲ校合シ之ヲ課長ヘ出スヘシ

飜譯掛

外國書籍ノ飜譯ヲ擔當スル所トス

第一則　上局委員局及議官ヨリ飜譯命セラルルトキハ課長ノ指揮ニ依リ其事務ニ服從スヘシ

第二則　上局ノ裁可ヲ經テ譯ヲ命スルトキハ飜譯者ヲシテ豫メ其枚數代價及成稿ノ期限等ヲ證書ニ記セシメ之ヲ課長ヘ出シ上局ノ檢閲ヲ經テ飜譯書收納簿ニ謄記シ證書ト共ニ之ヲ受付掛ニ保存スヘシ

第三則　飜譯書ノ草稿ヲ飜譯者ヨリ差出ストキハ其枚數ヲ檢査シ受領者ノ檢印ヲ捺シ其年月日等ヲ飜譯書收納簿ニ謄記シテ之ヲ課長ニ出スヘシ

淨書掛

書類ノ淨書及文案ノ起草ヲ擔當スル所トス

第一則　照査飜譯等ヲ筆記シ又ハ文案ヲ起草シテ淨書校合スヘシ

第二則　筆記文案等多數ヲ要スルトキハ之ヲ庶務課ヘ送付スヘシ

第三則　筆記文案等ハ正副二本ヲ製シ正本ヲ課長ヘ出シ副本ヲ本課ニ備ヘ置クヘシ

受付掛

課中ノ雜務ヲ擔當スル所トス

第一則　布告諸達等ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ各掛ヘ配付シ一部ヲ本課ニ備ヘ置クヘシ

第二則　院中ノ回達等ハ回達錄ニ摘載シ課員ノ閲覽ヲ經テ之ヲ他課ヘ送付スヘシ若シ至急ヲ要スル事件ニシテ不參ノ課員アルトキハ速ニ其居宅ヘ通知スヘシ

第三則　諸衙門ト往復ノ文書ハ送致簿ニ其名宛ヲ記載シ之ヲ庶務課ヘ送付スヘシ

第四則　本課常備ノ書籍及物品等ハ帳簿ニ記載シ其授受ヲ明ニスヘシ

第五則　課印及常備ノ函鍵ヲ管守スヘシ

第六則　課中ニ於テ執行スル所ノ事件ハ之ヲ本課日誌ニ摘載スヘシ

附則

本課所屬ノ官吏各自當然ノ職務ニ從事スヘシト雖トモ若シ事務ニ緩急アルトキハ課長ノ見込ヲ以テ繁閑互ニ補助セシムルコトアルヘシ

調査課ヨリ元老院ヘ伺十四年二月二日

---

本課細則別冊ノ通相定可然哉此段相伺候也

元老院事務局條例中改正　十四年二月二十三日

第五章　建白課

第一條　建白書ヲ出ス者アルトキハ其表紙ニ受取人ノ姓名及ヒ年月日番號ヲ朱書ス

建白課ヨリ元老院ヘ伺十四年二月二十三日

本院事務局條例中第五章第一條并建白書取扱順序ノ儀太政官第五十三號布告相成候ニ付テハ別紙朱書ノ通改正相成度此段相伺候也（建白書取扱順序及ヒ第五十三號建白書出方ノ布告ハ文書門受付ニ掲ス）

庶務課細則　十四年三月十一日

本課課務ヲ五ニ分チ庶務掛職務掛記錄掛謄寫掛圖書掛トス而シテ事務局條例ニ據リ其分掌ヲ定ムルコト左ノ如シ

但本掛附屬等外吏以下雜務取締、雜務掛、玄關受付所掛、小舍人取締、小舍人、廚者、寫字生、小使等ノ掌務ハ別ニ之ヲ定ム

庶務掛

本掛ハ諸文書ノ往復願伺屆等ノ受付及ヒ各課掛ニ係屬セサル諸般ノ事務ヲ掌理ス

第一則　太政官ヨリ特ニ本院ニ命令セル文書ハ其要旨ヲ御達件名簿ニ登記シ且該文書ニ受領シタル年月日ヲ朱書シ上局ノ檢閲及ヒ議官ノ回覽ニ供シ各課掛ニ回達スヘシ但各課掛ノ主務ニ係ルモノハ件名簿ト共ニ之ヲ其課掛ニ送付シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第二則　太政官ヨリ議案ノ下付アルトキハ封筒上ノ番號ヲ送付簿ニ登記シ之ヲ議事課ニ交付シテ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第三則　議案修正案及ヒ會議ノ期日ヲ院中ニ於テ議事課ヨリ直ニ頒布又ハ報告セルモノヲ除クノ外不參議官等ニ頒布或ハ報告ノ爲メ該案ノ封書同章ヲ添ヘタルモノ或ハ報告書ヲ同課ヨリ交付セルトキハ之ヲ各

事務局條例中第五章第一條ヲ改正ス

庶務課細則十九年四月二十日分課ヲ改ム

員ニ送達シ領收又ハ領承シタル證印ヲ取ルヘシ

第四則　上奏ノ議案ハ其封筒上ノ番號ヲ送致簿ニ登記シテ之ヲ太政官ニ送達シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第五則　議案ニ關スルモノヲ除クノ外上奏上申伺屆等ノ文書ハ各課掛ノ起草ト本課ノ起草トヲ問ハス之ヲ淨書シテ番號ヲ朱書シ該文書ノ要旨及ヒ年月日ヲ各件名簿ニ登記シ然ル後之ヲ送致簿ニ付シテ太政官ニ送達シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第六則　上奏上申書ノ指令書ヲ太政官ヨリ送付セルトキハ上局ノ檢閲ヲ經テ議官ノ回覽ニ供シ又ハ各課掛ニ回達スヘシ但各課掛ノ主務ニ係ルモノハ之ヲ其課掛ニ交付シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第七則　各廳ヨリ諸文書ヲ送付セルトキハ該文書ノ要旨及ヒ年月日ヲ各件名簿ニ登記シ其事件ニヨリ上局ノ裁決ヲ經又ハ課長之ヲ處辨スヘシ但本課ノ主務ニアラサルモノハ件名簿ニ付シテ其主務ノ各課掛ニ交付シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第八則　各廳ニ送附スル諸文書ハ各課掛ノ起草ト本課ノ起草トヲ問ハス之ヲ淨書シ該文書ノ要旨及年月日ヲ往翰件名簿（回答ニ係ルモノハ來翰件名簿）ニ登記シ然ル後之ヲ送致簿ニ附シテ其廳ニ送達シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第九則　各廳ヨリ送附セル文書其回答ニ係ルモノハ該文書ノ要旨及ヒ年月日ヲ往翰件名簿ニ登記シ其事件ニヨリ上局ノ檢閲ニ供シ又ハ課長之ヲ處辨スヘシ但各課掛主務ニ係ルモノハ件名簿ニ附シテ之ヲ其課掛ニ交附シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第十則　機密ヲ要スル上奏上申及往復書ハ成規ニ依リ封筒上ニ親展ノ文字ヲ書シ尋常ノ文書ト別異スヘシ

第十一則　人民ヨリ差出セル願伺等ノ文書ハ該文書ノ要旨及ヒ年月日ヲ各件名簿ニ登記シ指令案ヲ草シテ上局ノ裁決ヲ經其指令書ヲ本人ニ下附スヘシ但管轄廳ヲ經由シタルモノハ其回答案ヲ草シ上局ノ裁決ヲ經其回答書ヲ該管轄廳ニ送達スヘシ





第十二則　上奏上申及各廳ノ往復幷願伺屆等ノ諸文書ハ本書ト件名簿ニ番號ヲ朱書スヘシ但機密ニ關シ封緘セシモノハ其封筒上ノ番號ヲ以テスヘシ

第十三則　各官廳ト電信ノ往復ヲ要スルトキハ其事件ニヨリ上局ノ裁決ヲ經又ハ課長之ヲ處辨スヘシ

第十四則　各國在留ノ公使及領事等ニ通信ヲ要スルトキハ渾テ明治十三年十二月太政官番外達ニ據リ之ヲ取扱フヘシ

第十五則　太政官ヨリ布告達ノ印刷文書ヲ送付セルトキハ上局及ヒ本院奏任官以上幷各課ニ配付スヘシ

第十六則　各廳ヨリ布達及諸報告書等ノ印刷文書ヲ送付セルトキハ上局幷議官ノ閲覽ニ供シ又ハ各課ニ配付スヘシ

第十七則　諸儀式ニ係ル達書ヲ宮內省若シクハ式部寮ヨリ送付セルトキハ上局及ヒ議官ノ閲覽ニ供シ又ハ各課ニ回達スヘシ但勅奏判任官ノ總代者ヲ要スルトキハ總代人名簿ニ年月日及ヒ其事由ヲ詳記シ各本人ニ通達シテ證印ヲ取ルヘシ

第十八則　三大節奏任官ノ宴會時限ハ本掛ヨリ豫メ各員ニ通達スヘシ

第十九則　三大節奏任官酒饌ハ明治十一年十二月宮內省通達ノ主旨ニ依リ現員書ヲ付シ該酒饌調達方ヲ會計課ヘ通知スヘシ但シ代料ハ宮內省ヘ照會シ之ヲ受領シテ會計課ニ送付シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第二十則　上木印刷等ノ文書其發賣ヲ許スモノハ書肆ニ付シテ發兌セシメ其發賣ヲ許サヽルモノニシテ大藏省印刷局或ハ其他ノ活版所ニ付シ印刷セシメントスルトキハ會計課ト合議（通常印刷ニ係シ上局ノ裁決ヲ經テ之ヲ處辨スヘシ）

第二十一則　本院藏版トシテ發兌セル書籍版權ヲ有スルト有セサルトヲ問ハス上局ノ裁決ヲ經成規ノ如ク內務省ニ屆ケ置クヘシ

第二十二則　書肆ニ付シテ發兌セル本院藏版ノ書籍上本印刷落成シテ書肆ヨリ納付セサルトキハ本院藏書トシテ五部ヲ書庫ニ納メ其他內務省ニ納付幷本院奏任官以上或ハ編輯校閲者ニ配付シ或ハ各廳

等ヨリ請求セルモノハ渾テ上局ノ裁決ヲ經テ之ヲ處辨スヘシ

第二十三則　議事筆記ノ印刷文書獻本ハ例數ニ遵ヒ宮内省ヘ送付シ且本院勅奏任官幷ニ各課及ヒ太政官各省院使廳等ニ配付スヘシ

第二十四則　本院官員ノ履歴書及職員錄ヲ印刷セルトキハ奏任官以上幷ニ各課ニ配付スヘシ但職員錄ハ太政官各省院使廳府縣ニ配付スヘシ

第二十五則　事務局條例第一章第十一條ニ當ル記錄ノ保存ヲ要スル書類毎月ノ終リニ於テ各課掛ヨリ交付セサルトキハ課長ヨリ之レヲ督促スヘシ

第二十六則　皇居御門鑑ハ宮内省ヨリ受領セル員數番號幷出納ノ年月日ヲ簿册ニ詳記シ且明治十三年十二月宮内省達ノ趣旨ニ據リ之ヲ各員ニ交付シテ領收ノ證印ヲ取ルヘシ若シ他廳ニ轉任又ハ罷免ノモノアルトキハ本人ニ通達シテ返還セシムヘシ

第二十七則　圖書院外ニ帶出ノ爲メ特許證付與簿ヲ製シ其特許證ヲ要求スルモノアルトキハ其年月日及ヒ番號ヲ詳記シテ之ヲ本人ニ付與シ受領ノ證印ヲ取ルヘシ

第二十八則　門衛巡査ハ本院詰巡査心得書ノ外諸取締ノ爲メ更ニ附托ヲ要スヘキ事件アルトキハ上局ノ裁決ヲ經テ巡査本部ニ照會シ其事ニ服行セシムヘシ

第二十九則　各課掛室内設備ノ器械物品ヲ除クノ外他ノ各室内ニ要用ノ爲メ新調又ハ交換セサルヲ得サルコトアルトキハ會計課ニ照會シテ之ヲ處辨スヘシ但該室内ニ設備ノ現品及交換品又ハ不用品ヲ同課ニ返還セル年月日ヲ簿册ニ登記シ其出納ヲ詳明ニスヘシ

第三十則　本院周圍ノ溝垣及議事堂其他各室内外ニ於テ修繕ヲ要スルコトアルトキハ事ノ大小ヲ問ハス其旨ヲ會計課ニ照會スヘシ

第三十一則　本院近火等非常ノ虞アルニ當ツテハ速ニ出院シテ門衛巡査及附屬等外吏以下幷消防人足ヲ指揮シ之ヲ防禦スヘシ且院中ニ於テ平常未萌ニ警戒スル等モ亦本掛ニ於テ專ラ注意スヘシ

第三十二則　本院ヨリ東ハ鍛冶橋内南ハ櫻田門内西ハ半藏門及雉子橋内北ハ一ツ橋及神田橋内ニ失火





ノ警アルトキハ豫テ定メ置所ノ消防人足ヲ召集シ之ヲ指揮スヘシ但該方面範圍外ト雖トモ烈風ニ際シ大火アルニ當ツテハ特ニ該人足ヲ召集スルコトアルヘシ

第三十三則　本院借用ノ馬車人力車ヲ管守シ公事又ハ其他ニ使用セシコトヲ請求スルモノアルトキハ課長之ヲ指揮スヘシ

第三十四則　郵便切手ハ豫テ若干ノ金員ヲ會計課ヨリ受領シ之ヲ購求シテ本掛ニ備ヘ置キ各課掛公用ノ文書ヲ郵送セントスルトキハ渾テ本掛ニテ取扱フヘシ但該切手ハ何府縣廳若クハ何地方誰某ニ遞送ノ年月日ヲ簿册ニ登記シ毎月其支用セル決算表ヲ製シ之ヲ會計課ニ送付スヘシ

第三十五則　至急御用使ヲ派出スルニ際シ臨時人力車ノ傭入ヲ要スル爲メ豫テ金員若干ヲ會計課ヨリ受領シ置キ毎月該仕拂明細書ヲ製シ之ヲ會計課ニ送付スヘシ

第三十六則　諸賄料ハ當直ニ係ルモノト臨時ニ係ルモノトヲ區別シ毎月二十五日ヲ以テ該證書ヲ付シ會計課ニ通知スヘシ

第三十七則　前數則ノ外各課掛ニ係屬セサル事務ハ本掛ニ於テ之ヲ掌理スヘシ但其事務ニヨリ上局ノ裁決ヲ經又ハ課長之ヲ處辨スヘシ

職務掛

本掛ハ官印ヲ管守シ及職務ニ關スル諸般ノ事務ヲ掌理ス

第一則　本院ノ印章及上局各員ノ官印ヲ管守シ其押捺ヲ要スルトキハ其旨ヲ上局ニ開申シ之ヲ取扱フヘシ

第二則　准奏任官及判任官以下ノ宣旨幷ニ辭令書ハ明治六年六月太政官第二百三十二號同九年二月第十四號達書式若クハ本院ノ内規ニ據リテ之ヲ書スヘシ

第三則　本院奏任官分任派遣ハ辭令及准奏任官ノ宣旨幷辭令書等ハ上局ノ旨ヲ承ケ之ヲ處辨シ判任官以下ハ上局ノ旨ヲ承ケ課長之ヲ傳達スヘシ但寫字生及小使等ヲ傭入レ又ハ傭ヲ解クトキハ本掛書記生ニ於テ之ヲ傳達スヘシ

第二百三十二號達ハ第四號ニ載ス
任派ニ關セ第十四號達ハ官職規ニ載ス

第四則　寫字生小使ノ進退ハ課長之ヲ決行スヘシ但事務ノ繁閑ニヨリ其定員若クハ給額ヲ増減セント欲スルトキハ上局ノ裁決ヲ經テ之ヲ定ムヘシ

第五則　三大節ニ方リ判任官ノ賀表ハ明治五年太政官第三百四十七號達ニ依リ歳末御祝詞ハ毎年宮内省通達ニ據リテ名刺簿ヲ製シ當日ノ式終リテ後之ヲ宮内省ニ送達スヘシ

第六則　判任官三大節拜賀及歳末御祝詞當日出院ノ時限ハ課長ヨリ各課ニ回達スヘシ

第七則　昇降時限ノ伸縮アルトキハ太政官ニ開申シ及各廳幷各議官各課掛ニ回達スヘシ

第八則　勅任官歸省及湯治其他旅行等ノ願書ハ上申案ヲ作リ上局ノ檢閲ヲ經テ之ヲ太政官ニ送達スヘシ但本書ニ指令シテ同官ヨリ到達セルトキハ之ヲ上局ニ開申スヘシ

第九則　奏任官以下ノ願伺書ハ事務局條例第三章第三條ニ據リ上局ノ裁決ヲ經テ之ヲ執行スヘシ但奏任官ノ歸省旅行等ニ係ルモノハ必ス其旨ヲ太政官ニ申達スヘシ

第十則　奏任官以下某廳ニ奉職ノモノ又ハ曾テ某廳ニ奉職シ現時非官ノモノヲ本院ヘ採用セントスルトキハ上局ノ旨ヲ承ケ成規ノ如ク某廳ヘ照會シ然ル後奏任官ハ太政官ニ奏請シ判任官以下ハ直ニ之ヲ徴召スヘシ

第十一則　准奏任官御用掛ノ進退黜陟若クハ曾テ其廳ノ奏任官ニ奉職シ現時非官ノモノ又ハ有位ノモノ判任官ニ採用及罷免等アルトキハ明治八年十一月太政官第二百一號達ニ據リ其旨ヲ太政官ニ進達スヘシ

第二百一號八囚任器ニ就ス

第十二則　奏任官以上ノ進退黜陟アリテ太政官ヨリ通牒セルトキハ該通牒書ヲ上局ノ檢閲及議官ノ回覽ニ供シ又ハ各課掛ニ回達スヘシ

第十三則　奏任官分課ノ變換アルトキハ議官ノ回覽ニ供シ又ハ各課掛ニ回達スヘシ

第十四則　准奏任官及判任官以下ノ進退黜陟幷分課ノ變換アルトキハ本人ヨリ請書ヲ出サシメ然ル後議官ノ回覽（等外吏以下ヲ除ク）ニ供シ又ハ各課掛ニ回達スヘシ

第十五則　本院官員及ヒ諸傭員ノ進退黜陟其他總テ俸給賞與等ニ關スル事件ハ進退錄ニ登記シテ之ヲ會計課ニ通知シ領承者ノ證印ヲル取ヘシ

第十六則　本院官員滿一箇年以上勤續ニシテ免官ノモノアルトキハ本人ノ履歴書ヲ付シ滿年賜金ノ渡方ヲ會計課ニ通知スヘシ

第十七則　准奏任官及判任官以下新任或ハ免職ノモノアルトキハ其旨ヲ本人ノ原籍管轄廳ヘ通達スヘシ但新任ノ者ハ勅奏判任官以下都テ履歴書ヲ取ルヘシ

第十八則　本院官員ノ進退黜陟及分課ノ變換アルトキハ上局其他（各課ヲ除キ）ニ設ケアル掲牌ヲ改ムヘシ

第十九則　職員錄ハ豫テ太政官ヨリ交付セル二本ノ外猶備用トシテ幾本ヲ製シ明治八年四月正院通達書ノ式ニ據リ之ヲ登記スヘシ但太政官ヨリ交付ノ職員錄ハ毎月五日ヲ以テ改正シ同官ニ送付シテ交換スヘシ

第二十則　本院ノ許可ヲ經タル出版人ヨリ職員錄ノ謄寫ヲ願出ルトキハ本院中ニ於テ之ヲ謄寫セシムヘシ

第二十一則　本院官員ノ履歴ハ明治五年正月太政官第八號達ニ據リ之ヲ簿册ニ登記シ進退黜陟毎ニ遺漏ナク改正增補スヘシ

第二十二則　履歴書及職員錄ノ印刷ヲ要スルトキハ上局ノ檢閲ヲ經ヘシ

第二十三則　議官會議日出席幷不參表ハ太政官ヨリ特ニ本院ニ命令セル主旨ニ據リ毎月ノ終リニ於テ之ヲ製シ上局ノ檢閲ヲ經テ同官ニ送達シ又別ニ一本ヲ製シ議官ノ回覽ニ供スヘシ

第二十四則　議官會同日出席幷不參簿ヲ製シ當日出席及不參ノ事由ヲ該簿ニ登記スヘシ但毎月ノ終リニ於テ別ニ月表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

第二十五則　奏任官以下ノ出勤簿ハ毎日出勤時限ヨリ三十分ヲ限リ之ヲ檢査シ其不參若クハ遲參ノモノアルトキハ其事由ヲ該簿ニ登記スヘシ但毎月ノ終リニ於テ月表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

第二十六則　各課ヨリ交付セル判任官以下早出居殘時間明細書毎月ノ終リニ於テ月表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

第八號達ハ文書門記錄志決ニ載ス

第二十七則　寫字生及小使ノ出勤簿ハ毎日之ヲ檢査シ若シ不參ノモノアルトキハ其不參ノ事由ヲ該簿ニ登記スヘシ但毎月出勤不參ノ月表ヲ製スヘシ

第二十八則　毎年ノ終リニ於テ奏任官以下及傭員ニ至ル出勤不參及判任官以下早出居殘ノ總計表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

第二十九則　判任官以下ノ當直ハ其規則ニ據リ當直ノ期日ヲ本人ニ通達シ之ヲ領承セル證印ヲ取ルヘシ

記錄掛

本掛ハ本院諸記錄ヲ整頓シ及ヒ日誌編纂等ノ事務ヲ掌理ス

第一則　議案ニ係ルモノヲ除クノ外本院各課掛ノ記錄文書類保存ヲ要スルモノ庶務掛ヨリ交付セルトキハ部類ヲ分テ逐次編纂シ更ニ之ヲ謄寫掛ニ附シ正副二本トナシ正本ハ書庫ニ藏メ副本ハ本掛ニ備ヘ上局及各課係ノ參照ニ供スヘシ

第二則　詔勅及ヒ命令上奏上申等緊要ノ書類ハ其之ヲ納ルヘキ書櫃ニ納レ猶之ヲ書庫ニ藏ムヘシ但副本ヲ以テ參照ニ供スルハ前則ニ準スヘシ

第三則　諸記錄書類ハ毎年ノ終リニ於テ更ニ編纂整頓ヲ加ヘ各目簿册ト爲シテ之ヲ書庫ニ藏ムヘシ

第四則　日誌ハ編纂書例ニヨリ明治八年四月本院開設ノ日ヲ以テ始トシ凡ソ本院ニ於テ履行セル事蹟其他考證ト爲ルヘキモノハ細大遺ス所ナク逐次之ヲ編纂シテ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

第五則　毎期本院ノ報告書ハ明治九年十二月太政官ヨリ命令セル成規ニ據リテ編製シ上局ノ檢閲ヲ經之ヲ同官ニ送達スヘシ

第六則　議事一覽表ハ一年ノ終リニ於テ之ヲ調製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

謄寫掛

本掛ハ寫字生ヲ監督シ諸文書謄寫ニ屬スル事務ヲ掌理ス

第一則　各課掛ヨリ書類ノ謄寫ヲ付託セルトキハ其書名幷書類ヲ受領シタル月日ヲ本掛受付簿ニ詳記シ而シテ之ヲ寫字生ニ交付スヘシ

第二則　書類謄寫ノ順序ハ其原本受領ノ前後ニ據ルヘシト雖トモ其緩急（甲課ノ書類緊急ヲ要セサルモノニシテ乙課ノ書類ハ緊急ナ要スルノ類）ニ由リ便宜先後シテ謄寫セシムルコトアルヘシ

第三則　書類ノ謄寫及校正ヲ了ルトキハ原本ト謄寫トヲ併セテ之ヲ送付簿ニ付シ其依託セル各課ニ還付シ領收者ノ證印ヲ取ルヘシ

第四則　常備寫字生ノ謄寫ニ係ル枚數ハ寫字生取扱規則第五條ニ準據シ各種類ヲ監別シ翌朝必ス之ヲ日課簿ニ登記スヘシ

第五則　臨時枚數（一枚何錢）ヲ以テ謄寫セル書類ハ其多寡ニ拘ハラス該書名人名等ヲ枚數檢査簿ニ登記シ之ヲ會計課ニ送付シテ定價枚數ノ檢査ヲ受ケ而シテ其現數ヲ枚數人名簿ニ詳記スヘシ

第六則　前則ノ謄寫書類原本ノ難易又ハ寫字ノ工拙ニ因リ通常ノ定價ニ拘ハラス其價額增減ノ意見ヲ付シ會計課ニ協議シテ其價額ヲ定ムルコトアルヘシ

第七則　各課係ニ於テ寫字生ノ臨時派出ヲ要求スルコトアルトキハ書類謄寫ノ緩急ニヨリ之ニ應スヘシ

第八則　前則ノ場合ニ於テ派出セル寫字生ノ謄寫枚數ハ之ヲ檢スルヲ用ヒス單ニ派出セル日數ヲ日課簿ニ登記スヘシ但臨時枚數（一枚何錢）ノ寫字生ニ係ルモノハ第五則第六則ニ準據スヘシ

第九則　寫字生日給臨時枚數幷定時間外居殘時間等ノ諸給料ハ毎月ノ終リニ於テ各證書ヲ出サシメ課長檢閲ノ後之レヲ會計課ニ送付スヘシ

第十則　毎月ノ終リニ於テ各寫字生一箇月間謄寫幷校正セル書類ノ枚數一覽表ヲ製スヘシ

第十一則　一年ノ終リニ於テ一箇年間謄寫幷校正セル書類ノ枚數及支給セル金員等ノ種類ヲ計算シ增減比較（前年比較）表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

圖書掛

本掛ハ本院所藏ノ圖書ヲ管守シ及圖書出納ノ事務ヲ掌理ス

十七年一月十五日圖書掛ヲ調査課ニ屬ス

十三年十月雷外遊ハ文書門記錄志況ニ載ス

第一則　圖書取扱規則第四條ニ依リ圖書目錄正副二本ヲ製シ書名册數等各部類ヲ分テ之ヲ詳記シ正本ハ書庫ニ藏メ副本ハ本掛ニ備ヘ日常ノ披閲ニ供スヘシ

第二則　圖書ノ購求ヲ要スルトキハ都テ圖書取扱規則第二條第三條ニ照準スヘシ

第三則　圖書ノ新收アルトキハ其書名册數及年月日ヲ圖書新收簿ニ登記シ而シテ該圖書ニ所藏ノ印章ヲ捺シ猶之ヲ圖書目錄正副二本ニ記入スヘシ

第四則　洋書ノ新調及本院ニ於テ飜譯セル書籍アルトキハ明治十三年十月太政官番外達ノ旨趣ニ據リ該圖書ノ目錄ヲ製シ上局ノ檢閲ヲ經之ヲ同官ニ進達スヘシ

第五則　圖書出納簿ハ院中ニ於テ借覽スルモノト特許證ヲ以テ借覽シ院外ニ帶出スルモノトヲ別異スヘシ

第六則　院中ニ於テ圖書借覽ヲ請フモノアルトキハ圖書出納簿ニ其書名册數及年月日ヲ記載シ該簿ニ借覽人ヲシテ姓名ヲ自署捺印セシメ而シテ之ヲ貸與スヘシ

第七則　特許證ヲ以テ圖書借覽ヲ請フモノアルトキハ該特許證牌ニ掲載セル條件ニ照準シ之ヲ貸與スヘシ但其貸與ノ手續ハ都テ前則ニ準スヘシ

第八則　借覽ノ圖書ヲ返納スルモノアルトキハ圖書出納簿ニ借覽人ノ自署捺印セルモノヲ消抹シ且其返納ノ年月日ヲ記シ領收者ノ證印ヲ爲スヘシ但特許證ヲ返納セルトキハ該證ニ領收ノ年月日ヲ記シ證印ヲ爲スヘシ

第九則　圖書借覽中其圖書ヲ毀損又ハ亡失セルモノアルトキハ借覽人ヲシテ其毀損又ハ亡失セル事由書ヲ差出サシムヘシ

第十則　前則ノ場合ニ於テ圖書取扱規則第十五條ニ據リ借覽人ヲシテ同一ノ圖書ヲ購還若クハ相當ノ代價ヲ辨償セシムルコトアルトキハ借覽人ヨリ差出セル事由書ヲ付シ上局ニ開申シテ其指揮ヲ請フヘシ

第十一則　本院所藏ノ圖書ハ毎年五月十一月ヲ以テ檢査ノ期限トシ其兩期ニ於テ之レヲ檢査スヘシ



國憲取調局ヲ閉チ更ニ編纂局ヲ置ク　十九年四月二十日廢ス

第十二則　院中ニ於テ借覽スル圖書ハ毎二月各課掛常備ノモノハ毎三月之ヲ檢査スヘシ但院外ニ滯出セルモノハ其貸與ノ日ヨリ三十日以内タルヘシ

第十三則　毎期圖書檢査中ハ公務ニ依リ要用ナルモノヲ除クノ外都テ貸與ヲ中止スヘシ

第十四則　圖書返納ノ期ニ至リ故ナクシテ返納セサルモノアルトキハ課長ヨリ之ヲ督促スヘシ但督促シテ猶返納セサルトキハ其旨ヲ上局ニ開申シテ指揮ヲ請フヘシ

第十五則　圖書借覽中他廳ニ轉任又ハ免職ノモノアルトキハ借覽人ヲシテ速ヤカニ返納セシムヘシ但各課掛ニ於テ常備ノ圖書ヲ管掌スルモノ本則ノ場合ニ係ルトキハ其課掛中後任ノモノヲシテ更ニ證印ヲ爲サシムヘシ

第十六則　圖書出納表ハ毎月ノ終リニ於テ月表ヲ作リ猶一年ノ終リニ於テ總計一閲表ヲ製シ上局ノ檢閲ニ供スヘシ

庶務課ヨリ元老院ヘ伺十四年三月十一日

本課細則別册ノ通御定相成可然哉此段相伺候也

---

元老院達　十四年三月二十三日

今般國憲取調局ヲ閉チ更ニ編纂局ヲ置候條此段相達候事

元老院ヨリ外務省ヘ照會十七年九月八日

歐米各國議院ノ制規其他憲法ニ關スル事件等本院參考ノ爲メ從來調査致居候處猶實地ニ就キ取調候ヤテハ明瞭致サヽル事項モ間々有之候折柄今般九鬼全權公使米國駐劄相成候ニ付テハ本院ニ於テ調査難行屆事項有之候節ハ時々箇條書ヲ以テ問合セ申度候間詳細報告相成候樣致度右ハ同公使ニ於テハ極メテ御手數ノ至リトハ存候得共兼テ本院事務ノ實況熟知相成居候事ニモ有之旁以テ依賴致度儀ニ有之候此段豫テ同公使ヘ御示談置相成度御依賴旁及御照會候也

追テ本院ニ於テ調査ノ爲メ有用ト認メラレ候新刊書籍有之候節ハ詳細承知致度且官府ノ印行ニ係リ民間ニ於テ賣買不致分ハ可成御請求御交付ノ程相望候間是又公使ヘ御示談置相成度此段添テ及御依賴候也

外務省回答十七年九月十日

歐米各國議院ノ制規其他憲法ニ關シ實地取調ヲ要スル事件ハ九鬼全權公使米國ヘ赴任ノ上貴院ヨリ御問合相成度ニ付テハ其旨同公使ヘ及示談置候樣御依賴ノ趣幷ニ其他去八日附甲第百六十號ヲ以テ御申

越ノ趣致領承候即御來意ノ通リ同公使ヘ申合置候間左様御承知有之度右回答申進候也

## 建白課細則　十四年五月二十四日

建白課細則　十九年四月二十日分課ヲ改ム

本院事務局條例建白書取扱順序ヲ遵行シ本課ノ事務ヲ管理スル爲メ細則ヲ設ケ主簿典籍錄事ノ三掌ヲ定ム

主簿

建白書ノ處分及需用物品印刷謄寫書籍購求等ノ事ヲ掌ル

第一　建白書ヲ庶務課ヨリ回送シ來レハ其本貫姓名職業住所幷ニ建議ノ題案ヲ件名簿ニ登記シ建白書ノ表紙ニ主任ノ姓名及ヒ年月日號數ヲ朱書シ議題ヲ記シ上局ノ檢閲ヲ經テ取調委員ニ出シ委員例規ノ區分ヲ注シテ下付アレハ議官連名表ヲ副ヘテ更ニ委員ニ出シ議官ノ回覽畢リテ上局ニ出ス

第二　建白書ノ區分採擇又ハ參照ニ屬シ太政官若クハ主任官廳ノ檢閲ニ供スルモノハ正本ヲ庶務課ニ送付シ副本ヲ本課ニ留メ廢棄スルモノハ本課ニ留メ却下スルモノハ正本ニ理由ヲ記シテ庶務課ニ送付シ副本ヲ本課ニ留ム

第三　建白書一覽表ハ其號次ニ從テ毎三箇月ノ末ニ之ヲ作リ又毎半年ノ末ニ之ヲ作リテ印刷ニ付ス

第四　需用物品ハ領收券ニ品目員數年月日ヲ記シテ會計課ヨリ領收ス同課常備外ノ物品ハ特ニ照會シテ購求ス

第五　本課ニテ編成ノ書籍ヲ印刷ニ付スルトキハ淨書校正畢リテ庶務會計兩課ニ回送シ上局ノ檢閲ヲ經庶務課ニテ印刷ヲ命ス

第六　文書ノ謄寫ハ課中ニテ擔當ス至急ヲ要スルトキハ庶務課ニ送付シ時宜ニヨリ庶務課ニ照會シテ寫字生ヲ課中ニ傭入ル

第七　需用ノ書籍ハ庶務課ニ照會シ之ヲ領收シテ常備トス同課ニ備ヘサルモノ及新刻ノ書籍ヲ購求スルモ亦同シ





第八　官廳ノ告達書ハ課員回覽ノ後官令錄ニ傳寫シ本院ノ達書ハ其要旨ヲ回達錄ニ抄記シテ後他課ニ送付ス

第九　官廳往復ノ文書ハ其指ス所ノ氏名ヲ送致簿ニ記載シテ庶務課ニ送付ス

第十　伺指令其他一切ノ文書ヲ保存ス

第十一　課印及ヒ書函ノ鍵鑰ヲ管守ス

曲籍

文書圖書ノ保護出納ヲ掌ル

第一　常備書類ハ類目ヲ分チ部數卷數ヲ簿册ニ記ス

第二　常備書籍ハ帶出ヲ禁ス若シ各課ニ於テ必用ナルトキハ之ヲ許スト雖トモ二十日ヲ限ル而シテ本課ニ於テ需用アルトキハ二十日以内ト雖トモ之ヲ返付セシム

錄事

文書ノ謄寫校正ヲ掌ル

第一　建白書及ヒ一切ノ文書ヲ謄寫校正ス

第二　毎日施行シタル事件ヲ日誌ニ記注ス

建白課ヨリ元老院ヘ伺十四年五月二十四日

本課細則別册ノ通相定施行致度仍テ此段相伺候也

---

庶務會計兩務ヨリ元老院ヘ伺定　十五年二月二十八日

本院門衛巡査本月限リ引揚候旨警視廳ヨリ照會有之候處右ハ通常ノ門衛ニテハ取締上甚不都合ニ付更ニ等外吏六名是迄ノ巡査ハ八名ニテ交代採用相成門衛務メ方ノ儀モ從前ノ巡査同樣ニ爲致候ハヽ取締向行屆キ可申ト存候依テ別紙服制幷費用書取調相伺候也別紙略之

等外吏ヲ以テ門衛ト爲ス

元老院門衛職務心得書　十五年四月一日

一本院門衛ハ庶務課ニ隷屬ス

一門衛ノ總員ヲ分チ甲乙二部トナシ其一部ヲ以テ一晝夜當直ノ定員トス但定員ノ外臨時增員ヲ要スル場合ニ於テハ前日ノ當直者ヲシテ加員セシムルコトアルヘシ

一勤務中ハ必ス定服ヲ著用スヘシ

一每朝交代ノ時刻ハ一般ノ出仕時限ヨリ三十分前タルヘシ

一交代ノ後本課設備ノ出勤簿ヘ捺印スヘシ

一交番所勤務中ハ殊ニ愼肅ヲ旨トスヘシ

一甲乙部中ニ疾病事故アリテ出勤ナシ難キモノアルトキハ互ニ補助シ必ス定員ヲ缺クヘカラス

一門衛ノ諸願伺屆書等ハ門衛取締之レニ捺印シ本課ニ出スヘシ

一交番所ニ屬スル消耗物品及備品ノ請求ヲ要スルトキハ都テ門衛取締ヨリ本課ニ申請シ其手續ヲ經テ然ル後會計課ヨリ領受スヘシ

一夜間日沒ヨリ日出マテハ定員三分ノ二ヲ以テ其時間ヲ定メ順次ニ交番スヘシ

一本院ノ揭牌ヲ管守スヘシ

一諸門ノ鍵鑰ヲ管守シ表門ノ外本課ノ指揮アルニ非サレハ他ノ諸門ヲ開扉スルヲ得ス但非常ニ當テハ本課又ハ判任官當直者ノ指揮ニ從ヒ臨機諸門ノ開閉ヲナスヘシ

一表門ハ休暇日ヲ除クノ外定時限ヨリ二時前之ヲ開扉シ諸官員退出ノ後之ヲ閉扉スヘシ

但小門ハ日出ニ開扉日沒ニ閉扉スヘシ

一本院正副議長及幹事議官昇降ノ節ハ必ス立禮ヲ爲スヘシ

一本院及各廳奏任官以上ノ門內ニ於テ下乘下馬ハ明治九年太政官達第四十二號ノ通リ心得ヘシ

一建白人及ヒ其他ノ士民本院ニ入ラントスル者ハ貫族ヲ記シタル名刺ヲ出サシメ之ヲ帳簿ニ記載シ置クヘシ





一諸工商人等本院ニ出入スルトキハ必ス門鑑ヲ改メ而ル後通行セシムヘシ

一木石及下掃除塵芥等ノ運搬ハ總テ東門ヨリ通行セシムヘシ

一建白人又ハ强訴强願人若クハ發狂人等ノ者アリテ掛リ官吏ノ說諭ヲ用ヒス或ハ事粗暴ニ涉ルモノアルトキハ本課ノ指揮ヲ受ケ最寄警察署ニ通知シ其處分ニ從事スヘシ

一諸商工人及車夫馬丁等物品ヲ携帶シテ出門セントスル者アルトキハ本課幷ニ會計課ニ於テ下附セル物品携帶證書ヲ查收シ其姓名ヲ帳簿ニ登記シ物品ト證書ト符合セルヤ否ヲ檢スヘシ若シ其證書ニ符合セサル物品ヲ携帶スルトキハ出門ヲ止メ速ニ本課ニ開申シテ其指揮ヲ請フヘシ

但シ查收セシ携帶證書ハ之ヲ取束ネ翌朝土曜日ハ翌々日本課ニ差出スヘシ

一休暇日及諸官員退出ノ後本院ニ入ル者アルトキハ必ス其身分姓名ヲ問ヒ其出入ノ時刻トモ之ヲ帳簿ニ詳記シ翌朝土曜日ハ翌々日本課ニ出シ檢閱ヲ受クヘシ

一夜中各官廳ヨリ御用使アルトキハ其廳名及出入ノ時刻ヲ帳簿ニ詳記スヘシ

一夜中日沒ヨリ日出マテ出門證書ヲ携帶シテ出門スル者アルトキハ其人名幷時刻等ヲ帳簿ニ登記シ而ル後通行セシムヘシ

一本院搆內室內ヲ除ク ノ巡邏ハ日夜三十分間每ニ一名宛必ス之ヲ務ムヘシ但暴風雨又ハ特ニ非常ヲ警ムルコトアル時ハ臨時ノ巡邏ヲ爲シ別シテ注意ヲ加ヘシ

一巡邏中ハ專ラ本院搆內及各室ノ外圍書庫又ハ物置場等ニ注意ヲ加ヘシ若シ異常ノコトアルトキハ速ニ本課又ハ判任官當直者ニ開申シテ其指揮ヲ請クヘシ

一本院ノ會議傍聽ヲ禁スルトキハ開會中ハ議事堂搆內ノ巡邏ヲ見合スヘシ

一巡邏輪番帳ヲ製シ每回巡邏ノ時刻ヲ記シ之レニ捺印ヲ爲スヘシ

一本院近火本課細則第三十二則ノ區域內 又ハ非常ノ警アルトキハ當直者ハ勿論非番ノ者ト雖モ速ニ出仕シ專ラ防禦ニ力ヲ盡スヘシ

一院中ニ於テ若シ不審ト認ムル者アルトキハ其身分姓名住所ヲ尋問シ且ツ其本人ヲ留メ置キ速ニ本課

議案調査方法ヲ定ム

又ハ判任官當直者ニ開申シテ其指揮ヲ受クヘシ但シ尋問ノ際暴行ヲ爲シ又ハ現行犯ノ確證アルモノハ臨機之ヲ處分シ然ル後本課又ハ判任官當直者ニ開申スルヲ得ヘシ

一馬丁又ハ車夫等不正ノ所爲アルトキハ其姓名ヲ問ヒ本課ニ開申シテ其指揮ヲ請クヘシ

庶務課ヨリ元老院ヘ伺十五年四月一日

本院門衛職務心得書別冊ノ通御定相成可然哉相伺候也

調査課ヨリ元老院ヘ伺定　十六年二月五日

議案幷意見書調査ノ儀將來尚一層精密ヲ加ヘ度候ニ付テハ別紙ノ通調査方法相定置申度此段奉伺候也

（別紙）

議案調査

一議案竝參考書類ハ上局ノ命アルニ非サレハ其秘密ニ係ルト否トヲ問ハス各議官ヘ頒布ノ際同時ニ議事課ヨリ本課書記官ヘ送致相成度事

一議案下附アルトキハ其事件ニ依リ上局ヘ上申ノ後議長ノ名ヲ以テ內閣委員ノ出院ヲ請ヒ質疑致度事

一議案若クハ本院意見書調査ノ爲メ本課書記官中ニ主査ヲ置キ其議案ニ付內閣委員竝主務省ヘノ質議ヲ爲シ本課書記官ノ會議ヲ經テ之ヲ課長又ハ主査ヨリ上局ニ上陳致度事

一至急ヲ要スル議案ヲ除クノ外本課長又ハ主査ヨリ上局ヘ調査濟上陳ノ上第一讀會御開キ相成度事

辭令　十六年五月十六日

大書記官　森山茂

官報報告掛長申付候事

二等書記生　稻垣勝義

官報報告掛兼務申付候事

五等書記生　前田正一

同

官報報告掛ヲ設ク

同

官報購讀者ニ係ル事務ヲ庶務會計兩課ニ分擔ス

同

同

踏儀式幷御祭典參候ノ節勅奏判任官總代者取扱心得

內閣ヨリ元老院ヘ照會十六年五月十一日

官報發行ノ事ハ全ク新創ノ業ニ係リ特ニ諸官廳ノ報告ヲ第一トスルモノニ有之先ツ報告ノ道十分相付不申候ヘハ發行ニモ難至且ツ報告ノ道相付候上二三週間ハ試驗ノ爲メ日々編輯爲致度ト存候儀ニ付速ニ主任官選定相成文書局トノ間ニ往復通信ノ道相開候樣致度此段及御照會候也

元老院回答十六年五月十四日

官報發行ニ付主任官選定文書局ト往復通信ノ道相開候樣致度云々御照會ノ趣承知候依テ本院大書記官森山茂ヘ主任申付萬事文書局ト打合候樣致指圖置候間此段回答候也

同　喜多川廣成

八等書記生　甘露寺永定

庶務會計兩課ヨリ元老院ヘ伺定　十六年五月三十日

官報購讀者ノ氏名幷約束金等取扱方手續ノ儀ニ付今般驛遞總官ヨリ照會ノ旨ニ依リ伺濟ノ上御回答相成候ニ付テハ右宿所幷豫約ノ期限等ニ關スル事務ハ庶務課ニ於テシ其金額取纏メ受授ニ關スル事務ハ會計課ニ於テ取扱候事ニ御治定相成其段院中夫々通牒致置候テ可然哉此段相伺候也

同　横山湛吉

庶務課ヨリ元老院ヘ伺定　十六年六月二十五日

諸儀式幷御祭典等ノ節勅奏判任官總代者取扱方ノ儀是迄一定ノ御內規モ無之候處今般從前取扱來リ候慣例ヲ參酌致別紙ノ通取調候ニ付本課限リ取扱心得トシテ豫テ御定メ置相成可然哉相伺候也

同　林茂淳

（別紙）

諸儀式幷御祭典參候ノ節勅奏判任官總代者取扱心得

一勅奏判任官總代ノ順序ハ等級又ハ叙位ノ前後ニ拘ハラス洩テ拜命ノ順次ヲ以テ之ヲ定ム

一各總代人ハ本官ノ者ノミヲ以テス但本院ニ兼官ニシテ專務ノモノハ（非役武官ノ者モ亦同）總代ノ員ニ加フヘシ

一御用ニ付巡回出張又ハ忌引中總代ノ順番ニ該ルモノアルトキハ一順總代濟ノモノト倣シ次順ノ者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

一病氣引籠若クハ願濟旅行等ノ者總代順番ニ該ルモノアルトキハ次順ノ者ヲ以テ之ニ充テ追テ本人歸京又ハ出仕ノ上本順ノ總代ヲ爲サシムヘシ

一總代人名簿ヲ製シ命免及ヒ參候ノ事由幷ニ年月日ヲ詳記スヘシ

蒸汽鑵温管設置ニ付火夫ヲ雇入レ會計課營繕掛ニ附屬ス

會計課ヨリ元老院ヘ伺定　十六年十月二十六日

蒸氣鑵温管落成ニ付火夫ノ儀諸職工同樣本課ニ於テ雇入營繕掛ヘ附屬爲致可然哉此段相伺候也

本文ノ通ニ付テハ氣鑵温管幷ニ之ニ屬スル機械及建造物等本課ニ於テ管守致シ可然哉此段併セテ相伺候也

火夫勤務心得

火夫勤務心得　十六年十月二十六日

火夫ノ本務ハ會計課營繕掛員ノ指揮ヲ受ケ氣鑵温管ノ取扱ヲナシ及之ヲ監守スルモノトス

火夫タル者ハ必ス身元技術ノ保證人ヲ立ツヘシ

本務ニ付每日氣鑵室ノ開閉ハ門衛吏ノ點檢ヲ受ヘシ

但鍵鑰ハ判任官宿直員ニ預ケ置クモノトス

起業及止業時限ハ判任官宿直員ノ檢印ヲ受ケ每翌朝其就業簿ヲ本掛員ニ差出スヘシ

本務定時間ハ每午前七時ニ先ツ焔管及煙突ヲ一掃シ了テ鑵内ニ點火シ同八時ニ蒸氣ヲ各席ノ温管ニ達セシメ爾後過不及ナキ樣注意シ午後三時（土曜日ハ正午）ニ鑵火ヲ滅シ同五時ニ氣鑵室ヲ閉チ毫モ危害ナキヲ專要トスヘシ

但開議或ハ各官員退院セサルコトアルトキハ其時々本掛員ノ指揮ニ據リ時限ヲ伸縮スルコトアルヘシ

點火中ハ漫リニ水量ヲ增減シ一時ニ過量ノ燃料ヲ徒費シ過力ノ蒸氣ヲ發動セシメス如何寒日ト雖モ大抵三十五封度ヨリ多カラス二十封度ヨリ少カラサル氣力ヲ定用スヘシ若シ本掛員外ノ吏員ヨリ氣力ノ高度ヲ促スト雖モ決シテ承諾セサルヘシ

就業中他員ヲシテ氣鑵室ニ立入ラシムヘカラス若シ諸器械ニ觸手毀損セシムルハ勿論各席内外ノ逼塞栓ニ觸ルモノアラハ其氏名ヲ諮問シ速ニ本掛員ニ申告スヘシ

鑵内餘燼ノ鎮滅及氣鑵室内ノ積炭等ハ常ニ火災ノ虞ナキ樣嚴ニ注意シ鑵ノ周圍ニ水ヲ灌クヘシ

氣鑵及温管ノ裝置其他所屬ノ諸器械ハ毀損ナキ樣專ラ注意シテ之ヲ取扱フヘシ

器械ノ一部分ニ毀損ヲ生スルトキハ直チニ本掛員ニ申告シ之カ修繕ヲ乞フヘシ

但取扱中怠惰ヨリ毀損ヲ生スルトキハ火夫ノ責任トシテ相當ノ處分ヲナスコトアルヘシ

氣鑵ノ煤煙及湯滓其他器械ノ掃除ハ每土曜日午後ニ從事スヘシ

但夏秋ノ交保存ノ爲メ氣鑵ニ點火シ及諸器械ヲ掃除スルトキハ此限ニアラス

定時外早出居殘リヲ爲シ若シ午後十時ニ及ヒ宿院セントスルトキハ判任官宿直員ニ其旨ヲ申告シ許可ヲ受クヘシ

臨時疾病事故アリテ闕勤スルトキハ正當ナル代人ヲ出シ本務ニ支障ナカラシムヘシ

但代人取扱中諸器械ニ毀損等ヲ生スルトキハ本屬ノ火夫及其保證人ニ責任ヲ負ハシムヘシ

一週間以上闕勤スルトキハ保證人ヨリ更ニ代人ヲ出サシムヘキモノトス

會計課ヨリ元老院ヘ伺　十六年十月二十六日

火夫勤務心得別冊ノ通相定メ可然哉此段相伺候也

調査課中故衛心得

調査課達　十六年十二月六日　課中書記生以下

御用都合モ有之爾來別紙ノ通リ御心得有之度此段及御達候也

（別紙）

一各自不得止事故有之退出例刻前ニ退出候者ハ其都度課長又ハ次席書記官ノ承諾ヲ得候上退出相成度事

一事務ノ都合ニ依リ當課書記官居殘リ候節ハ書記生ハ假令退出例刻ニ至リ候トモ一應申出退出相成度事

一今般上局ノ内達ニ依リ修正委員被置候節ハ當課書記官主査ノ中退出例刻後ト雖モ事務ノ都合ニ依リ引殘リ候内規ニ付主査書記生モ同樣御心得有之度候事

庶務課ヨリ元老院ヘ伺定　十七年一月十五日

從來本院庶務課附屬相成居候圖書掛右ハ向後調査課附屬ニ相成候樣仕度此段相伺候也

元老院達　十七年一月二十八日

庶務課管守ノ圖書自今調査課ヘ管守セシメ候條此段相達候事

庶務課附屬ノ圖書掛ヲ調査課ニ屬ス

## 院中取締規則

院中取締規則　十九年四月十二日

二十年三月三十日規則中改正アリ

第一條　庶務課ニ院中取締員三人ヲ置ク

第二條　院中取締員ノ外各課各室ニ早出居殘員各一人ヲ置キ判任官ヲ以テ之ニ充ツ

第三條　各課判任官以下退散ノ節ハ其擔當セル書類及物品ヲ整頓シテ該室居殘員ニ告ケ退散スヘシ

第四條　各課日常緊要ノ書類物品ハ之ヲ宿直員ニ附托シ領收ノ證印ヲ取ルヘシ

第五條　早出員ハ上廳時限ヨリ三十分時間前ニ出院シテ其旨院中取締員ニ報スヘシ院中取締員ハ其人名ヲ各室點檢簿ニ登記シ宿直判任官及ヒ早出員ト共ニ其室ヲ開扉シ異狀ノ有無ヲ該簿ニ記載スヘシ而シテ早出員ハ其室詰ノ課僚參集スルマテ室内ヲ監守スヘシ

第六條　居殘員ハ課僚退散セルヨリ其室扉ヲ閉鎖スルマテ室内ヲ監守スヘシ火鉢其他ノ諸器物取片付及室内ノ掃除等全ク畢リテ鎖扉スヘキヲ認メハ其旨院中取締員ニ報スヘシ院中取締員ハ其人名ヲ各室點檢簿ニ登記シ然後宿直判任官及ヒ居殘員ト共ニ室内ヲ改メ火氣ハ勿論扉戸ノ締リ書類物品ノ散逸有無等ニ篤ト注目シ異狀ナキニ於テハ室扉ヲ鎖シ時刻幷ニ異狀ノ有無ヲ該簿ニ記載スヘシ

第七條　事務ノ都合ニヨリ特ニ早出居殘ヲ爲ス者ハ之ヲ院中取締員ニ報スヘシ院中取締員其姓名及ヒ上廳放衙ノ時刻ヲ帳記シテ翌朝本課ノ檢印ヲ請クヘシ

第八條　室扉ヲ鎖スノ後萬止ムヲ得サル事故アリテ其室ニ入ラントスルトキハ宿直判任官一人院中取締員一人立會ノ上タルヘシ院中取締員ハ開鎖ノ時刻及ヒ其事ノ顛末ヲ各室點檢簿ニ詳記スヘシ

第九條　院中取締員ハ諸門及ヒ議事堂院中各室機關室各倉庫各物置郵便函ノ鎖鑰ヲ管守シ出門證ヲ製出ス

但表門脇小門ノ鍵ハ門衛ニ於テ之ヲ管守ス

第十條　表玄關ハ上廳時一時間前ニ開扉シ放衙後三十分ニ閉鎖スヘシ

第十一條　内玄關ハ日出ニ開扉シ日沒ニ閉鎖スヘシ

第十二條　議事堂ハ會議日ニ開扉シ平常ハ閉鎖スヘシ

第十三條　物品ヲ携帶スルモノヽ出門證ハ院中取締員ニ於テ玄關受付掛ノ通知ヲ得ハ式ニ依リ甲乙二葉ヲ製シテ之ヲ交付スヘシ玄關受附掛ハ之ヲ帳記シテ甲號證ヲ門衛ニ交附シ乙號證ヲ出門者ニ附與スヘシ門衛ハ其甲號證ト乙號證トヲ照査シテ符合セハ出門セシメ而シテ甲乙兩證ハ玄關受附掛ヲ經テ院中取締員ニ還附スヘシ

第十四條　夜中出門スル者ノ出門證ハ院中取締員ニ於テ直ニ本人ニ交附シ本人ハ之ヲ門衛ニ交附シ門衛ハ之レヲ院中取締員ニ還附スヘシ

第十五條　院中取締員ハ時々院中構内ヲ巡視スヘシ

第十六條　院中取締員ハ郵便函ヲ開鎖シ其來信ノ宛名ヲ帳記シテ本課ノ檢印ヲ受クヘシ

第十七條　各室點檢簿ハ每朝本課ノ檢印ヲ受クヘシ

第十八條　門衛及ヒ湯呑所煖管機關室ノ取締ハ別ニ定ムル規則ニ據ル

庶務課ヨリ元老院ヘ伺十九年四月十二日
院中取締規則別紙ノ通御定相成爾來右規則ニ依リ嚴重ニ取締仕度此段相伺候也

## 元老院議長達　十九年四月二十日

編纂局相廢候事

## 元老院達　十九年四月二十日

今般元老院處務規程別紙ノ通相定候事
但從前ノ元老院事務局條例ハ廢止ス

元老院處務規程

第一條　元老院ノ常務ヲ處理スル爲メ第一課第二課第三課第四課ヲ置キ其分掌ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一課
一　議長親展ノ文書及機密事務
二　議長副議長ノ官印及院印ノ管守
三　職員ノ進退身分ニ關スル事項
四　記錄ニ關スル事項
五　官報局ノ報告ニ關スル事項

第二課
會議ニ關スル事項

第三課
一　建白ニ關スル事項
二　制度法律ノ照査編纂
三　外國文書ノ飜譯





四　圖書ノ管守

第四課
一　會計ニ關スル事項
二　公文書類ノ往復ニ關スル事項
三　營繕及各課ニ屬セサル一切ノ事項

第二條　各課ニ長一人ヲ置キ書記官ヲ以テ之ニ充ツ
第三條　課長ハ課務ニ關スル細則ヲ草シ議長ノ裁決ヲ經テ之ヲ施行スヘシ
第四條　課長ハ議長ニ開申シテ附屬官吏ノ分掌ヲ定ムヘシ
第五條　各課勤務ノ書記官ハ課長ヲ輔助シ課長疾病事故アルトキハ其事務ヲ代理ス
第六條　會議ニ當テ主任書記官缺席スルトキハ他ノ書記官ニ命シテ其事務ヲ代理セシムルコトアルヘシ

元老院上申十九年四月十三日
今般勅令第十一號ヲ以テ本院官制御改正相成候ニ付テハ右官制ニ基キ本院事務局規定別紙ノ通御裁定相成候樣致度此段及上申候也
追申先般差出置候本院事務規程草案御下戻シ相成度候也
指令十九年四月十六日
論議之通
但附箋ノ如ク修正スヘシ
内閣書記官議案十九年四月十五日
元老院議長請議同院事務規程附箋之通修正認許可相成哉
元老院上申十九年四月二十日
明治十九年四月十六日御裁定相成候元老院處務規程今二十日ヨリ實施候ニ付此段上申候也
元老院達各課長十九年四月二十日
今般處務規程被相定從前ノ各課相廢候ニ付テハ追テ何分ノ儀相達候迄不及出院旨各課判任官以下ヘ相達候處一時事務辨理ノ爲メ各課長見込ヲ以テ適宜ノ人員出院可爲致此段相達候也



## 院中取締以下服務心得　十九年十月二十五日

院中取締服務心得

第一　院中取締規則ヲ遵守シ院内外ノ巡邏諸門各室ノ開閉及ヒ通行人出入物品ノ監査又ハ流行病火盗難ノ豫防等ニ注意スヘシ

第二　門衛ノ出入人名簿出門證控簿物品携帶證控簿巡邏輪番簿ヲ檢シ庶務掛ノ査閲ヲ請クヘシ

第三　雜務掛玄關受附掛小使ノ宿直人員及其巡視時刻ヲ定メ庶務掛ノ承認ヲ得テ服行スヘシ

第四　小使ノ出勤簿ヲ其席ニ備ヘ目前ニ於テ捺印セシメ他人ノ印ヲ代捺スルヲ禁スヘシ但出勤時刻ヨリ十五分ヲ過キテ出勤スル者ハ遲參ノ印ヲ捺シ退出時刻ヨリ十五分前ニ退出スル者ハ早引ノ印ヲ捺シ若シ公事ニ依リ遲參スル者ハ其旨屆出シムヘシ

第五　小使ノ衆ニ超ヘテ勉勵スル者又ハ怠惰ニシテ用ヲ辨セサル者アルトキハ其旨ヲ庶務掛ニ申出ヘシ

第六　小使傭入ノトキハ一定ノ雛形ニ準據シ必ス保證狀ヲ取リ庶務掛ニ申出ヘシ

第七　新タニ物品ヲ要スルトキハ請求書ヲ以テ庶務掛ニ申出ヘシ

第八　臨時賄ヲ要スルコトアルトキハ其理由ヲ庶務掛ニ申出ヘシ而シテ毎月二十五日該證書ヲ添ヘ用度掛ニ差出スヘシ

第九　雜務掛及玄關受付掛ニ於テ取扱フタル月表年表ヲ製シ庶務掛ニ差出スヘシ

雜務掛服務心得

第一　本掛中ニ於テ備用品掛消費物掛ヲ定メ各其事務ヲ擔任スヘシ

第二　院中各室扉窓戸日覆ノ開閉及掃除等ノ爲メ早出居殘員ヲ定置クヘシ

第三　上局及議事堂又ハ各室等小使ニ託シカタキ場所ハ必ス掛員自ラ掃除ヲナシ椅子テーブル等ノ位置ヲ整列スヘシ其小使ニ託スル場所タリトモ掛員一名必ス立會指揮スヘシ

第四　議事堂及各席ノ備品幷ニ掛員ノ管守スル火鉢煙草盆土瓶其他ノ物品又ハ小使ニ交付シ置ク法被笠挑灯ノ類其他小使詰所ニ備フル物品ハ時々調査シ損失物アルトキハ速ニ院中取締ニ申出ツヘシ

第五　茶炭薪油蠟燭石炭脂肪馬匹飼料等ノ消費物ハ元入レ小出シ共小使又ハ馬丁等ノミニ託スヘカラス必ス立會其員數斤量ヲ點檢シ出納簿ニ其月日員數斤量ヲ詳記シ立會人檢印ヲ捺スヘシ

第六　備用品及消費物ノ受拂合計ニハ院中取締ノ檢印ヲ受クヘシ但消費物ハ毎月增減比較簿（前月ト比較ヲ）製シ院中取締ニ差出スヘシ

第七　院中各室内ノ備品及交換品又ハ不用品ヲ用度掛ニ返還スルトキハ其出納簿ニ月日品名ヲ詳記シ院中取締ニ差出スヘシ

第八　日々取扱フ火鉢煙草盆ハ朝夕其數ヲ點檢シ最モ火災ヲ豫防スヘシ

第九　小使ニ託シ送達シ難キ物品及文書ノ類ハ玄關受付掛ト協議處辨スヘシ

第十　本院内外不潔ノ場所アラハ小使ヲ指揮シテ速ニ掃除セシムヘシ

第十一　判任官以下宿直辨當ハ日々其數ヲ調査シ小使ヲシテ各室ニ配付セシムヘシ

第十二　馬車人力車ヲ管守スヘシ

第十三　本院周圍ノ溝垣及議事堂其他各室内外一於テ修繕ヲ要スルコトアルトキハ院中取締ニ申出ツヘシ

玄關受付掛服務心得

第一　本院ヨリノ往翰ハ封皮上ノ姓名ト其小使ノ姓名時刻トヲ帳記シ之ニ持參又ハ郵便ノ記號ヲ付シ速ニ發送スヘシ

第二　各廳及其他ヨリノ來翰ハ其廳名人名時刻ヲ帳記シ直ニ庶務掛（退廳後及休日ハ宿直判任官）ニ交付スヘシ

第三　貴重ノ物品又ハ往復書等ノ小使ニ託シ難キモノハ雜務掛ト協議處辨スヘシ

第四　本院ヨリ往翰ノ取扱ハ必ス庶務掛ヲ經タルモノニ限ルヘシ

第五　臨時ノ御用ヲ辨スル爲メ早出居殘員ヲ定メ置クヘシ

第六　至急御用ヲ辨スル爲メ小使ヲ乘車セシムルトキハ庶務掛ノ承認ヲ經ヘシ

第七　御用使ヲ發スルカ爲メ小使順番札ヲ揭ケ置キ輪次發遣スヘシ

第八　御用使ハ總テ速ニ辨スルヲ旨トス故ニ其往返ノ時間ヲ詳記シ怠惰ノ者アラハ之ヲ督責スヘシ

第九　表玄關昇降口ハ掛員三名出張スヘシ

第十　表玄關ハ靴ノ外昇降ヲ制止スヘシ

第十一　總テ禮ヲ行フトキハ帽ヲ脫スヘシ喫煙又ハ談笑スヘカラス

第十二　各課室內ニ入ルトキハ帽ヲ脫スヘシ

第十三　本院幷各廳勅任官參院又ハ退院スルトキハ一名昇降口ニ出テ立禮ヲ行フヘシ

第十四　本院幷各廳奏任官昇降ノ節ハ椅子ヲ離レテ立禮ヲ行フヘシ

第十五　本院奏任官以上出院又ハ退院ノ節ハ各部議官席及各課ニ設ケアル人名牌ヲ揭出スヘシ

第十六　面謁ヲ乞フモノアルトキハ其官名又ハ族籍ヲ記シタル名刺ヲ出サシメ其時刻姓名及面謁ヲ乞フヘキ課名人名ヲ帳記シ而後其名刺ヲ其指名セルモノニ傳フヘシ

第十七　議事傍聽人參院セシトキハ名刺幷傍聽牌ヲ出サシメ其時刻及官名族籍姓名ヲ帳記シ而後其名刺ト傍聽牌ヲ第二課ニ傳フヘシ

第十八　建白人參院セルトキハ族籍ヲ記シタル名刺ヲ出サシメ其時刻姓名ヲ帳記シ而後其名刺ヲ庶務掛ニ差出スヘシ

第十九　面謁人及ヒ建白人議事傍聽人ハ各其定メアル席ニ案內スヘシ若シ不審ノモノト認ムルトキハ速ニ院中取締ニ密告スヘシ

第二十　應接所ニ備ヘアル硯箱幷附屬品ヲ監守シ該室ニ於テ自他物品ノ紛失ナキヲ要スヘシ

第二十一　物品ヲ携帶シテ出門セントスルモノアルトキハ先ツ其物品ヲ檢査シ之ヲ院中取締ニ告ケ甲乙物品携帶證二葉ヲ受ケ時刻品名姓名番號ヲ帳記シ然ル後甲號證ヲ門衛ニ交付シ乙號證ヲ本人ニ附與スヘシ

第二十二　受付所ニ於テ取扱フ往復書翰及建白人面謁人議事傍聽人等ノ員數ハ一箇月ノ終ニ於テ增減比較簿前月ト比較ヲ製シ院中取締ニ差出スヘシ

門衛服務心得





第一　門衛ノ總員ヲ甲乙二部ニ分チ其一部ヲ以テ一晝夜當直ノ定員トス若シ定員外增員ヲ要スル場合ニ於テハ前日ノ當直者ヲシテ加員セシムヘシ

第二　甲乙部中ニ疾病事故アリテ缺勤スル者アルトキハ互ニ其缺ヲ補ヒ定員ヲ闕クヘカラス

第三　日沒ヨリ日出マテハ定員三分ノ二ヲ以テ順次番衛スルモノトス

第四　每朝交代ノ時刻ハ院中ノ上廳時刻ヨリ三十分前タルヘシ

第五　勤務中ハ必ス一定ノ服帽タルヘシ

第六　番衛中ハ特ニ愼肅ヲ旨トスヘシ

第七　本院幷各廳勅奏任官參院又ハ退院スルトキハ立禮ヲ行フヘシ

第八　總テ禮ヲ行フトキハ帽ヲ脫スヘシ喫烟又ハ談笑スヘカラス

第九　各課室內ニ入ルトキハ帽ヲ脫スヘシ

第十　本院ノ揭牌及ヒ表門脇ノ小門ノ鍵ヲ管守スヘシ

第十一　表門ハ休暇日ヲ除クノ外上廳時限ヨリ一時前ニ開扉シ放衙後三十分ニ閉鎖スヘシ小門ハ日出ニ開扉シ日沒ニ閉鎖スヘシ

第十二　表門開扉中建白人其他ノ士民本院ニ入ルモノアルトキハ其身分姓名ヲ尋問シ姓名ト時刻トヲ帳記スヘシ若シ不審ノモノト認メタル場合ニ於テハ之ヲ留メ置キ院中取締ノ指揮ヲ請ヘシ但表門閉鎖中小門ヨリ出入スル者モ亦同シ

第十三　建白人又ハ强訴强願者若クハ發狂人等ニシテ掛官員ノ說諭ヲ用ヒス或ハ事粗暴ニ涉ルコトアルトキハ院中取締ノ指揮ヲ受ケ最寄警察署ニ通知シ其處分ニ從事スヘシ

第十四　物品ヲ携帶シテ出門スルモノアルトキハ其乙號物品携帶證ヲ領收シ番號時刻姓名品名甲號物品時刻等甲號證ト符合スルヤ否ヲ檢査シ之ヲ帳記シテ出門セシムヘシ假令乙號證ヲ持參スルトモ若シ其物品携帶證ト符合セサルカ或ハ其身分ニ不相當ノ物品ヲ携帶スト思量スルトキハ之ヲ留メ置キ院中取締ニ告ケ指揮ヲ請クヘシ

第十五　日没ヨリ日出マテハ院中取締ノ證明セル出門證ヲ携帶スルモノニアラサレハ出門ヲ許サヽルヘシ出門證ヲ携帶スル者ハ其人名及出入ノ時刻ヲ帳記スヘシ

第十六　日没ヨリ日出マテハ各廳ノ用使タリトモ之ヲ留メ置キ事ノ次第ヲ院中取締ニ告ケ而後通行セシムヘシ

第十七　諸商工等本院ニ出入スルトキハ必ス門鑑ヲ改メ而後通行セシムヘシ

第十八　木石及下掃除塵芥等ノ運搬ハ總テ東門ヨリ通行セシムヘシ

第十九　表門内外車馬ノ亂置ヲ制スヘシ

第二十　馬丁及ヒ車夫等不正ノ所爲アルトキハ其姓名ヲ問ヒ院中取締ニ申報スヘシ

第二十一　本院ノ議事開會中ハ議事堂傍ノ西門及ヒ角柵門ヲ閉鎖シテ巡邏ヲ見合スヘシ

第二十二　本院構内（室内ヲ除ク）ノ巡邏ハ晝夜一時間毎ニ一人宛必ヌ之ヲ務ムヘシ若シ暴風雨又ハ非常ヲ警ムルコトアルトキハ臨時ノ巡邏ヲ爲シ特ニ注意ヲ加フヘシ

第二十三　日没ヨリ日出マテハ本院構外ヲ二回若クハ三回宛巡視スヘシ若シ不審ノ者ヲ認メハ臨機ノ取計ヲ爲シ院中取締又ハ宿直判任官ニ申報スヘシ

第二十四　巡邏中ハ本院構内各室外倉庫物置馬丁室供溜及ヒ湯呑所等ニ注目シ若シ異狀アルヲ認メハ臨機ノ取計ヲナシ速ニ院中取締又ハ宿直判任官ニ申報スヘシ

第二十五　煖管機關室ハ特ニ注意ヲ加ヘ毎回必ス檢査スヘシ其室扉ノ開閉ヲ爲ストキハ立會タル判任官以下ノ人名及ヒ時刻ヲ帳記スヘシ

第二十六　巡邏輪番帳ヲ製シ毎回巡邏ノ時刻ヲ登記檢印シテ院中取締ノ檢査ヲ受クヘシ

第二十七　本院近火又ハ非常ノ警戒アルトキハ非番ノ者タリトモ速ニ出院シテ專ラ力ヲ防禦ニ盡スヘシ

第二十八　出入人名簿出門證控簿物品携帶證控簿巡邏輪番簿ハ翌朝（土曜日ハ翌々朝）院中取締ヲ經テ庶務掛ノ檢閲ニ供シ物品携帶證ハ玄關受付掛ヲ經出門證ハ直ニ院中取締ニ還付スヘシ

第二十九　交番時刻及ヒ巡邏時刻ハ院中取締ノ指揮ニ從フヘシ

二十年三月三十日第二十五項中「判任官以下ノ」ノ六字ヲ削ル





第三十　臨時取締上ニ於テ庶務掛ヨリ示達スルトキハ各之ヲ遵守スヘシ

## 汽罐掛服務心得

第一　汽罐掛ハ庶務掛ノ指揮ヲ受ケ其務ニ從事スヘシ

第二　汽罐室ノ開閉ハ院中取締宿直判任官門衛等ノ點檢ヲ受クヘシ

第三　就業時間ハ就業檢印簿ニ登記シ院中取締ノ檢閲ヲ受クヘシ

第四　石炭其他ノ消費物ハ雜務掛ヨリ受取リ之ヲ帳記シ元入ト消費トヲ明細ニシ毎月雜務掛ニ報告スヘシ

第五　毎朝焔管及煙突ヲ丁寧ニ掃除シ而後汽罐ニ點火スヘシ其點火時限ハ庶務掛ノ指揮ニ從フヘシ

第六　蒸汽ノ力ハ四十封度ヨリ多カラス三十封度ヨリ少ナカラサルヲ程度トスヘシ若シ各課員ヨリ汽力ノ高度ヲ促スルモノアルトキハ庶務掛ニ申出指揮ヲ請フヘシ

第七　就業中ハ掛員ノ外他ノモノヲ汽罐室ニ入ラシムヘカラス

但庶務掛ヨリ通知ヲナスモノハ本文ノ限ニアラス

第八　汽罐掛ノ外諸器械及各席内外ノ逼塞栓ニ觸レシムヘカラス

第九　汽罐内ノ除煙及汽罐室内ノ石炭ニハ最モ注意ヲ加ヘ火災ヲ豫防スヘシ

第十　汽罐及煖管其他所屬器械ハ特ニ注意シテ懇切ニ取扱フヘシ

第十一　器械ノ一部分ニ毀損ヲ生スルトキハ迅速ニ庶務掛ニ申告シテ之カ修繕ヲ請フヘシ

第十二　毎土曜日午後汽罐ノ煤煙及湯滓ノ掃除其他器械ノ擦磨ニ從事スヘシ

但夏秋ノ交汽罐ニ點火シ及諸器械ヲ擦磨スルハ本文期日ノ限外トス

第十三　汽罐ノ用ナクシテ雜務掛又ハ小使ノ用ヲ務ムルトキハ各其規則ヲ遵守スヘシ

## 馭者服務心得

第一　馬車ノ外出ハ交番ヲ以テ勤ムヘシ

第二　馬車ノ外出ハ庶務掛ノ指揮ニ從フヘシ

第三　外出中ハ最モ注意シテ不都合ナキヲ要スヘシ
第四　調馬ヲナストキハ庶務掛ノ承認ヲ得ヘシ
第五　厩内外ノ掃除馬車及附屬品ノ保存ハ平常厚ク注意シテ不潔朽敗ノコトナキヲ要スヘシ
第六　厩需用品諸器械等毀損スルカ又ハ新調品ヲ要スルコトアルトキハ雑務掛ト協議ノ上院中取締ヲ經テ庶務掛ニ申出ツヘシ
第七　宴會會葬等ノ爲メ馬車ヲ借用セシ向ヨリ謝儀等ノ贈付アルモ庶務掛ノ認可ヲ經ルニアラサレハ受領スルコトヲ得ス
第八　馬丁ヲ監督シ若シ不都合ノ所業アラハ速ニ院中取締ヲ經テ庶務掛ニ申出ツヘシ
第九　馬匹ノ飼養料ヲ受授スルトキハ雑務掛ノ立會ヲ要スヘシ
第十　馬車ノ外出公用私用調馬等ヲ區別シ一箇月ノ終ニ増減比較簿（前月ト比較）ヲ製シ院中取締ニ差出スヘシ

給仕服務心得

第一　出院ハ例時刻ヨリ必ス一時間前タルヘシ
第二　勤務中ハ專ラ謹慎ヲ旨トシ官吏ノ命令ニ從フヘシ
第三　火鉢煙草盆糊壺水滴ノ類ハ所屬室扉ノ開クヲ待チ直ニ各机上ニ配置スヘシ
第四　茶器ノ類ハ粗忽ノ取扱ヲ爲スヘカラス若シ誤テ虧損セシトキハ其旨雑務掛ヘ申出ヘシ
第五　用ナクシテ妄リニ椅子ヲ離ルヽヲ許サス
第六　椅子ニ倚リ喫烟スルヲ許サス
第七　廊下ヲ躁歩シテ跫音ヲ發スルヲ許サス
第八　用間ニハ書ヲ讀ミ字ヲ習ヒ算ヲ學フヘシ
第九　書籍ハ默讀スヘシ聲ヲ發シテ官吏執務ノ妨ケヲ爲スヲ許サス
第十　官吏退院セハ諸器物ヲ取片付庶務掛ニ告ケ退出スヘシ





第十一　所勞又ハ事故アリテ遲參不參スルトキハ其旨庶務掛ニ屆出ヘシ

小使服務心得

第一　小使ハ雑務掛玄關受付掛ノ指揮ニ從フヘシ
第二　小使ノ人員ハ湯呑所ト御用使ノ二ニ分ツ然レトモ時宜ニヨリ彼此流用スルコトアルヘシ
第三　出勤時刻ハ官吏ノ上廳時限ヨリ一時間前タルヘシ
第四　出勤及退出ハ玄關受付所ノ人名札ヲ揭クヘシ他人ノ印ヲ代捺スルコトヲ得ス
第五　院中取締席ニ備ヘ置ク出勤簿ニ捺印スヘシ
第六　所勞又ハ事故アリテ遲參不參スル者ハ其旨即日雑務掛ヲ經テ院中取締ニ屆出ヘシ若シ所勞不參連日ニ及フトキハ四日目ニ醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ屆出ヘシ
第七　宿直及ヒ早出居殘等ハ同勤中ニ於テ協議之ヲ定メ雑務掛ヲ經院中取締ノ承認ヲ受クヘシ
第八　湯呑所ニ於テ管守スル諸器械物品ノ原數及ヒ破毀物ハ詳細帳記シ之ニ檢印シテ雑務掛ノ檢閲ヲ受クヘシ
第九　湯呑所ニ於テ管守スル諸器械物品ノ修覆ヲ要シ又ハ破毀物ノ代品ヲ要スルトキハ其事由ヲ書シテ雑務掛ニ請求スヘシ
第十　湯呑所ニ於テ管守スル諸器械物品ニ故ナクシテ不足ヲ生スルトキハ其手續書ヲ添ヘ雑務掛ヲ經テ院中取締ニ申出ツヘシ
第十一　飲料ニ供スル水及湯ハ最モ清淨ニセサルヘカラス土瓶茶椀ノ類ハ毎朝之ヲ洗滌シテ不潔ナカラシムヘシ
第十二　院中各席ノ掃除ハ雑務掛ノ指揮ニ從フヘシ且ツ日曜日ニハ院中廊下及ヒ厠ノ大掃除ヲナスヘシ殊ニ厠ハ清潔ヲ要スル所ナルヲ以テ朝夕之ヲ洒掃シテ不潔ナカラシムヘシ
第十三　本院内外ノ點燈ハ雑務掛ノ指揮ニ從フヘシ
第十四　車夫ヲ兼ヌル者ハ雑務掛ノ指揮ヲ受ケ其事ニ從ヒ用事了レハ車ノ掃除ヲナシ置クヘシ

第十五　使先キニ於テ猥リニ私用ヲ爲シ時間ヲ費スヲ許サス
第十六　使先キニ於テ返事ノ爲メ甚シク時刻ヲ移ストキハ時刻書ヲ乞ヒ玄關受付掛ニ差出スヘシ
第十七　宿直ノ時ハ宿直外ノ者ト飲食シ又ハ私ニ他出スルヲ許サス
第十八　宿直ノ時ハ宿直員ニ隨ヒ院中ヲ巡視スヘシ
第十九　火災盜難ノ豫防ニ注意スヘシ
第二十　平日火元見ノ順番ヲ立置キ府内ニ出火アルトキハ速ニ本課幷ニ院中取締ニ報告スヘシ
第二十一　本院近傍ニ失火及ヒ非常ノ事アルトキ非番ノモノタリトモ速ニ出院スヘシ
第二十二　官吏ノ辨當ヲ求ムルモノアルトキハ速ニ其用ヲ辨スヘシ
第二十三　院内出入ノ職人及商人ト金錢又ハ物品ノ貸借ヲ爲スヘカラス

第四課ヨリ元老院ヘ伺十九年十月二十五日
本課院中取締以下服務心得別冊之通御定相成可然哉相伺候也

## 第四課處務細則

第四課處務細則　十九年十二月三日

本課ノ事務ヲ分チテ出納掛用度掛庶務掛謄寫掛ノ四トナシ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

出納掛

第一　出納掛ハ豫算決算收入支出精算簿記ニ關スル事務ヲ處理ス
第二　樞要ノ證書及納拂切符等ハ本課ノ金匱ニ藏メ其鍵鑰ハ課長之ヲ管守ス
第三　每年度經費ノ豫算ハ歲入出豫算條規（明治十八年三月太政官第十一號）及大藏省通達（同年同月二十一日）ニ據リ各科目ノ金額ヲ豫定シ前年度六月三十日迄ニ豫算表及明細表ヲ製シテ大藏省ニ送付ス
第四　每年度經費豫算額裁定ノ達ヲ受ケタル後十五日以内ニ歲入出納規則（明治十九年三月閣令第三號）及大藏省令（同年同月）ニ據リ歲出月額仕譯書ヲ製シテ大藏大臣ノ承認ヲ受ク
第五　經費豫算額中彼此ノ科目ヲ流用支出セントスルトキハ其仕譯書ヲ以テ大藏大臣ノ承認ヲ受ケ又





科目ノ廢置變換若クハ官金ノ棄捐ヲ要スルモノハ其事由ヲ詳具シテ大藏大臣ニ照會ス
第六　經費豫算額裁定ノ後實際已ムヲ得サル事故アリテ增費ヲ要スルトキハ其事由ヲ詳具シ明細ナル計算表ヲ添ヘテ大藏大臣ニ請求ス
第七　支出期節ノ豫定シ難キモノニシテ其期節幷仕拂場所ノ定マルトキハ其都度月額追仕譯書ヲ製シテ大藏大臣ノ承認ヲ受ク
第八　歲出月額仕譯書中ニ於テ月額ヲ訂正セントスルトキハ訂正仕譯書ヲ製シテ大藏大臣ノ承認ヲ受ク
第九　經費ノ支出ハ第四第七第八ノ手續ヲ經タル後ニアラサレハ支出ヲ執行スルコトヲ得ス但每年會計年度ノ始メ一箇月分ハ出納規則ニ據リ各目ノ豫算金額十二分ノ一ニ超エサレハ支出スルコトヲ得
第十　經費ハ總テ支拂切符ヲ以テ之ヲ支出ス但シ現金交換ノ手續ハ出納規則ニ據ル
第十一　每月支出シタル經費ハ出納規則ニ據リ翌月七日以内ニ支出調書ニ基キ歲出報告書ヲ製シテ大藏省ニ送付ス若シ發送ノ後金額ノ更正ヲ要スルコトアルトキハ其事項取消書ヲ製シテ其次ノ報告書ト共ニ送付ス
第十二　每月ノ經費ハ會計檢査院長通達（明治十九年五月）歲出決算證明式ニ據リ支出調書ニ基キ仕拂内譯書及判任官以上ノ人員表ヲ製シ證明スヘキ證書ヲ添ヘ翌月十五日迄ニ會計檢査院ニ送付ス
第十三　概算支出ノ經費（出張旅費又ハ外國ヘ注文品代價ノ如キ假拂ノ分）ニシテ會計整理期限マテニ精算未濟ノモノハ翌年度九月三十日迄ニ書式ニ據リ歲出精算未濟報告書ヲ製シテ大藏省及會計檢査院ニ送付ス
第十四　每年度收入（第二部官有物拂下代）ノ豫算ハ歲入出豫算條規及大藏省通達（十八年三月二十一日）ニ據リ各科目ノ金額ヲ豫定シ前年度六月三十日迄ニ豫算表及明細表ヲ製シテ大藏省ニ送付ス
第十五　每年度收入豫算額ノ内若シ收入期節ヲ豫定シ得ルモノアルトキハ其裁定ノ達ヲ受ケタル後十五日以内出納規則ニ據リ歲入月額豫算表ヲ製シテ大藏省ニ送付ス
第十六　收入金ハ總テ納額告知書ヲ發シ直ニ金庫ヘ納付セシム其告知書ヲ製シ又ハ納額臺帳ニ記入等

ノ手續ハ歳入取扱順序（明治十九年三月大藏省令第四號）ニ據ル

第十七　收入金ノ報告ハ翌月十五日以內書式ニヨリ歳入報告書ヲ製シテ大藏省ニ送付ス但シ過納又ハ誤納アリテ下ケ戻シヲ要スルトキハ書式ニ據リ計算書ヲ以テ大藏省ニ請求シ拂戻ノ證書ハ本人ニ交付シ其旨ヲ同省ニ報告ス

第十八　會計年度內ニ收入金ノ徵收ヲ完了セサルモノアルトキハ年度後十五日以內書式ニ據リ年度內徵收未濟報告書ヲ製シテ大藏省ニ送付ス

第十九　收入及經費金出納ノ簿册ハ左ノ七種トシ仕拂切符元帳及納額臺帳ニ據リ複記式ヲ用ヒテ記入ス

日記簿　原簿　經費內譯簿
經費月額仕譯簿　雜收入內譯簿
收入月割額整理簿　徵收額整理簿

第二十　收入及經費ノ決算帳ハ會計年度內收支ノ金額ヲ統括シ之ヲ各科目ニ區分シテ收支各册ヲ製シ翌年度一月三十日限リ會計檢查院ニ送付ス

第二十一　收入及經費決算報告書ハ會計年度內ニ屬スル收支金額ヲ各科目ニ區分シ本年度豫算決算ノ增減ノ事由ヲ詳記シ翌々年度ノ二月三十一日限リ大藏省ニ送付ス

第二十二　會計年度（毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日マテ）ニ屬スル出納ノ開始ハ四月一日ナリト雖モ外國行官吏俸給ノ前渡シ及旅費手當ノ如キ年度ニ先チ支出ヲ要スルトキハ出納規則ニ據リ出納開始前ニ於テ支出スルコトヲ得

第二十三　會計年度內仕拂フヘキ經費ノ完了セサルモノアルトキハ書式ニ據リ歳出未濟報告書ヲ製シ年度後十五日以內ニ大藏省ニ送付ス但シ此支拂ヲ整理スル爲メ翌年八月三十一日マテ其年度ニ屬スル支出ヲ爲スコトヲ得ルト雖モ其年度經過後ニ屬スヘキ支出ノ契約ヲナスコトヲ得ス

第二十四　會計整理期限前ニ於テ過渡金ノ追徵ヲナストキハ返納告知書ヲ發シテ金庫ニ納付セシム其整理期限後追徵スルモノモ亦同シ

第二十五　高等官（勅任奏任）ノ俸給ハ支給細則（明治十九年四月大藏省令第十二號）ニ據リ二月五月八月十一月四期ノ定日支拂切符ヲ以テ支給シ當日金庫局ヨリ派出ノ銀行員ニ就キ現金ト交換セシム若シ其定日休暇ニ當ルトキハ順延ス

第二十六　判任官以下ノ俸給及給仕小使馬丁等ノ給料ハ判任官俸給支給細則（明治十九年五月大藏省令第二十號）及傭員俸給支給規則（十九年九月二十五日裁定）ニ據リ毎月二十八日之ヲ支給ス若シ休暇ニ當ルトキハ其前日之ヲ支給ス

第二十七　非職及復職ヲ命セラルヽモノアルトキハ大藏大臣通達（明治十九年四月）ニ據リ毎年四回七月十月一月四月非職者又ハ復職者ニ該當スル增額又ハ減額ノ請求書ヲ大藏省ニ送附ス

第二十八　外國出張ノ官吏ヘ俸給等ヲ送付セントスルトキハ出納規則ニ據リ送金請求書ヲ製シテ大藏省ニ請求ス

第二十九　官吏滿五年以上奉職ノ者退官一時賜金ハ恩給令（明治十七年一月太政官第一號達）ニ據リ第一課送付ノ本人履歷書ニ基キ其金額ヲ算定シテ大藏省ニ請求ス

第三十　官吏在官中死亡者賜金ハ第一課通牒書ニ據リ其金額ヲ支給ス

第三十一　官吏退官賜金（大藏省國債局ヨリ受入タル分）ノ決算帳ハ各自領收ノ證書ヲ添ヘ大藏省ヲ經テ會計檢查院ニ送付ス

第三十二　議官增員若クハ增俸ニ由リ其年俸豫算額ニ不足ヲ生スルトキハ其都度增額ノ事由ヲ詳具シ簡明ナル計算表ヲ添ヘ大藏大臣ニ請求ス

第三十三　乘馬飼養料ハ各月其金額ヲ取纏メ國庫金取扱所ヘ預ケ該預ケ證書ヲ以テ陸軍省ニ送付ス

用度掛

第一　用度掛ハ物品ノ購買辨給修繕ニ關スル事務ヲ處理ス

第二　各課需用ノ器具物品ヲ交付スルトキハ領收券ニ式ノ如ク登記檢印セシメ其券面ニ番號ヲ附記シテ受拂簿ニ登載ス

第三　器具物品ノ出納ハ備品ト消耗品トノ二樣ニ區別シ前月越高本月元受仕拂高等ヲ査算シ三箇月毎ニ簡明ナル一覽表ヲ製ス

第四　不用ニ屬スル器具物品（毀損或ハ陳腐シテ供用シ難キモノ）ヲ賣却セントスルトキハ其品目員數ヲ詳明ニシテ入札セシム

第五　營繕用ノ木材鐵石其他準備ノ物品ハ三箇月乃至六箇月所要ノ員數ヲ豫定シテ之ヲ購入シ其出納ハ總テ現物ヲ帳簿ニ登記ス

第六　凡ソ工事ハ其月落成スルト否トニ拘ハラス一箇月間仕拂ヒタル品目及ヒ工費ヲ計算シ簡明ナル月計表ヲ製ス

第七　日常小修繕其他ノ雜事ヲ辨スルタメ大工又ハ人足ヲ使用スルトキハ其事由人員及賃金ヲ帳簿ニ詳記ス

第八　本院所屬ノ地所及建物ハ其縮圖ヲ製シ地形屋宇變更アル毎ニ之ヲ改正シ又別ニ簿册ヲ設ケ地坪及其價格（地券ニ據ル）幷ニ建物ノ新舊種類ヲ記シ其增減ニ依リ坪數代價ヲ加除ス

庶務掛

第一　庶務掛ハ公文ノ往復及院中取締、雜務掛、玄關受付掛、門衛、滌鑵掛、馭者、給仕、小使ヲ監シ其他各課ニ屬セサル諸般ノ事務ヲ處理ス

第二　給仕、小使、寫字生ハ課長之ヲ進退ス

第三　議案ヲ除クノ外內閣及ヒ各廳ヨリ到來スル文書人民ヨリ進達スル建白伺等ハ之ヲ開封シ其要領番號月日ヲ來翰簿ニ登記シ課長ノ檢印ヲ得テ主務ノ各課ニ分付ス

第四　各課ヨリ交付セル一切ノ公文書類ハ其要領番號月日ヲ往翰簿ニ登記シテ之ヲ發送ス

第五　各廳ノ照會ニ對スル本院ノ回答及ヒ人民ノ願伺ニ對スル本院ノ指令ハ其要領ヲ來翰簿各項ノ下段ニ朱書シ本院ノ上奏上申願伺等ニ對スル內閣ノ指令及ヒ本院ノ照會ニ對スル各廳ノ回答ハ其要領ヲ往翰簿各項ノ下段ニ朱書ス

第六　議長副議長宛親展ノ文書ハ其封皮上ノ番號ヲ來翰簿ニ登記シ其番號ナキモノハ封皮上ニ記號シ記簿ノ後第一課ニ交付ス

第七　議長副議長ヨリ出ル親展文書ハ其封皮上ニ記號シ往翰簿ニ登記ノ後送致簿ニ付シテ之ヲ送達ス

第八　凡ソ送付ノ文書物品ハ受領者ノ證印ヲ受ク

第九　會議ニ關スル者ト職員ノ進退身分ニ關スル者ヲ除クノ外院中ニ回達スヘキ事項ハ一切之ヲ處理ス

第十　議案ヲ除クノ外書類ノ印刷ハ一切之ヲ處理ス

第十一　每期統計表及報告書ハ各課起草ノ材料ニ依リ之ヲ編製シテ內閣ニ送達ス

第十二　官報購讀ノ義務者ニシテ轉任若クハ非免職アルトキハ其姓名住所及購讀ノ番號ヲ官報局ニ通牒ス

第十三　乘馬飼養令ニ依リ本院官吏飼養ノ馬匹及飼養料ノ金額ハ每年一月明細表ヲ製シテ陸軍省ニ送付ス且ツ飼養ノ馬匹及ヒ飼養料ニ增減異同ヲ生スルトキハ其翌月十日ヲ期シテ同省ニ通牒ス

第十四　皇居御門鑑ハ其員數番號及出納年月日ヲ簿册ニ詳記シテ交付ス若シ受領者轉任又ハ罷免等アルトキハ之ヲ返還セシム

第十五　判任官以下ノ宿直ハ規則ニ據リ當直ノ期日ヲ報道ス

第十六　公用ニ供スル郵便切手ハ豫テ出納掛ヨリ受領シ其使用セル員數及郵送ノ廳名人名年月日ヲ簿册ニ登記シ每月決算表ヲ製シテ出納掛ニ交付ス

謄寫掛

第一　謄寫掛ハ諸文書謄寫ニ關スル事務ヲ處理ス

第二　各課ヨリ圖書謄寫ノ付託ヲ受ケタルトキハ其書名幷ニ受領ノ月日ヲ帳簿ニ詳記シテ寫字生ニ下付ス

第三　謄寫ノ順序ハ原本受領ノ前後ニ由ル但シ其緩急ヲ計リ便宜先後スルモ妨ケナシ

第四　謄寫及校正ヲ了リタルトキハ其付託セル各課ニ還付シ領收者ノ證印ヲ取ル

第五　寫字生ノ等級ト枚數ニ係ル價格ハ寫字生取扱規則第五條ニ準據シ其書名原枚數等ヲ檢査簿ニ登記シ用度掛ニ送付シテ定價枚數ノ檢査ヲ受ク

第六　謄寫料ハ毎月ノ終リニ於テ請求書ヲ作リテ出納掛ニ交付ス

第七　一年ノ終リニ於テ一箇年間謄寫ノ枚數及支給金ノ種類ヲ計算シ增減比較（前年比較）表ヲ製シテ上局ノ檢閲ニ供ス

第四課ヨリ元老院ヘ同十九年十月二十五日本課處務細則別冊ノ通御定可相成哉相伺候也十二月三日庶務掛同達十九年十二月三日出納掛用度掛謄寫掛本課處務細則及院中取締以下服務心得別冊ノ通決裁相成候ニ付及同達候也

第一課第二課及第三課處務細則

## 各課處務細則　十九年十二月八日

### 第一課處務細則

本課ノ事務ヲ分チテ文書掛記錄掛ノ二ト爲シ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

文書掛

第一　議長親展ノ文書及機密ノ事務ヲ處理ス

第二　議長副議長ノ官印及院印ヲ管守シ其押捺ヲ要スルトキハ正副議長ニ開申ス

第三　議長署名ノ達書及判任官傭員ノ辭令書ヲ傳達ス

第四　官吏ノ登庸非免及叙勳恩給等ニ關スル事項ハ例規ニ據リテ之ヲ處理ス

第五　勅任官以下及傭員ノ進退身分ニ關スル事項ハ各課ニ同達ス

第六　勅任官以下及傭員ノ進退褒貶其他疾病歸省旅行等ニ因リ俸給ニ異同ヲ生スルトキハ第四課ニ通知ス

第七　廢官退官若クハ死亡等ニ因リテ賜金ヲ受クヘキモノアルトキハ本人ノ履歷書ヲ付シテ第四課ニ通知ス

第八　毎期職員ニ關スル統計資料及報告書資料ヲ採集シテ第四課ニ送付ス

第九　勅任官以下及傭員ノ履歷書幷職員錄ヲ整理シ職員錄ハ毎月校訂シテ內閣ニ送進ス

第十　議官會議出席幷不參表ハ毎月末ニ之ヲ製シ內閣ニ送進シ議官ニ廻達ス

第十一　勅任官以下及傭員ノ出勤簿ハ毎月末ニ查閲シテ月表ヲ製ス

第十二　昇降時限ノ伸縮ハ內閣ニ申牒シ各課ニ廻達ス

第十三　勅任官歸省旅行等ノ願書ハ內閣ニ送進シ指令アレハ本人ニ返付ス

第十四　奏任官以下及傭員ノ願伺書ハ議長ノ裁決ヲ經テ本人ニ返付ス但奏任官ノ歸省旅行等ハ內閣ニ申牒ス

第十五　判任官三大節ノ賀表及歲末ノ祝詞ハ宮內省ニ送達ス

第十六　大祭大禮ノ際勅任奏任判任官ノ總代ヲ要スルトキハ各本人ニ通達ス

第十七　奏任官三大節宴會ノ酒饌調達方ハ第四課ニ通知シ代料ハ宮內省ヨリ領受シテ第四課ニ送付ス

第十八　諸儀式ニ係ル達書等ヲ受ケタルトキハ其事柄ニ依リ議官及ヒ各課ニ廻達ス

第十九　官報ニ登載スヘキ事項ヲ採集シテ內閣官報局ニ報告ス

記錄掛

第一　本院一切ノ記錄文牒ノ原本ヲ保存ス

第二　記錄文牒ノ原本ハ毎月末ニ各課ヨリ領受シテ之ヲ編纂ス

第三　記錄文牒ハ副本ヲ製シ原本ハ書庫ニ藏メ副本ハ本掛ニ備ヘテ上局及各課ノ檢閲ニ便ス

### 第二課處務細則

本課ノ事務ヲ分チテ理事掛筆記掛ノ二ト爲シ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

理事掛

第一　議定案檢視案ハ其件名等ヲ議案表ニ登載シテ印刷又ハ謄寫ニ付シ其機密ニ係ルモノハ特別ニ之ヲ處理ス意見書修正案報告書モ亦同シ

第二　議定案檢視案意見書修正案報告書ノ印刷又ハ謄寫成レハ議長議官各課ニ配付ス但シ議定案ニ係ル修正案報告書ハ併セテ內閣委員ニ送付ス

第三　議定案ノ會議期日ハ議官內閣委員及ヒ內閣各廳幷院中各課ニ通報ス但シ第一讀會ニ限リ其期日ヲ內閣總理大臣ニ申牒シ宮內省ニハ議案一部ヲ送付ス

第四　檢視案意見書ノ會議期日ハ議官及ヒ院中各課ニ通報ス

第五　內閣委員ノ人名ヲ議官ニ通報ス

第六　會議ノ日議官ノ參不參ノ番號罫紙ニ記シ議長筆記官ニ配付ス

第七　會議ノ日開議ニ先タチ議場ヲ整頓ス

第八　開議中掛員一名以上議場ニ侍シテ雜事ヲ辨ス

第九　決議ノ議定案檢視案意見書ノ上奏書ハ官印ヲ捺シテ進達ス

第十　議事傍聽牌ハ各廳及ヒ本院奏任官以上ノ請求ニ由リ之ヲ交付ス

第十一　議事傍聽者アレハ傍聽牌ヲ查收シテ開議前ニ座席ニ就カシメ其名簿ヲ議長ニ呈ス

第十二　每月ノ初ニ抽籤筒ヲ備ヘ議官番號改選ノ用ニ充ツ

第十三　每三月ノ初ニ抽籤筒ヲ備ヘ各部議官改選ノ用ニ充ツ

第十四　會議ニ關スル事項ハ議案表ニ登載シ執行セシ事務ハ其要旨ヲ日記ニ摘錄ス

第十五　議定案檢視案意見書上奏書報告書其他公文ノ原本ハ每月ノ終ニ第一課ニ送付シ副本ヲ製シテ課中ニ備フ

第十六　每年ノ終ニ議事一覽表ヲ製シテ第四課ニ送付シテ印刷ニ付ス

第十七　每期ノ終ニ會議報告ノ資料ヲ製シテ第四課ニ送付ス

筆記掛

第一　會議ニ當リ議場ニ出テ、其論議辯說ヲ筆記ス

第二　院議ヲ起草

第三　會議筆記ヲ編纂シテ印刷ニ付ス其機密ニ係ルモノハ特別ニ之ヲ處理ス

第四　會議筆記ノ試刷ヲ校訂シ印刷成レハ更ニ之ヲ校閱ス

第三課處務細則

本課ノ事務ヲ分チテ建白掛照查掛編纂掛飜譯掛圖書掛ノ五ト爲シ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

建白掛

第一　建白書ヲ出スモノアルトキハ建議ノ大意ヲ書表ニ摘錄シテ議長副議長及ヒ委員議官ノ覽閱ニ供ス

第二　委員議官採擇參照却下廢棄ノ區分ヲ注シテ建白書ヲ下付スルトキハ例規ニ照シテ之ヲ措辨ス

第三　每年十二月建白書一覽表ヲ作リテ印刷ニ附ス

第四　每期報告書ノ資料ヲ採集シテ第四課ニ送付ス

第五　本課一切ノ雜務及文書往復ノ事ヲ處理シ課印及帳簿物品ヲ管守ス

照查掛

第一　議案修正案意見書等照查參閱ノ事ニ服ス

第二　布告以下諸法令ノ存廢改正ヲ甄別シテ檢閱ノ便ニ供ス

編纂掛

第一　法律規則書ヲ編纂シ編纂稿ヲ脫スルトキハ淨寫シテ之ヲ整理ス

第二　文案ヲ起草シ諸文書ヲ校正淨寫シ兼テ本課常備ノ書籍ヲ管ス

飜譯掛

第一　外國文書飜譯ノ事ニ服ス

圖書掛

第一　本院所藏及內閣假借ノ圖書ヲ管守シ圖書目錄正副二本ヲ製シ正本ハ書庫ニ藏メ副本ハ本掛ニ備フ

第二　圖書ノ新收アルトキハ印章ヲ捺シテ新收簿及目錄ニ登記ス

第三　各課常備ノ圖書ハ目錄二本ヲ製シ一本ハ其證印ヲ取リ一本ハ其課ニ付ス

第四　每年五月十一月圖書ヲ檢査シ檢査中ハ貸付ヲ許サス但シ公事ノ爲ニ必用アルモノハ此限ニアラス

圖書借覽規則

一本院官吏院中ニ於テ圖書ヲ借覽スル者ハ圖書出納簿ニ自署捺印シ院外ニ帶出スル者ハ特許ヲ經ヘシ

一圖書借覽ノ制院中ニ於テハ三部十五册六十日院外帶出ハ一部五册三十日ヲ限ル但シ得難キノ珍書ハ院外ニ帶出スルコトヲ許サス

一每期檢査中ハ借覽ノ圖書ヲ還納セシメ且貸與ヲ中止ス

一借覽中圖書ヲ毀損亡失セシトキハ其理由ヲ詳陳シ時宜ニ由リ之ヲ償ハシムルコトアルヘシ

一圖書借覽中轉任若クハ非職免職トナルトキハ之ヲ還納スヘシ

院中取締規則并門衛服務心得ヲ改刪ス

是有宿直規則ヲ改正ス略ス

庶務掛同達十九年十二月八日掛用度掛寫字掛

第一課第二課及第三課細則別冊ノ通決裁相成候旨ヲ以テ各課ヨリ同送相成候ニ付爲御心得及同達候也

第四課ヨリ元老院ヘ伺定　二十年三月三十日

今般宿直規則御改正相成候ニ付テハ院中取締規則幷ニ門衛服務心得寫字生取扱規則中抵觸ノ廉々左ノ如ク改刪相成可然哉此段相伺候也

一院中取締規則第一條中「庶務ヲ」「第四」ニ改メ「三人」ノ二字ヲ刪ル

一同第四條「宿直員以下十七字」ヲ刪リ「倉庫ニ藏ムヘシ」ノ七字ヲ加フ

一同第五條中「宿直判任官及ヒ」ノ七字ヲ刪ル第六條亦同シ

一同第八條中「宿直判任官一人」ノ七字ヲ刪ル



一同第九條左ノ如ク改正ス

第九條

一院中取締員ハ左ノ鎖鑰ヲ管守シ出門證ヲ製出ス

一諸門ノ鎖鑰

但シ表門脇ノ小門ノ鍵ハ門衛之ヲ管守ス

一議事堂ノ鎖鑰

一各課室ノ鎖鑰

一各課所屬倉庫物置ノ鎖鑰

但シ本項鎖鑰ノ管守ハ執務時間外ニ限ル

一汽罐室ノ鎖鑰

一郵便函ノ鎖鑰

一門衛服務心得第二十五項中「判任官以下ノ」ノ六字ヲ刪ル

一寫字生取扱規則第十條ヲ第九條トス以下各條之ニ準ス

十九年二月六日寫字生取扱規則ヲ定ム略ス

元老院書記官別段ノ許可ヲ得ル者ニ非レハ傍聽スルヲ得ス

元老院幹事回達　九年一月七日

是迄會議ノ節書記官傍聽致シ來候處先般章程改正各常務相定候上ハ爾後別段ノ許可ヲ得ル者ニ非サレハ傍聽不相成候事

元老院會議華族傍聽ヲ許ス

元老院ヘ伺　九年三月八日

本院議事傍聽ノ儀從來奏任以上ノ向ヘ依賴時々差許候處華族ノ儀モ追々願出候向有之候ニ付テハ議案ニ依リ差支無之節ハ今後傍聽被差許可然儀ト奉存候地方官會議華族傍聽被差許候例モ有之此段奉伺候

指令　九年三月十八日

伺之通

法制局議案九年三月十四日

別紙元老院伺會議ノ節華族傍聽ノ儀密案候處其議案ニヨリ傍聽被差許候儀ハ御差支ノ儀モ有之間敷ニ付上請ノ通御許允相成可然哉御指令案取調仰高裁候也

## 元老院幹事通達 九年三月二十三日 會院使廳府

本院議事傍聽ノ儀各省官員ノ内ヨリ追々願出候向モ有之候ニ付傍聽牌十枚致送致候尤議事日限ノ儀ハ前以御聞合有之候ハヽ其都度可及回答候條此段及通達候也

議事傍聽牌ヲ定ノ各廳ニ配付ス

十一年六月十四日改ム

傍聽人取扱手續及傍聽人心得ヲ定ム

十一年六月十八日改ム

十年五月三十日一項ヲ追加ス

### 傍聽人取扱手續 九年四月十七日

一傍聽牌ハ各院省使東京府及華族會館ノ請求ニ應シ定數ノ如ク之ヲ頒附スヘシ

一其頒附ノ時ニ方ツテ傍聽牌出納簿ニ其番號及ヒ送附スル處ノ姓名官名或ハ院省使府ノ名ヲ書シ同シク之ヲ牌脊ニ朱書シ出納簿ニ對照シテ割印ヲ捺シ之ヲ送致ス

一會議ノ日奏任官以上ノ官員及華族傍聽牌ヲ齎シ來ラハ本院玄關ニ於テ名刺ト共ニ之ヲ受付シ傍聽人控所ニ誘導シテ直ニ其名刺ト傍聽牌トヲ議事課書記生ニ移スヘシ書記生ハ之ヲ書記官ニ報シ其省使長次官及法制官ハ議事堂ノ西廂ニ誘引スヘシ而シテ書記官ハ之ヲ議長或ハ幹事ニ通知シテ其指揮ヲ乞フ可シ

但皇族一等官ハ直ニ議事堂ノ西廂ニ誘引スル者トス

一議事課書記生其名刺ト傍聽牌トヲ受ケ傍聽牌出納簿ニ參照シテ其番號ヲ檢シ該日收ムル所ノ月日ト其齎ス所ノ姓名トヲ簿上ニ登記シテ其牌ヲ收置スヘシ

一議事開場ニ臨ミ衆議官著席ノ後議事課書記生一名或ハ二名先導シテ勅任奏任及華族ヲ區別シ傍聽椅ニ就カシムヘシ

一議事開場ノ後ニ至リ來聽スル者ハ傍聽人控所ニ留メ置其事ヲ議場出席ノ書記官ニ報シ書記官之ヲ議長ニ告ケ其許可ヲ得テ之ヲ誘引セシム可シ

但皇族一等官ハ直チニ議事堂ニ誘引スル者トス

### 傍聽人心得

一傍聽牌ハ各院省使東京府及華族會館ノ請求ニ應シ頒布スルヲ以テ若シ臨時ニ傍聽牌ヲ要スルトキハ議長幹事及ヒ議官ニ請求シ其所持ノ分ヲ轉受スルモ妨ケナシトス

一議事開場ニ臨ミ書記生ノ誘導ヲ得テ議事堂ニ入リ傍聽椅ニ就ク可シ

一議事中沈默靜定ヲ要ス私語吹煙及猥リニ堂外ニ出ツルヲ禁ス

一本院ノ都合ニヨリ其傍聽牌ヲ齎スモ其日ノ傍聽ヲ禁シ或ハ傍聽中ト雖モ之ヲ退席セシムルコトアル可シ

議事課長ヨリ元老院ヘ伺九年四月十七日

傍聽人取扱手續并議事傍聽心得別紙ノ通御定可相成哉此段奉伺候也

法制局ヨリ元老院ヘ照會九年五月十二日

法制官ハ共主任ノ事案ニ付内閣ノ委員トシテ議案ノ理趣ヲ辯明スルノ責ニ任シ候儀ニ付同官ニ限リ傍聽牌無之トモ臨時參院傍聽相成候樣致度此段及御照會候也

元老院回答九年五月十二日

法制官ハ共主任ノ事案ニ付内閣ノ委員トシテ議案ノ理趣ヲ辯明スルノ責ニ任シ候儀ニ付同官ニ限リ傍聽牌無之トモ臨時參院傍聽相成候樣御照會ノ趣承知致シ候仍テ此段及御回答候也

法制官ニ臨時參院傍聽ヲ許ス

侍從ニ議事傍聽ヲ命セラル

十年十月十七日改テ侍補ニ傍聽ヲ命セラル

傍聽人取扱手續ヲ追加ス

十一年六月十八日改ム

議事傍聽ノ侍從ヲ改テ侍補ヲ差遣ス

地方官會議々案議事ノ際在京地方官等傍聽手續

宮内省ヨリ元老院ヘ照會　九年十一月十五日

御院ニ於テ議事有之候節傍聽トシテ侍從被差出候間以來議事有之日ハ前以テ時々御通知有之度此段及御掛合候也

追テ傍聽鑑札二十枚御廻シ有之度候也

元老院同答九年十一月十六日

於本院議事有之候節爲傍聽侍從被差出候間以來議事有之日ハ前以時々可及御通知旨御掛合ノ趣致承知候御申越ノ通會議ノ都度前以可及御通知候此段及御回答候也

追テ御申越ノ傍聽牌二十枚即送致候間御落手有之度候也

第一課ヨリ元老院ヘ伺定　十年五月三十日

傍聽人取扱手續追加ノ儀別紙ノ通被相定可然哉近來各府縣等ヨリ區戸長總代人會議等ノ類ヲ開候節ニ議事ノ體裁施設ノ方法全ク未熟ノ趣ニ付實際觀聽ノ爲メ主任ノ判任官差出度往々願出候向有之將來府縣會等設立ノ階梯ニテ本院會議ノ式ヲ以テ府縣一般ノ摸範ト可相成候條長官ヨリ請求ノ分ニ限リ傍聽被差許可然哉此段奉伺候也

追加

一奏任以下ト雖モ各院省使府縣長官ノ請求ニヨッテ臨時傍聽ヲ許スコトアルベシ

宮内省ヨリ元老院ヘ通牒　十年十月十七日

是迄御院議事ノ節爲傍聽侍從被差遣儀處自今侍補被差遣候間爲御承知此段申入置候也

宮内省ヨリ元老院ヘ照會十年十月二十二日

御院開議ノ節爲傍聽侍補被差遣候ニ付テハ御開議ノ節々前以議案御回有之度此段及御掛合候也

元老院同答十年十月二十三日

本院開議ノ節傍聽爲侍補被差遣候ニ付テハ開議ノ節々前以議案御回可申旨御掛合ノ趣致承知候已ニ及御通知置候通明二十四日租税怠納ノ者處分ノ儀布告案第二讀會第六回開議ニ付右議案竝本院修正案共一部宛御送付候ニ付御落手有之度此段及御回答候也

地方官會議御用掛ヨリ元老院ヘ照會十一年五月十二日



議事傍聽牌ヲ改メ各區ニ配付ス

十一年十月二十五日及十二年三月一日第一項ヲ改ム

今般御院ヘ被附候地方官會議議案第一第二第三讀會爲傍聽在京地方官ノ參來ル十四日ヨリ罷出度旨申出候付テハ多人數ノ儀ニモ有之旁傍聽牌無之シテ傍聽御許可相成間敷哉此段及御問合候若又傍聽牌無之候テ不相成義ニ候ハヽ右一百八十枚御廻シ有之候條致度此段及御照會候至急御回答有之度候也（別紙人名略ス）

追テ別紙人名書御廻シ申候條御落手有之度候也

元老院回答十一年五月十三日

今般本院ヘ被附候地方官會議議案第一讀會ヨリ第三讀會迄爲傍聽在京地方官被相越度ニ付テハ傍聽牌無之候共差支有之間敷哉之旨御問合ノ趣了承右ハ傍聽牌無之候ヘ共差支無之候條此段及御回答候也

追テ御差廻ノ別紙人名書落手候也

地方官會議事務局ヨリ元老院ヘ照會十一年五月十四日

一傍聽牌　十枚

右ハ當局御用掛奏任ノ輩ヘ相渡候間直ニ此者ヘ御下付相成度此段及御依頼候也

元老院回答十一年五月十四日

御局御用掛奏任ノ向ヘ傍聽牌十枚可相渡旨御照會ノ趣承知致シ候然ルニ右傍聽牌持參無之テモ不苦候條御姓名御回置相成度尤今般會議ニ付テハ地方官員多人數出席候ニ付若シ傍聽席滿員ノ節ハ可及御斷哉モ難計候間此段豫テ御承知置有之度回答旁申進候也

元老院回達　十一年六月十四日　宮院者使

今般本院議事傍聽牌相改候ニ付右何枚及送付候條從前之通爲議事傍聽出席ノ節御持參可有之此段及回達候也

表

議事傍聽牌

裏

一議事ヲ傍聽スルコトヲ得ル者ハ奏任官以上及ヒ華族ニ限ル

一議事ヲ傍聽セント欲スルトキハ皇族幷勅任官ヲ除クノ外必ス此傍聽牌ヲ齎シテ名刺ト共ニ本院ノ玄關ニ差出スヘシ

一此傍聽牌ハ傍聽一回毎ニ之ヲ本院ニ收置ス

一本院ノ都合ニ依リ前以テ報告セス共日ノ傍聽ヲ差止ルコトアルヘシ

傍聽人取扱手續及傍聽人心得ヲ改正ス

傍聽人取扱手續　十一年六月十八日

一傍聽牌ハ官院使局藩府縣及華族會館ノ請求ニ應シ之ヲ附與スヘシ

但議長副議長幹事議官ニ附與スルハ此限ニアラス

一附與ノ時ニ方リテハ傍聽牌出納簿ニ送付スル所ノ枚數及姓名或ハ官院使局藩府縣等ノ名ヲ記載ス

一皇族幷勅任官ハ玄關番其名刺ト傍聽牌トヲ（法制局書記官ハ傍聽牌ヲ要セス）受付シ（此際其官姓名等ヲ昇降簿ニ登記ス）傍聽人扣所ニ誘引シ員及華族ハ玄關番其姓名ヲ議事掛書記生ニ報シ書記生直ニ之ヲ議事堂ノ西廂ニ誘引シ自餘ノ官テ直ニ其名刺傍聽牌ヲ議事掛書記生ニ移スヘシ

一傍聽人ノ姓名ハ議事掛書記生之ヲ書記官ニ報シ書記官ハ議長或ハ幹事ニ知會シテ其指揮ヲ乞フヘシ

但名刺傍聽牌ハ書記生之ヲ查收ス

一議事開會ニ臨ミ衆議官著席ニ際スレハ議事掛書記生一名或ハ二名先導シテ諸官員及ヒ華族ヲ區別シ傍聽椅ニ就カシムヘシ

一議事開會ノ後來聽スルモノハ書記生之ヲ誘導シテ傍聽椅ニ就カシメ直ニ其姓名ヲ書記官ニ報シ書記官之ヲ議長ニ告クヘシ

傍聽人心得

一傍聽牌ハ官員使局藩府縣及華族會館ノ請求ニ應シ附與スルヲ以テ皇族勅任官及法制局書記官ノ外ハ必ス之ヲ齎シ來ルヘシ然レトモ若シ臨時ニ傍聽牌ヲ要スルトキハ議事掛書記官ニ請求スルモ妨ケナシトス

一議事開場ニ臨ミ書記生ノ誘導ヲ得テ議事堂ニ入リ傍聽椅ニ就クヘシ

一議事中沈默靜定ヲ要ス私語吹煙スルコトヲ禁ス

一議事ノ都合ニヨリ傍聽牌ヲ齎スモ其日ノ傍聽ヲ禁スルコトアルヘシ

第一課長ヨリ元老院ヘ伺十一年六月十八日

今般議事傍聽牌伺之上改正候ニ付別紙之通傍聽人取扱手續幷傍聽心得御改正相成可然哉此段率伺候也





會議差支ナキ節ハ判任官ニ傍聽ヲ許ス

元老院伺十一年六月十五日

本院議事傍聽ノ儀從來奏任官以上並ニ華族ニ限リ差許且判任官ノ儀ハ該長官ノ請求ニ依リ差許來候處自今議案ニ依リ差支無之候節ハ判任官モ傍聽差許可然儀ト存候此段相伺候條何分御指揮相願候也

但議案ニ依リ本院ノ都合ヲ以テ其臨時傍聽ヲ禁シ候事ハ本院ノ例規ニ有之候此段モ申副置候也

指令　十一年七月十五日

伺之通

法制局議案十一年七月二日

別紙元老院上申會議ノ節判任官傍聽ノ儀ハ別段差支ノ廉無之ニ付御允可相成可然哉御指令案取調仰高裁候也

第一課長ヨリ元老院ヘ伺十一年七月十六日

今般本院會議ノ節判任官モ傍聽被差許候ニ付テハ傍聽牌裏面ニ記載スル所ノ奏任官以上ヲ判任官以上ト改メ（六月十四日ニ廢スル傍聽牌裏面ノ第一項ヲ指ス）且ツ傍聽人取扱手續第一項但書（六月十八日ニ廢ス）ハ削除可然哉此段率伺候也

幹事指令十一年七月十六日

但書不及削除

議事傍聽牌ヲ改ム

十五年七月二十一日又改ム

元老院回達　十一年十月二十五日　官省院使局所館府

本院議事傍聽ノ儀ハ是迄奏任官以上華族ニ限リ候處今般判任官ヘモ被差許傍聽牌致改正候ニ付各一括宛及送附候條議事傍聽ノ節御持參可有之此段及廻達候也

傍聽牌今後御入用ノ節ハ御照會次第可及交付候條此段申添候也

議事差支ナキ節ハ府縣會議員ニ傍聽ヲ許ス

元老院伺十二年二月五日

本院議事傍聽ノ儀ハ判任官以上幷華族ニ限リ差許候處先般府縣會被起候ニ付テハ既ニ東京府ヨリ府會議員傍聽請求申出候ニ付自今差支無之節ハ各府縣議員モ傍聽差許可然儀ト存候此段相伺候也

但議案ニ依リ又ハ本院ノ都合ニ依リ臨時ニ傍聽ヲ禁シ候事ハ本院ノ例規ニ有之候此段申副置候也

議事傍聽規則第一項ヲ改正ス

指令 十二年三月一日

伺ノ通

法制局議案十二年二月十八日
別紙元老院上申會議ノ節府縣會議員傍聽ノ儀ハ別段不都合モ不相見候間上請ノ通御裁可相成可然哉仰高裁候也

元老院日誌抄錄 十二年三月一日

一議事ヲ傍聽スルコトヲ得ル者ハ判任官以上及ヒ華族幷ニ府縣會議員ニ限ル事

各課員議事傍聽ノ件

議事課通達 十四年一月二十六日 各課掛

近來各課員議事傍聽ノ節其時ヲ問ハス議場ヘ出席相成候ヘトモ自今從前ノ慣例ニ復シ傍聽ノ節ハ當日開議前豫テ本課理事掛ヘ名刺御差出ノ上議場ヘ御出席有之度此段及御通達候也

傍聽ヲ禁スル議事タリトモ該議事ニ必要ノ關係アル官吏ハ傍聽スルヲ得

議事課ヨリ元老院ヘ伺定 十四年二月二日

禁傍聽議事ノ節ハ院中奏任官ト雖モ同一傍聽ヲ禁シ來候處先般事務條例御改正各課書記官會議事務分掌云々トノ目モ有之且議案取調等ニ是非傍聽不致シテハ往々差支候儀有之候間向後右調査必要ニ關シ候議事ニ限リ各課書記官傍聽被差許候樣仕度此段伺上候也

議事傍聽牌ヲ改ム

議事課ヨリ元老院ヘ伺定 十五年七月二十一日

別紙ノ通本院議事傍聽牌御改正相成可然哉此段相伺候也





議事傍聽人心得

## 本院議事傍聽牌改正案

表

元老院議事傍聽牌印

（印文篆書）

裏

一議事ヲ傍聽スルコトヲ得ル者ハ判任官以上及ヒ華族幷ニ府縣會議員ニ限ル
一議事ヲ傍聽セントスル欲スルモノハ此傍聽牌ヲ齎シテ名刺ト共ニ本院受付所ニ差出スヘシ
一此傍聽牌ハ傍聽一回毎ニ之ヲ本院ニ收置スヘシ
一傍聽セシ議事ノ論説ハ他ニ告示スルヲ許サス
一本院ノ都合ニヨリ其日ノ傍聽ヲ差止ルコトアルヘシ

議事傍聽人心得 十五年九月六日

一議事傍聽牌ハ豫テ官省院廳府縣及華族會館ノ請求ニ應シ送付スルニ依リ本院議事ヲ傍聽セントスル者ハ必ス傍聽牌ヲ持參シ名刺ヲ添テ本院受付所係ヘ出スヘシ若シ臨時ニ傍聽牌ヲ要スルトキハ本院奏任官以上ノ紹介ヲ以テ之ヲ請求スルコトヲ得

一開議ニ際シ議事課書記生ノ誘導ヲ得テ議場ニ入リ其指示スル所ノ傍聽椅ニ就クヘシ
一議事中沈默靜聽スヘシ私語吹煙又ハ叨リニ議場ヲ出入スルコトヲ許サス
一傍聽セシ議事論說ハ他ニ告示スルヲ許サス
一議事ノ都合ニヨリ其日ノ傍聽ヲ差止ルコトアルヘシ

議事課ヨリ元老院ヘ同十五年九月六日
過般議事傍聽牌改正相成候ニ付傍聽人心得別紙ノ通御改正相成可然哉此段相伺候也

議事傍聽ヲ許ス節各廳ヘ通報方

元老院ヨリ內閣書記官ヘ通牒　十六年十一月二十六日

從來本院議事傍聽被差許候節ハ各新聞紙ニ揭示致來候處已來ハ其都度貴方ヘ向ケ直ニ御通報可及候條兼テ此段申入置候也

內閣書記官ヨリ元老院ヘ照會十六年十一月二十七日
御院議事傍聽ヲ許サレ候節御通報方ノ儀ニ付御通知ノ趣致承知候右ハ當官ニ於テハ御通知ノ都度官中各部局ヘ通知取計候儀ニテ他各廳ヘハ御院ヨリ直ニ御通報相成候儀ト存候得共爲念及御照會候也
元老院同答十六年十一月二十八日
本院議事傍聽之儀ニ付御通報申進候處他各廳ヘハ本院ヨリ直ニ通知可致哉之旨御申越之通從來其都度本院ヨリ直ニ通知致居候此段更ニ及御同答候也

各省大臣ノ演說傍聽方

元老院沿革略誌抄錄　二十年二月二日

各省大臣ノ演說傍聽ヲ第三課書記官及照査掛書記生ニ許ス但書記生ノ尋常秘密會議傍聽モ亦同シ

## 留守官

留守官ヲ設ク
四年八月二十三日布告ヲ以テ廢ス

應司前右大臣ヘ達　二年五月十五日

是迄之職務被免留守長官被　仰付候事（留守官ヲ置クノ令他ニ見ルノ所ナシ姑ク之ヲ存ス）

岩下左治ヘ達　同日

是迄之職務被免留守次官被　仰付候事

烏丸宰相ヘ達　二年五月十七日

同文

（參考）
正親町三條前大納言德大寺大納言ヘ達元年八月二十六日（太政官ノ部ニ見ル）
今般　御東幸ノ節岩倉右兵衛督供奉被　仰付候然ル處三條右大臣ニモ未タ東京ニ在職相成候ニ付御留守中當官ニテ諸務御委任被　仰付候ハヽ輔相候所ヘ出仕可致旨被　仰付候事
但誰某ヘモ同樣被　仰付候事
有栖川帥宮ヘ達二年二月十六日
御東幸御留守中御取締被　仰出候事
同上二年三月七日
今般　御東幸御留守之儀尤大切之事苦勞ニ被　思食候得共別而勉勵奉職可有之旨　御沙汰候事
但今日被　仰渡候儀於　御前親敬　御沙汰可被爲在　思食之處段々御多事御間合モ無之ニ付不被爲及共儀候猶兼テ御設之酒肴下賜候事

留守官々制

達節錄　二年七月八日（全文ハ官職ニ載ス）

留守官
長官（正三位）一人
掌留守庶務
次官（從三位）一人
掌同長官
判官（從四位）　權判官（正五位）
大主典（正七位）　權大主典（從七位）
少主典（正八位）　權少主典（從八位）
史生（正九位）

留守官ノ職務

三年十二月二十二日留守官ヘ委任ノ條件ヲ改ム

留守官京都ノ事務ヲ管ス

留守判官ハ辨官大主典ハ史官ノ心得ヲ以テ事務ヲ取扱ハシム

辨官史官ハ臨太政官ヨリ派出セシ所

留守官ヘ達　二年九月二日

一京師大學校御建替ニ付皇學所漢學所當分御廢止ノ事

一是迄之御用掛リ不殘被免候事

一是迄皇學所祭典執行之學神一ト先神祇官ヘ返座之事

一學神追テ神祇官ヨリ可被渡候事

一學政向小事ハ長官專決可致重事ハ伺ノ上可取計事

○元年三月十九日學習院ヲ開キ同四月十五日學習院ヲ以テ假ニ大學寮ト爲シ同八月十七日大學寮代ヲ梶井宮ニ移シ同九月十六日大學寮ヲ廢シ皇學所ヲ九條邸ニ漢學所ヲ梶井宮ニ假設シ二年九月二日皇學所漢學所ヲ廢シ同十一月再ヒ二條邸ヲ大學寮代トナス尋テ京都學校ト稱シ三年正月八日京都學校ヲ留守官ノ管轄トナシ同年七月二十五日京都學校ヲ廢シ府學ヲ置シ

留守長官ヘ達　二年九月十日

今般御改正ニ付テハ留守官中ニ被差置候辨官史官御廢止ニ相成候得共其官之儀ハ格別御委任之廉モ有之候ニ付判官ハ辨官大主典ハ史官之心得ニテ庶務取扱可致旨　御沙汰候事

留守正權判官ヘ達　二年九月十日

留守官ノ儀ハ格別ノ事ニ付辨官ノ心得ヲ以テ庶務取扱可致旨　御沙汰候事

留守官大主典ヘ達　二年九月十日

留守官ノ儀ハ格別ノ事ニ付史官ノ心得ヲ以テ奉職可致事



京都辨官傳達所ヲ留守官傳達所ト改稱ス

留守官出仕ノ華族二等七等ノ官祿ヲ給ス

留守官々掌ヲ置ク

留守官京都學校ヲ管ス

留守官ヲ京都府ニ合ス

三年四月二十日分離ス

留守官達　二年九月日闕

京都辨官傳達所向後留守傳達ト可稱事

右ノ通相達候事

留守官雜記抄錄　二年十月二十五日

一葉室正二位醍醐正四位去九月留守官出仕被　仰付候ニ付九月以來第七等之官祿被相渡候樣大藏省ヘ申入候事

一唐橋從四位儀去十月十三日右同樣被　仰付候間十月以來之官祿右同樣被相渡候樣大藏省ヘ申入候事

但留守官出仕之事華族第七等官祿可被下之見込也

宣旨　二年十一月二十八日

任留守官官掌

坪田從六位源朝臣貞陽

水口清直身人部連清直

留守官ヘ達　三年正月九日

京都學校追テ御規則相立候迄是迄ノ通其官支配被仰付候事

留守官達　三年正月二十四日

京都學校追テ御規則相立候迄是迄ノ通當官支配被仰付候間此旨爲心得相達候事

留守官達　三年正月二十四日

今般當官京都府ニ各併被仰付候間此段爲心得相達候事

留守官宮華族ヲ管ス

留守官ノ權限ニ關スル照會

但同府ヘ引移候儀ハ追テ可申達事

京都府ヘ達　三年正月日闕

今般留守官其府ヘ合併被仰付候間此旨相達候事

同上　三年正月(日闕)

今般中御門大納言兼留守長官以本官其府事務取扱被仰付候間此旨相達候事

留守官達　三年正月二十七日

來二月二日當官京都府ヘ引移候間此段爲心得相達候事

但是迄當官傳達所ヘ差出候諸願伺等爾來當官傳達所宛ニテ同府ヘ可差出事

留守官ヘ達　三年二月八日

宮華族是迄之通其官支配被　仰付候事

○是日宮華士族邸宅地ヲ京都府ノ管轄ト爲ス

神祇官伺三年二月十八日

別紙ノ通西京同官ヨリ申越候間御同ジ申入候右見込ノ處ニテハ如何可有之哉相伺申入候也指令闕十五日

西京神祇官ヨリ神祇官ヘ掛合三年正月二十五日

是迄御用ノ事柄ニ因リ留守官ヘ打合相辨候事件ハ一應掛合ノ上取計來候且ツ御布告其外太政官ヨリ御達ジ相成候事等モ留守官ヲ經テ通達有之候處今般留守官京都府ヘ合併ニ相成候ニ付テハ右官モ從前ノ規格ニハ有之間敷總テ以京都府本官ト致シ候儀ト存候就テハ是迄御達ジノ事柄ニヨリ本官留守官兩方ヨリ御達シ相成候ニ付其中ニハ自然間違モ出來可致哉ニ相考候ニ付以後ハ諸祭典伺其外共留守官ヘ差出候儀ハ相止候テ何事ニ不因本御官ヘ相伺申度候且御達事御布告初總テノ處モ本官ヨリ御達ジ相成候樣致度右樣相候ヘハ總テ御用向一端ニ相成自然間違ノ儀モ無之儀ト存候間此段ハ篤ト御熟考ノ上何卒太政官ヘ被仰立被下度候尤其事柄ニヨリ當官關係ノ事件モ外官省ヘ留守官ヨリ申達シ候儀ハ格別ノ事右見込ノ儀申入候間至急御評決御取計相成候樣致シ度候也

追テ前件ノ通相成候ハヽ太政官ヨリ其段留守官ヘ御達シ相成候樣御申入可給候也

留守官ヨリ辨官ヘ照會三年十月(日闕)

當地出張民部大藏諸司ニ關係候御用ノ內臨時ノ事件ニテ御官ヘ伺定メ候日數無之等ノ分是迄當官ヨリ直ニ右諸司ヘ指揮ニ及候處往々本省ノ指圖無之テハ承知難致抑中立不都合ノミナラス現場御差支ニ相成候儀不少候間自今臨時等ノ御用ハ當官ノ指揮可相受旨右本省ヘ御達ニ相成本省ヨリ出張諸司ヘ及通達候樣致度候尤外官省ハ是迄當官ヘ對シ格別ノ不都合ハ無之候得共自然向後不都合ノ儀可有之哉モ難計候間是亦同樣兼テ御達置有之度此段及御懸合候也辨官ノ回報欠

留守官二條城ヲ管ス

四年三月八日京都府ノ管轄ニ屬ス

留守官京都府兼任ヲ罷メ本官ヲ宮中ニ移ス

留守官在京醫員并醫學生ヲ管ス

四年八月二十三日留守官廢止ニ依リ消滅ス

留守官ヘ達　三年三月二十二日

二條城自今其官管轄被　仰付候事

留守官ヘ達　三年四月二十日

今般京都府兼任被免候ニ付テハ從前ノ通其官宮中ヘ可引移旨御沙汰候事

京都府ヘ達　三年四月二十日

留守官達　三年五月七日

別紙ノ通留守官ヘ御沙汰相成候條爲心得此旨相達候事

今般京都府兼任被免候ニ付テハ從前ノ通其官宮中ヘ可引移旨御沙汰候事

四月　太政官

右之通被　仰出候間相達候事

但引移日限ハ追テ可相達事

留守官達　三年六月十三日

來ル十七日當官　禁中ヘ引移候間此旨相達候事

但諸大夫間假建所ヲ以傳達所ニ相用候事

留守官ヘ達　三年六月二十二日

在京醫員并醫學修業被仰付候輩總テ其官管轄被仰付候事

祭典奉幣參向ノ心得

留守官ヘ達　三年七月十七日

祭典奉幣參向ノ節
參議參向ノ社ハ次官
辨官參向ノ社ハ正權判官
以下參向諸官員準之
右之通更ニ被仰出候事

（參考）
留守官雜記抄錄三年二月十九日
大原野祭
宣命使
史
主記
官掌
使部
右參向自午下刻　御祭式始リ未刻終ル

留守官所轄京都學校ヲ廢シ京都府ニ屬ス

留守官ヘ達　三年七月二十五日

其地學校被廢府學取建被仰付候條從來管轄ノ分京都府ヘ引渡可申事
但學校御用掛總テ可差免候事

留守官宮內省合併

留守官ヘ達　三年十二月二十二日

今般御改正ニ付宮內省合併被　仰出候事（宮內省ヘ達宮內省ノ部ニ屬ス）

留守官委任ノ條件ヲ更定ス

留守官ヘ達　三年十二月二十二日

今般御改正ニ付テハ昨秋御委任之件々御廢止更ニ左之通被　仰付候事

中御門大納言
川北權大史
八見留守大主典兼之
大島留守權少主典兼之
高木留守使部兼之





一御祭典之儀是迄之通可相心得事
但納言之場ハ次官可奉仕以下官員可準之事
一平日宮中ノ儀嚴重取締尤非常失火等之節ハ京都府ト申談無遺漏處分可致事
一從來取扱來候宮中庶務一切可預知小事件之儀ハ總テ宮內省ヘ御委任之趣モ有之候間申談不都合無之樣可取計事
一諸寺願伺等是迄執奏ヨリ其官ヘ差出候處自今京都府ヘ可爲差出事

留守官有栖川外四宮ノ家事ヲ管ス

留守官ヘ達　三年十二月二十二日

有栖川宮伏見宮閑院宮山階宮梨本宮家事向一切自今於其官取締可致事
宮內省ヘ達　同日
今般御改正ニ付別紙之通留守官ヘ　御沙汰相成候條此段相達候事

留守官ヲ廢ス

布告　四年八月二十三日

留守官被廢候事

江戸市中取締ヲ改ク

江戸鎭臺

東海道鎭撫總督府ヨリ田安中納言ヘ達　元年四月二十一日

石川河內守
佐久間鐇五郎

右ハ當分市中取締申付候間嚴重ニ忠勵可有之旨　大總督宮　御沙汰候條相達候事

元年五月二十日取締ヲ免ス

（參照）
江戸町奉行ヨリ市中ヘ布達
江戸市中取締之儀町奉行ヘ御任セ被遊候旨大總督宮樣ヨリ被仰出候間一際勉勵可致旨田安中納言殿ヨ

田安中納言外二名ニ江戸鎮撫ヲ委任ス

本年五月十九日江戸鎮臺設置ニ依リ消滅

江戸鎮臺補佐等御ヲ命ス

江戸鎮臺ヲ置キ三裁判所ヲ設ク

元年七月十七日鎮臺及社寺市政裁判所ヲ廢シ鎮將府東京府ヲ置ク

同年八月八日民政裁判所ヲ會計局ト改稱

同年六月五日職員改正

リ被仰渡候ニ付取扱振之儀相伺置候品モ有之候得共右ハ追テ御沙汰有之候迄前々之通リ相心得可申旨猶被仰出候ニ付公事訴訟筋之儀ハ勿論都テ民情ニ於テ不安儀有之候ハヽ無懇念月番町奉行役所ヘ可訴出右ハ御時節柄ヲ憚リ差扣候ニモ相聞候間改テ相觸候事

大總督府參謀ヨリ田安中納言大久保一翁勝安房ヘ達　元年四月二日

江府鎮撫萬端取締之儀御委任候間可有精勤大總督宮御沙汰候事

議定池田備前守ヘ達　元年閏四月五日

德川慶喜及伏罪候處所々殘賊亂行人民安堵ノ思ヲ不爲ノ趣達叡聽被懸宸襟候依テ江戸鎮臺輔兼警衛被仰付候條人數召連急々東下抽丹誠可奉安宸襟旨被仰出候事　行ヲ果サスシテ罷ム

大總督宮ヘ達　元年五月十九日

江戸鎮臺被　仰出候事

大總督府布告　元年五月十九日

今般江戸鎮臺被差置候ニ付寺社町勘定三奉行被爲廢別紙之通被　仰出候條諸事是迄之通可相心得事

但寺社奉行所ハ社寺裁判所町奉行所ハ市政裁判所勘定奉行所ハ民政裁判所ト相唱可申事

右之通被　仰出候間不洩樣可相觸事

（別紙）

鎮臺

輔　有栖川大總督宮

社寺掛　橋本少將

町掛　大原前侍從

勘定掛　西四辻大夫





江戸鎮臺設置ニ付寺社町勘定三奉行所ノ記錄ヲ引渡シム

判事　新田三郎　小笠原唯八　江藤新平　土方大一郎　北島千太郎　西尾遠江介　横川源藏

加勢

右之通被　仰出候間町中家持借家等之者ヘ可相觸事

大藏省沿革誌抄錄　元年五月十九日

江戸鎮臺ヲ置キ衙門ヲ江戸城內ノ西城ニ設ケ八代洲河岸日比谷門內岡崎藩邸ヲ以テ社寺裁判所ノ衙門ト爲シ龍口酒幕府評定所ヲ以テ民政裁判所ノ衙門ト爲シ歌寄屋橋門內及ヒ呉服橋門內酒幕府南北町奉行ノ二邸舍ヲ以テ市政裁判所ノ衙門ト爲ス

大總督府ヨリ德川龜之助ヘ達　元年五月十九日

府下取締御委任被　仰付置候處今度當分江戸鎮臺被差置候ニ付テハ寺社町勘定三奉行所諸記錄共明二十日中ニ悉ク引渡候樣可致事

但奉行ハ被止候其以下役人ノ者當分出勤被　仰付候事

諸書

府下取締ノ儀御委任被仰付置候處今度當分江戸鎮臺被差置候ニ付寺社町勘定三奉行所幷諸記錄類今二十日中ニ悉ク御引渡可申旨御達ノ趣承知仕候以上

但奉行ハ被止共以下役人ノ者當分是迄ノ通出勤被仰付候旨是亦承知仕候以上

德川龜之助家臣　平岡丹波守花押　大久保一翁花押　服部筑前守花押　河津伊豆守花押　山岡鐵太郎花押

五月

達元年五月二十七日

町奉行組與力同心之輩自今鎮臺府附ニ被召出祿高扶持米等是迄之通被下置候事

市政裁判所町觸元年五月二十八日

今般江戸鎮臺被差置町奉行所ハ市政裁判所ト唱替是迄役々ノ儀ハ鎮臺府附ニ被仰出都テ前々ノ通事務取扱候間町々諸訴等從來町法ノ通相心得可訴出且差急候儀ニ無之町人諸願公事訴訟等ハ來月朔日ヨリ可承候間無忌憚可訴出者也

但月番ノ儀モ南北ニテ是迄ノ通隔月ニ相心得來月ハ北裁判所可相心得候

右ノ通町中不洩樣可觸知者也

市政裁判所達町々名主共元年五月

今般江戸鎮臺府被差置候ニ付町奉行所ハ市政裁判所ト唱換役々鎮臺附ニ被仰付諸事前々ノ通被取計候間其方共掛リ役等申付置候者モ是迄ノ通相心得諸事御新政ノ折柄御爲筋ハ勿論市民難澁ノ儀等能々勘辨尚又精勤イタシ見込ノ趣モ有之候ハヽ無忌憚可申立且支配内町人共ヘモ厚申含時節柄ニモ有之一同致難儀可罷在候間渡世致易キ樣世話致シ願事等ハ篤ト相糺言路不塞樣爲申立候樣可致候事

市政裁判所達元年五月組々世話掛名主共

今般江戸鎮臺被差置候ニ付町奉行被爲廢候得共市政裁判所ヘ相詰候役々之儀ハ是迄之與力同心幷支配向當分之内德川家臣之儘ニテ事務取扱可申旨被仰出候間右之趣組々番外迄不洩樣可申通事

但差紙之義別紙雛形之通相改候間其旨可相心得候

市政裁判所伺元年五月

今般市政裁判所被建置候ニ付テハ向後於市中亂妨之者有之候節ハ士ト雖モ御作法通リ裁判所手先之者ヲ以取締候心得ニ御坐候此段奉伺候以上

指令

可爲伺之通事

驛遞志稿抄錄元年六月

六月舊幕府勘定方勘仕ノ官吏皆職ヲ民政裁判所ニ奉セシム此時舊道中方ノ吏員皆民政裁判所ニ屬シ駿河以東十三國八馬遞傳ノ事ヲ司ル改本三郎民政裁判所留役ニ任シ專其事ニ幹タリ

達元年六月五日

江戸鎮臺

輔

大總督

有栖川宮

烏丸宰相







判事

輔助

權判事

監察

丹羽五位

同

清岡五位

社寺

新田三郎

民政兼會計營繕

江藤新平

市政

西尾遠太郎

同

土方大一郎

民政兼會計

北島千太郎

民政

横川源藏

片桐省介

民政兼會計

山田一郎左衛門

同

島國右衛門

右之通今般改テ被仰出候事

（參考）
有栖川宮家記抄錄元年六月二十日四ノ丸城ニ於テ三條殿ヨリ御達
江戸鎮臺被　仰付候事

大總督宮

鎮臺府駿河以東十三州ヲ管ス

達　元年六月二十八日

江戸鎮臺府管轄諸國
駿河　甲斐　伊豆　相模　武藏　安房　上總
下總　常陸　上野　下野　陸奥　出羽
右十三州鎮臺支配ニ被　仰出候事

江戸鎮臺ヲ廢シ鎮將府ヲ置ク
元年十月十八日布告ヲ以テ鎮將府ヲ廢ス

## 鎮將府

有栖川帥宮ヘ達　元年七月十七日

鎮臺被免關東軍事一途御委任被仰出候事
三條右大臣ヘ達　元年七月十七日

鎮將被仰付關以東政務御委任被遊候條更ニ御沙汰候事
但大事件ハ伺ヲ經テ處置可致事

鎮將府達　元年七月日闕

大總督宮鎮臺被免三條右大臣鎮將被　仰出候事
但自今鎮臺府之稱被廢候事
（參考）
辭令元年五月二十四日

輔相兼關八州鎮將被仰出候事

輔相三條實美
阿波中納言



右議定ヲ以テ江戸在勤
右參與ヲ以テ江戸在勤
右史官ヲ以テ同斷

薩摩少將
長岡侍從
大久保市藏
西郷吉之助
海江田彥之丞

鎮將府及東京府職制
元年十月十八日布告ヲ以テ鎮將府ヲ廢ス

布告　元年七月十七日

東京在勤

一鎮將
右東國事務ヲ總裁ス
一議定
一參與
右立法之權ヲ執リ議政官之體ニ法ルヘシ
一判事分課
諸侯　軍務　社寺　刑法　會計
一辨事
右行法之權ヲ執リ行政官ノ體ニ法ルヘシ
一史官　筆生
右鎮將被差置東國政務御委任被　仰付候ニ付駿河甲斐伊豆相模武藏安房上總下總常陸上野下野陸奥出羽十三國管轄致シ諸侯之事件ニ至ル迄總テ取扱可致事尤大事件ハ時々奏聞ヲ遂ケ候樣被仰付候事
一東京府
知府事　掌府內事務

四年十一月十三日東京府改置

鎮將府駿河以東十三箇國ヲ管ス

元年十月十八日鎮將府廢止ニ依リ會計官之ヲ管シ同年十二月二十五日行政官ノ管轄ト爲ス

駿河以東十三國諸侯以下上京藩國其他願屆鎮將府ヘ通達幷公務人東京ヘ常候

元年八月二十日公務人ヲ公議人ト改ム

## 判府事

### 權判府事

京攝ハ中ニ不及諸府縣ニ至ル迄政務一定之規則被爲立候御趣意ニ付彼是齟齬不致樣被　仰出候事

但諸藩々於テモ趣御意ヲ奉體認右政體ニ法リ追々改革終ニ天下一定之規則相立候樣之心懸可爲肝要候事

（參照）

達元年八月二十一日

今般東京府御開キ市中御取締御改正可相成之處當節御人少有之爲夫兎角舊弊相去兼候ヲハ不都合候間東京府知事附屬可被　仰付儀ニ付藩々ヨリ一人ッヽ人撰明二十二日差出候樣可致候事

達元年七月十九日

今般東京ニ於テ當分鎮將府被立置駿河以東十三箇國（駿甲豆相武房上下總常上下野奥羽）可爲支配被　仰出候間此段相達候事

布告元年七月十九日

一駿河以東十三ケ國諸侯及中下大夫上士等上京幷ニ歸國共一々鎮將府ヘ可屆出事

一同上諸願屆等ノ儀總テ鎮將府ヘ可差出事

一駿河以東十三ケ國諸藩公務人一兩人ッヽ東京ヘ可相詰事

但相詰候ハヽ早々鎮將府ヘ可屆出事

右之通被　仰出候事

松平大和守家來天野四郎稟候元年七月十七日

去ル十九日御渡御書付ノ内左ノ件々奉伺候

一駿河以東十三ケ國諸侯及中下大夫上士等上京幷歸國共一々鎮將府ヘ可屆出事

一同上諸願屆等ノ儀總テ鎮將府ヘ可差出事

御本文ノ趣ニテハ諸願屆等ノ儀總テ鎮將府ヘ差出當御役所其外御筋々ヘ不差出候心得ニテ可然候哉領地ニ付候儀ハ勿論ニ候得共主人身上ノ儀ニテモ鎮將府ヘ計差出可然哉

一駿河以東十三箇國諸藩公務人一兩人ッヽ東京ヘ可相詰事

御本文ノ趣ニテハ東京ヘ公務人差出爰許ヘハ不差出候心得ニテ可然哉爰元ハ是迄通差出候儀ニ可有御坐候哉

一右ノ通被仰付候ニ付テハ是迄爰元ニテ御達御坐候分已來ハ都テ東京ニテ御達相成候儀ニ可有御坐候哉又ハ御達事等是迄通都テ爰元ニテ御渡御坐候儀ト相心得可然哉

右件々心得相立兼候間差向奉伺候宜御差圖奉願候以上

批紙元年七月二十八日

第一條　諸願伺等總テ鎮將府ヘ可差出尤差向候事件ハ太政官ヘ可申出事

第二條　京都幷東京共兼テ御沙汰ノ通可相心得事

第三條　是迄爰許ニテ相達候類ハ此度ヨリ東京ニテ可相達尤差向候事件ハ太政官ヨリ相達候儀モ可有之事

但總テ御布告若行違候儀モ難計ニ付當分ハ先如舊御達可相成候間此旨可相心得

大關泰次郎公務人小山勘解由稟候元年七月二十五日

今般駿河以東十三箇國東京鎮將府御扱被仰出候ニ付右藩々公務人東京ヘ相詰候樣御布告ニ付御當地引拂相詰可申哉之事

一岱霧府ヨリノ判物領地高調書等總テ鎮將府ヘ差出可然哉之事

一御貸附被仰付候金札高丈拜借願ノ儀東京ニテ拜借可被仰付哉之事

一諸願御屆東京ヘ仕候上ハ此表ニテ不及御屆相濟可申哉之事

一徵兵軍資金共奥羽鎮定迄御猶豫願濟ニハ御坐候得共追テ差上候節東京ニテ相濟可申哉之事

一用達之者計差置御用取扱候者引拂東京ヘ相詰不苦候儀ニ可有御坐哉之事

右之箇條不案内ノ儀ニ付乍恐御内慮伺奉申上候以上

批紙元年七月二十八日

第二條　伺ノ通タルヘク事

第三條　當時會計官ヘ可願出事

第四條　伺ノ通タルヘシ尤指向候事件ハ爰元ヘモ可屆出事

第五條　軍務官ヘ可指出候事

但東京ヘモ可屆出事

第六條　京都幷東京トモ兼テ御沙汰ノ通可相心得事

○復古記云第一條公務人ノ指令ハ之ヲ伏ス按スルニ前書川越藩ヘノ指令ニ據レハ宜ク兩京竝置ノ事アリシナルヘシ

駿河以東十三國社寺ノ事件府藩縣ニ於テ決シ難キモノハ鎮將府ニ稟候セシム

## 布告元年七月二十日

駿河以東十三箇國社寺之儀所部之府藩縣ニテ支配可致候處其難決事件ハ府藩縣ヨリ鎮將府ヘ可申出樣
今度改テ被仰出候事
但神社之儀兼テ御布令之通勅祭神社之向等直ニ神祇官支配可受候且寺院之向官位幷參內願等朝廷ニ
關係候事者執奏ヘ可申出若執奏無之分者直ニ鎮將府ヘ可願出事
鎮將府布告　元年八月日附
今般別紙之通被仰出社寺裁判所被廢候ニ付府內ハ勿論府外之社家寺院諸願伺等是迄裁判所ヘ差出來候
分來十二日ヨリ當分鎮將府傳達所ヘ差出可申候事（別紙ハ前ノ布告ナリ）
但府內社寺領之事件幷撿使見分等ハ東京府ニテ當分取扱府外社寺領之事件ハ其藩縣ニテ取扱可申尤
其支配所未定分ハ當分民政裁判所ヘ可差出事

東京在勤官員　元年八月日附

鎮將府及東京府ノ在勤官員

鎮將府

鎮將　三條右大臣

議政局

議政　阿波中納言

議定　長岡左京亮

准議定　大久保市藏

參與　海江田彥之丞

史官　鹽谷甲介

同試補　蒲生精庵

筆生　石井左兵衛少將

吉成忠作

行政局

辨事　萬里小路左少辨

清岡五位

新田三郎

權辨事　城內取締　山田一郎左衛門

傳達　岡田雄次郎

社寺　北川亥之助

陸原愼太郎

諸侯縣　勇記

傳達　住江甚兵衛

城內取締　平川和太郎

傳達　增野文藏

同試輔　犬飼司馬太郎

南部靜太郎

史官　雇士　川上達三

同試補　立岩甚五郎

濱村藏六

記錄調役　渥美清介

尾方力之進

官掌　天野嘉左衛門

永田條之助

雇士　月形七郎

筆生　同　山内俊郎　鵜飼義雄　山下太一郎　家永又八　佃廉藏　森本久吉　永田新次郎　村尾邊　兼弘安之助

會計局
知事　民政　長谷川仁右衛門　江藤新平　島團右衛門
判事　同　横川源藏　中村莊助　肝付千早

權判事　烏丸宰相　土方太一郎

同試補

軍務局

東京府
知府事
判府事



權判府事　西尾遠江介　片桐省介

（參考）東京府史料ニ云戊辰五月三奉行ヲ廢シ町奉行所ヲ布政裁判所ト改稱セシヨリ同九月二日ニ至ル迄東京府ノ事務ヲ市政裁判所ニ於テ施行ス故ニ東京鎮府ノ名アリト雖モ其實未タ有ラス同八月十七日ニ至リ府廳ヲ立始テ公事訴訟ヲ理ス同九月二日ニ至リ市政裁判所ノ事務ヲ本廳ニ移シ始テ百揆ヲ施行シ名實完全ノ府トナル

## 大藏省沿革誌抄錄　元年八月日欠

### 東京民政裁判所租税掛官吏ノ俸給金額ヲ定ム

東京民政裁判所租税掛官吏ノ俸給ヲ定ム

租税掛議案ニ曰ク本署各掛ノ官員ハ本務及ヒ兼務ニ服執ス故ニ其ノ俸給米金ハ舊幕府支給セル者ニ取準シ務テ人員給額ヲ減約シ以テ左項ニ列記ス請フ之ニ照シテ支給スルヲ立議ニ係ル

荒地掛與頭ハ年額金一十五兩勘定ハ年額金一十兩

廻漕掛與頭并ニ廻船製造掛員ハ給額未定ニ屬ス廻漕掛勘定并ニ支配勘定ハ廻船利益金ノ多少ニ照算シテ日後ニ之ヲ限定セン普請役ハ月額金三分米三人口

産物掛與頭ハ年額金一十五兩勘定ハ年額金一十兩普請役ハ月額金三分米三人口

川船掛與頭ハ月額米一十三人口勘定ハ月額米一十八口

柳原炭會所掛與頭ハ年額金一十五兩勘定并ニ支配勘定ハ共ニ年額金一十八兩普請役ハ月額金三分米三人口

野馬牧場掛與頭ハ年額金一十五兩勘定并支配勘定ハ共ニ年額金一十八兩普請役ハ月額金三分米三人口

御藏立會掛勘定ハ年額金九兩

江戸川神田川掛與頭ハ修繕ノ役事有レハ月額米一十三人口ヲ支給シ平常ハ給與セス勘定ハ修繕ノ役事有レハ月額米一十八口平常ハ月額金九兩ヲ支給ス普請役ハ修繕ノ役事有レハ月額金三分米三人口平常ハ月額金二分ヲ支給ス

天城炭掛與頭ハ給額未定ニ屬ス勘定ハ年額金九兩普請役ハ月額金三分米三人口

米價掛與頭ハ年額金一十五兩勘定并ニ支配勘定ハ共ニ年額金一十兩判決府特ス

## 鎮將府布達　元年八月八日

鎮將府官衙ヲ舊江戸城ニ設ケ民政裁判所ヲ改メ會計局ト稱ス

今般改江戸稱東京是迄之江戸城へ鎮將府ヲ被置民政裁判所ヲ會計局ト被改候間此段相達候事

○江戸ヲ稱シテ東京ト爲スノ詔元年七月十七日ニ在リ政體門幷土地門ニ賬ス

鎮將府開成所醫學校昌平校ヲ管ス

文部省記錄抄錄　元年九月十二日

鎮將府開成所ヲ管ス

文部省記錄抄錄　元年九月十三日

鎮將府東京府所轄ノ醫學所ヲ管ス

文部省記錄抄錄　元年九月十四日

鎮將府東京所轄ノ昌平校ヲ管ス

會計局附屬ヲ置ク

會計局判事伺定　元年九月日欠

民政ハ建國ノ基礎申上候迄モ無之駿東十三州ノ儀ハ一般御統轄被遊候儀ニ付御取締筋見込ノ趣ハ追々取調申上候心得ニ御座候處差向武總其外近國ノ儀ハ從來府下ノ風俗押移リ整々任俠ノモノ共モ有之候ヨリ自然無懶博徒ノ類モ相生シ候儀殊更先般兵燹ノ爲ニ多少ノ災害ヲ蒙リ候村落ニテハ自ラ民情惑亂オヨヒ候ニ付愚夫愚婦ヲ非テハ御一新ノ御場合貫徹不仕候間畢竟諸隊ヘ鎭撫等被仰渡又ハ巡察取締ノ役々出張致シ候儀ニ候得共既ニ知縣事職被差置民心方向ヲ辨ヘ候場所ニテハ賞罰各途ニ出候樣存誤リ却テ不都合ノ儀トモ承及ヒ候ニ付熟慮合考仕候處舊政府ノ節ハ積年ノ流弊モ不少候得共自ラ治國ノ良法モ有之宿驛鄕村ヘモ其所ヲイテ身元相應ノモノ共ヱ取締筋探索方ヲモ爲心得其差配致シ候小吏モ有之吟味所オ非テ事情洞察イタシ候儀勿論右舊轍ヲ襲候筋ニハ無之候得共取捨御幷行ノ御主意トモ奉存候ニ付御府外宿驛又ハ村落中ニテ人物宜者一兩人ツヽ相選ミ會計局探索方御用爲相勤傍ラ知縣事所ノ用向ヲモ爲心得候ハヽ不良ノ儀相醸候モノ共ハ未萌ニ曝露仕候樣成行可然儀ニ有之候間別紙名前ノモノ共ヘ會計局附屬申渡探索御用爲相勤候樣仕度依之別紙相添此段奉伺候以上　別紙略ス

會計局附屬ヲ置ク

鎭臺府達　元年十月五日

會計局組頭ヲ以テ假ニ五等官ニ準ス

會計局組頭等級ノ儀當分ノ內五等官ニ可準候事

會計局達　元年十月十二日

會計局準五等官ノ月給ヲ定ム

五等ヘ被準候面々月給百兩充被下置候依之以來兼役ニテ御渡方無之候事

布告　元年十月十八日

鎭將府ヲ廢ス

東北未タ平定ニ至ラサルノ折柄一先鎭將府被相立候處今般　御東臨被爲遊候ニ付テハ萬機　宸斷ヲ以テ被　仰出候御儀ニ付自今鎭將府被廢候事

○大藏省沿革誌ニ云鎭將府ヲ廢シ其ノ事務ヲ行政官ニ屬ス

三條右大臣ヘ達　元年十月十九日

東北未タ平定ニ至ラサルノ折柄一先鎭將府被相立候處今般　御東臨被爲遊候ニ付テハ萬機　宸斷ヲ以テ被　仰出候御儀ニ付鎭將辭退之儀言上其情實被聞食願之通被免候尤輔相可爲是迄之通事

蜂須賀中納言ヘ達　元年十月十九日

今般鎭將府被廢候處是迄之通以來以本官東京在勤可有之御沙汰候事

東久世中將大久保一藏海江田彥之丞ヘ達　元年十月十九日

右同文

長岡左京亮ヘ達　元年十月十九日

關東在勤中議定同樣之心得ヲ以勤仕被　仰付置候處今度被免候事

但當官ヲ以テ東京在勤可有之事

辨事清岡五位以下諸職員ヘ達　元年十月十九日

今般鎭將府被廢候ニ付是迄之職務被　免候事

達　元年十月十九日

今般鎮將府被廢候ニ付以後可爲行政官支配事　學校

今般鎮將府被廢候ニ付以後東京府可爲支配事　病院

今般鎮將府被廢候ニ付當分可爲行政官支配事　鎮將府支配

但東京御駐輦中諸事辨事ニ可伺出事

右同文

但書同文

會計局ヲ廢シ會計官出張所トナス

會計局ヘ達　元年十月十八日

今般鎮將府被廢候ニ付會計局被相止會計官出張所ニ被仰出候事

但與頭以下諸役人ハ是迄之通相心得可申元評定所之儀ハ刑法官ヘ引渡被仰付候事

○但書ニ元評定所ヲ刑法官ヘ引渡トアルハ大藏省沿革誌ニ舊評定所ノ事務ヲ刑法官ニ關スルモノト爲ス

二年三月晦日東京會計官ヲ以テ本衙ト爲ス

奥羽民政巡察ヲ設ク

巡察使

新五郎ヘ達　二年三月十三日

本官ヲ以奥羽民政巡察被仰付候事

行政官出仕　岡谷鈕吉　同上　中村采一ヘ達　二年三月十三日

奥羽巡察使隨從申付候事

二年五月四日改テ岩代巡察使ヲ設ク





書記增野文藏外五名ヘ達　同日

當官ヲ以奥羽巡察使隨從申付候事

辨事平松甲斐權介時厚ヘ達　二年五月四日

當官ヲ以岩代國巡察使被仰付候事

但民部官副知事之可爲心得事

民部官權判事林榮次郎厚德ヘ達　二年五月四日

當官ヲ以巡察使附屬被仰付候事

成田八九郎ヘ達　二年五月四日

民部官出仕巡察使附屬被仰付候事

平松甲斐權介ヘ達　二年五月十七日

病氣願之趣無據次第被聞食岩代國巡察使被免候事

四條侍從ヘ達　二年五月十八日

民部官副知事ノ心得ヲ以岩代國巡察使被仰付候事

民部官判事試補矢野半平ヘ達　二年五月二十日

本官ヲ以岩代國巡察使附屬被仰付候事　五月二十五日被免

林榮次郎ヘ達　二年五月二十日

當官ヲ以巡察使附屬被仰付置候處被免候事

成田八九郎ヘ達　二年五月二十二日

民部官出仕巡察使附屬被仰付候處被免驛遞司知事被仰付候事

民部官判事試補　岡谷鈕吉ヘ達　二年五月二十五日

岩代國巡察使ヲ設ク

二年八月二十五日岩代國巡察使ヲ廢ス

本官ヲ以岩代國巡察使附屬更ニ被仰付候事
中村知一郎ヘ達　二年五月二十五日
本官ヲ以岩代國巡察使附屬被仰付候事

岩代國巡察使ヘ委任狀

岩代國巡察使ヘ委任狀　二年五月二十二日

一民政ハ治國之大本至重ノ事トス御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候樣トノ御趣意ノ所陸前岩代等ノ地ニ至テハ去年兵革打續平定ノ今日ニ至リ　御仁恤之　御趣意未タ貫徹セス萬民相危疑シテ物情騷然タリ實ニ大政ノ隆替ニ關渉シ不相濟事ニ付今般巡察使トシテ被遣候ニ付テハ地方官及ヒ出張諸有司ト戮力協心專ニ　御趣意ヲ奉體シ風土民俗ヲ熟察シ撫育ノ道懇切ニ其力ヲ盡シ能ク民心ヲ得上下ノ情ヲ貫徹セシムヘキ事

一判縣事以下即今民政役所在職ノ者精選減少ノ事委任スル所ナリ宜シク人材適否ヲ熟知シ冗官ナカラシムヘキ事

一年貢諸上納ハ先舊慣ニ從ヘシ但シ土地不當ノ石盛過分ノ稅等ニテ下民困窮閣カタキ件ハ篤ト取調ヲヘ可申出私ニ租稅ヲ免除スヘカラサル事

一鰥寡孤獨癈疾等無告之窮民篤ト詮議ノ上速ニ救助スヘシ
但一時賑恤勿論ト雖モ貧民ニ差等アリ救助ノ道隨テ不一兼而三等ニ分チ置漸次產業ニ基キ貧民少ナカラシムルノ制ヲ立ヘキ事

一戰地夫役ヲ勤メ或ハ死傷シ或ハ兵燹等ニテ家產ヲ失フ者其節一時ノ救助アリト雖モ今日ニ至リ困迫ノ者ハ前條ニ準スヘキ事

一刑律ハ詳細檢覈ノ上施行スヘシ苟モ輕忽ノ取計有之時ハ唯懲惡ニ足ラサルノミナラス却テ民心携貳ヲ致スヿニ付深ク心ヲ用ヒ處置宜キヲ可致事

一諸有司ハ素ヨリ所役人ニ至ル迄音物贈答最モ嚴禁トス嚴密ニ心ヲ著ヘキ事





一前條之外重大ノ事件ハ一々可窺出小事件ニ至テハ總テ委任スル所ニ付處置濟之上追テ可屆出事
右之條々宜相守者也
已巳五月二十二日　輔相

岩代國巡察使同二年月日國若松軍務局管轄ノ事件品ニ寄リ此方ヨリ指揮仕度依之此段軍務官ヘ御達ニ相成同官ヨリ當方軍務局ヘ御達有之候樣致度候事

指令　二年七月日國

事件緩急ニヨリ巡察號令ヲ受候樣出張ノ軍務局ヘ其本官ヨリ相達候樣御達ニ相成候方ト申入候云々
兵部省ヘ通達二年七月十日
今般岩代國ヘ巡察使被差向候就テハ事件ノ大小緩急ニヨリ若松軍務局ヘ指揮可致儀モ可有之仍右ノ段其御省ヨリ若松出張ノ軍務局ヘ前以御通達可有之此旨申入度如此候也

若松巡察使ヲ置ク

達　二年八月二十五日
岩代國
巡察使
右被廢候事

監察司知事松岡嘉之助ヘ達　二年五月十三日
本官ヲ以若松巡察使被仰付候事
同權判司事岩波簾之助ヘ達　二年五月十三日
當官ヲ以若松巡察使附屬申付候事

岩代國巡察使ヲ廢ス

○二年七月八日按察使ヲ置キ巡察使ヲ廢ス然ルニ若松縣ハ按察使管轄外ニ在リ三年二月二十日其所轄ニ屬ス

兩羽巡察使ヲ置ク

坊城左少辨ヘ達　二年六月十日

當官ヲ以兩羽巡察使被仰付候事

船越洋之助ヘ達　二年六月十日

當官ヲ以兩羽巡察使附屬被仰付候事

○二年六月十四日改テ坊城俊章ニ三陸巡察使ヲ命シ同月十八日盤城巡察使ヲ兼ネ七月八日按察使ヲ置キ八月五日府ヲ白石ニ設ケ俊章ヲ以テ次官ト爲ス

三陸巡察使ヲ置ク

二年六月十八日盤城巡察使ヲ置ク

久我大納言ヘ達　二年六月十日

當官ヲ以三陸巡察使被仰付候事（六月十二日罷メ醍醐民部官權判事忠順ヲ以テ之ニ代フ）

渡邊清左衛門ヘ達　二年六月十日

當官ヲ以三陸巡察使附屬被仰付候事

醍醐大納言ヘ達　二年六月十二日

三陸巡察使被仰付候事

岡部正藏ヘ達　二年六月十三日

御雇ヲ以民部官ヘ出仕三陸巡察使附屬申付候事

醍醐大納言ヘ達　二年六月十四日

依病氣願三陸巡察使被免候事

坊城左少辨ヘ達　二年六月十四日

當官ヲ以三陸巡察使被仰付候事　二年八月日闕被免

三陸巡察使ヘ委任狀　二年六月十五日

民政ハ治國之大本至重之事トス　御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候樣トノ御趣意之所三陸之地ハ去年兵馬事起リシヨリ今日ニ至リ萬民危疑物情騷然加之各藩ニ於テモ頗ル紛紜一定セサル所モ有之由實ニ大政之隆替ニ關渉シ不相濟事ニ付今般巡察使トシテ被遣候間地方官及ヒ出張諸有司ト戮力協心專ラ　御趣意ヲ奉體シ風土民俗ヲ熟察シ撫育之道厚ク其力ヲ盡シ能ク民心ヲ收メ上下之情ヲ貫通セシメ且時宜ニ依リ其城邑ニ臨ミ其情狀ヲ檢査シ懇切ニ教導人心ヲ一定セシムヘキ事

一判縣事以下即今民政役所在職ノ者云々

一年貢諸上納ハ先ツ舊貫ニ從フヘシ云々

一鰥寡孤獨癈疾等無告之舊民篤ト云々

但シ一時賑恤勿論ト雖モ云々

一戰地夫役ヲ勤メ或ハ死傷シ云々

一刑律ハ詳細撿覈ノ上施行スヘシ云々

一諸有司ハ素ヨリ所役人ニ至ル迄云々

一前條ノ外重大ノ事件ハ云々（以上七ケ條ハ二年五月二十二日岩代國巡察使ヘ御委任狀ト同文）

右之條々宜相守者也

輔相

己巳六月十五日

三陸巡察使ヘ委任狀

三陸巡察使盤城巡察使ヲ兼ネ

坊城左少辨ヘ達　二年六月十八日

當官ヲ以三陸巡察使被　仰付置候處幷盤城國巡察可致樣被　仰付候事

岡部正藏ヘ達　二年六月十八日

三陸巡察使附屬申付置候處幷盤城國巡察附屬申付候事

渡邊清左衛門ヘ達　二年六月十八日

當官ヲ以三陸巡察使附屬被仰付置候處幷盤城國巡察附屬被仰付候事

## 按察使

**達節錄** 二年七月八日

按察使ハ人材ニ從テ其位階ヲ定ム

按察使ヲ置ク

二年八月二十四日官等ヲ定ム
三年九月二十八日廢ス

三陸兩羽磐城按察府ヲ白石ニ置ク

**達** 二年八月五日

三陸兩羽磐城按察府岩代國白石ヘ被置候旨被　仰出候事（白石ハ磐城國ニ在リ）

按察使官等ヲ定ム

**布告** 二年八月二十四日

按察使諸官員等級之儀開拓使同樣被　仰付候事

（參照）

職員令抄錄

開拓使

長官（正三位）一人

掌總判諸地開拓

次官（從三位）一人

掌同長官

判官（從四位）權判官（正五位）

大主典（正七位）權大主典（從七位）

少主典（正八位）權少主典（從八位）

史生（正九位）

按察使官員同開拓使

掌按察府藩縣政績

按察使ニ今ヲテ地方官ト戮力布政施治ノ道ヲ盡サシム

**達** 二年九月二日

民政ハ治國ノ大本至重之事トス　御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候樣トノ　御趣意之處三陸磐城兩羽等之地ニ至テハ去年兵革打續平定ノ今日ニ當リ萬民猶未タ安堵セス　御仁恤ノ　御趣意貫徹





ニ至ラス實ニ大政之隆替ニ關係候間今般按察使トシテ被遣候付而ハ藩縣ノ政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心專ラ　御趣意ヲ奉體シ政教治化其道ヲ盡シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事

按察使藩縣按察ノ方法ヲ定ム

**達** 二年十一月二十四日

一藩縣ノ情狀ヲ審案シ民政ノ得失ヲ督察シ且時宜ニヨリ官吏ノ非違ヲ糺シ具狀可及奏聞事

一非常警戒ノ事アラハ管內藩兵ヲ以テ臨機ノ處置シ迅速兵部省ヘ可報知事

按察使若松縣ヲ管ス

**達** 三年二月二十日

若松縣自今七州諸藩縣同樣管轄ニ被仰付候事（七州ハ蓋磐城岩代三陸兩羽ナリ）

若松縣ヘ達 三年二月二十日

其縣先達テ巡察使ヲ被置按察使管轄外ニ有之候處此度七州諸藩縣同樣按察使管轄ニ被仰付候間此段相達候事

民部省ヘ達 三年二月二十日

若松縣自今七州諸藩縣同樣按察使管轄ニ被仰付候間爲心得相達候事

按察使ヲ廢ス

**達** 三年九月二十八日

其使被廢候事

布告 三年九月二十八日

按察使被廢候事

按察使ノ殘務ヲ山形縣ニ屬ス

山形縣ヘ達 三年十月二日

今般按察使被廢候ニ付引殘之事務其縣ニ於テ取扱候樣被　仰付候事

越後國按察使ヲ置ク
三年六月二十日廢ス

越後國藩々ヘ達　二年十月二十日

今般水原縣知事當分越後國按察使兼帶被仰付候ニ付取締向等臨機之指圖モ可有之候條此段相達候事

（參考）
新潟縣ヨリ大藏省記錄局ヘ回答九年十一月十七日
本月十日付ヲ以テ已巳十二月按察使府ヲ越後ニ被置候ニ付右衙門設置ノ地名御承知被成度御問合之趣致領承候右ハ一時之兼官ニテ別ニ衙門ヲ設ケ候儀ニ無之爲念別紙取調書ニテ御承知有之度此旨及御回答候也

（別紙）
左ノ公達ニヨツテ之レヲ考フレハ蓋シ一時ノ兼官ニシテ已巳十月ヨリ庚午六月ニ至ル共間纔カニ九閱月其使府ト稱スルモ水原縣中ニアリ固ヨリ別ニ設置スルヲ聞カス其水原縣ヲ新潟ヘ移シ新潟縣ヲ復舊スルニ際シ同縣分局及ヒ按察使ヲ殘シ置シヘキノ公達アリ共六月十七日三條西公允願ニ依テ本官及ヒ兼官ヲ免ス唯名和道一免官ノ日未詳其他國官等ニ至ツテモ任免詳ナラサルアリ惜ム按察使府ニ係ル舊記ヲ存セサルヲ只水原縣ノ簿記ト新潟縣トノ舊錄ニヨル凡ソ新置縣辛未十一月二十日以前ノ簿記散逸頗ル甚シ今纔カニ剩冊道篇ヲ拾ヒ彼此參照シテ按察使府ニ關カル者ヲ載スルノミ

明治二年已巳十月三日太政官兼勤被仰付候事（三條公允）

常分越後國按察使次官兼勤被仰付候事（三條公允）

○同年同月日太政官ヨリ同縣大參事（名和道一）ヘ左ノ仰付ヲ以テアリ

當分越後國按察使判官兼勤被仰付候事（三條公允）

○同年十一月三日知事卿（三條公允）ヘ仰出サルアリ左項ニ掲ク

左ノ如シ

今般知事殿越後國按察使兼勤被仰蒙諸藩縣之政績ヲ按察シ越地全國治教之標準トモ可相成御職掌ニ候間此際諸役員末々ニ至ルマテ奮勵自强治道隆興之意ヲ體シ候樣有之度候就テハ先達テ相達置候通申迄モ無之候得共私謁苞苴之儀者偏政之自ラ生スル所怨謗之自ラ起ル所ニシテ實ニ古今之通弊候間此上互ニ相誡シ自今諸役員中懇意同僚之者ト雖モ品物ヲ以テ音信贈答堅ク禁シ候念以テ廉節ヲ勵シ同心協力四方取則之治効相立チ候樣精々盡力可致候也

○同年十二月五日右大臣ヨリ當國按察使ヘ達文左ニ掲ク（越後國按察使ニ命シテ藩縣人民ヲ安堵セシムル趣旨ヲ抄記シ地方官ヲ激勵シ政績ヲ察シ上下之情ヲ貫通セシム可ク文中按察使府ニ係ル部分ヲ抄出ス）

民政ハ治國之大本至重之事トス御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候樣トノ　御趣意之處越後全國之儀ハ去年兵馬之衢ト爲リ加之地方官屢變換諸藩之情狀未タ區々モ有之哉ニ相聞ヘ彼此下民安堵ニ至ラス實ニ北方之動靜ニ相係リ候儀ニ付今般當分按察使兼勤被　仰付候ニ付テハ藩縣之政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心　御趣意ヲ奉體シ專ラ布政施治ノ道ヲ盡シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事





越後按察使藩縣按察ノ方法ヲ定ム

越後按察使ニ令シテ地方官ト戮力布政施治ノ道ヲ盡サシム

越後按察使ヲ廢ス

一按察使府開廳相成候事
一名和道一大參事并東郷昌一少參事按察權判官兼勤之旨末々迄不洩樣觸達ニ及候事
○明治三年庚午正月十二日參事（同上）ヨリ按察使府御用取扱候旨分局及ヒ出張所ヘ達スル左ノ如シ
今般御詮議之筋有之按察使府大主典已下當縣監督御用取扱不時其局々見廻リ可申候條此段爲心得申達候也
○同年三月七日太政官ヨリ左ノ達アリ（明治二年已巳七月二十七日新潟縣ヲシテ水原縣ヘ合併ノ公達アリ）
今般新潟縣被復候ニ付同縣ヘ被移候事
但水原ヘハ按察使并本縣分局ヲ可殘置事
○同年四月十四日新潟縣知事三條西公允ヲ以テ越後按察使次官ヲ兼ネシムルノ事アリ
○同年六月二十日ノ公達自今越後按察使被廢候

越後按察使ヘ達　二年十二月五日

一藩縣ノ情狀ヲ審案シ云々
一非常警戒ノ事アラハ云々
○二年十一月二十四日陸羽按察使ヘ達ト同文

越後按察使ヘ達　二年十二月五日

民政ハ治國之大本至重之事トス御一新以來專ラ億兆其所ヲ得テ生業勉勵候樣トノ　御趣意之處越後全國之儀ハ去年兵馬之衢ト成リ加之地方官屢變換諸藩之情狀未タ區々モ有之哉ニ相聞ヘ彼是下民安堵ニ至ラス實ニ北方之動靜ニ相係リ候儀ニ付今般當分按察使兼勤被　仰付候ニ付テハ藩縣之政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心　御趣意ヲ奉體シ專ラ布政施治ノ道ヲ盡シ上下之情ヲ貫通セシム可ク候事

越後按察使ヘ達　三年六月二十日

自今其使被廢候事

越後國藩々ヘ達　三年六月二十日

越後國當分按察使被置候處自今被廢候條爲心得此段相達候事

貢士ノ制

元年五月二十七日達ヲ以テ貢士ヲ廢シ公務人ヲ置ク

越後國按察使伺三年五月

越後國ノ儀ハ戰爭爾後藩縣政蹟不歸一民心離區仍之按察使御採建儡ニ御政體貫徹ノ御主意ト奉感戴候然ルニ縣務兼任所謂糺彈牧民一身ニ連累シ於藩々其誹議無之ニモ非ス況ヤ府縣百事蝟集スルニ至何以兩全可施設乎畏縮ノ至リ奉存候往々此儘時日ヲ經歷スルニ從ヒ却テ藩々ニ被輕侮御政體ニモ或ハ可關係哉彼此過慮仕候抑當國ノ土地一體ノ形勢篤ト目擊耳聞仕候ニ與羽ニ比較スレハ其宏狹ハ異ナリト雖モ全國十一藩兩縣管轄地犬牙接交藩々ハ數百年來固守ノ流習多少未全氷解自カラ政令不行彌之向モ有之且新潟ニハ外國交際彼我入混候儀不少旁以當府一途ノ官員御差下シニテ藩縣ノ政蹟可否曲直ヲ糺彈シ下民ノ苦樂ヲ檢査シ饑饉目下ニ差迫御救恤等夫是適宜ノ御所分按察立法ノ小權御假借ニ不相成候テハ御採建ノ詮モ無之奉存候斯有名無實ノ當府被建措候ヨリハ斷然被廢止自今藩縣參事春秋ニ集會政蹟遂衆議得共宜國中維持候ハヽ勝劣孰ニ可有之哉是邊ノ處諸藩出府公議人中ヘモ御下問相成方可然哉ト奉存候前條ノ結局有無共速ニ御裁斷不被仰付テハ當使ニ於テモ甚タ取計兼候廉モ有之深ク恐縮罷在候間至急御沙汰ノ程奉仰願候誠惶頓首

民部省上答三年六月

新潟縣知事越後國按察使ノ儀糺彈牧民一身ニ連累シ於藩々其誹議無之ニモアラス此儘時日ヲ經歷スルニ從ヒ却テ藩々ニ被輕侮御政躰ニモ或ハ可關係哉其他縷々苦情ヲ陳シ斷然被廢止候方仰願ノ旨御官ヘノ建白書寫一通差越當省見込モ候ハヽ可申越旨申來候ニ付右書面再三熟考候處元來按察使ハ圖外ノ大任然ヲ知事ニテ兼官候テハ主客混一條理上ニ於テ不穩所詮有名無實ニ屬シ曾テ按察ノ御主意貫通不致段今更論ヲ不待シテ明瞭ニ有之其上藩々ニ被輕侮候樣ニテハ冠履其所ヲ異ニシ實ニ御政體ニ拘リ不容易次第ト存候間申立ノ通廢府被仰出可然ト存候依之別紙相添此段申進候也

## 公議所集議院

達節錄　元年正月十七日（全文ハ官職ニ載ス）

貢士　大藩　三員　中藩　二員
小藩　一員

諸藩士其主ノ撰ニ任セ下ノ議事所ヘ差出者ヲ貢士トス則議事ニ與リ輿論公議ヲ執ルヲ旨トス貢士定員有テ年限ナシ其主ノ進退スル所ニ任ス又其人ノ才能ニ因テ徵士ニ撰擧スヘシ

達節錄　元年二月三日（全文ハ官職ニ載ス）

貢士　大藩四拾萬石以上三員中藩拾萬石以上三拾九萬石ニ至ル二員小藩一萬石以上九萬石ニ至ル一員



貢士差出方

下局ノ制附議長ノ任免

二年五月十三日職政官ヲ廢ス

諸藩士其主ノ選ニ任セ下ノ議事所ヘ差出ス者ヲ貢士トス則議事官タリ輿論公議ヲ執ルヲ旨トス貢士定員アッテ年限ナシ其主ノ進退スル所ニ任ス又其人才能ニ因テ徵士ニ選擧スヘシ

達　元年二月十日

一大藩三員　一中藩二員　一小藩一員

右ハ今般　王政御一新被爲　仰出輿論公議ヲ執候御趣意ヲ以各藩ヨリ貢士トシテ太政官ヘ差出候樣被仰付候條其御趣意ニ相基キ國々國論ニモ可相代者人撰有之差出候樣　御沙汰候事

但右拜承當日ヨリ五十日ヲ限リ差出可申尤其者參著次第辨事役所ヘ可屆出事

達　元年三月二十九日

各藩ヨリ貢士差出候ニ御趣意ハ先達テ　御沙汰ノ通ニ候處主人議定職或ハ參與職等被　仰付置候藩々ハ勤役中其儀ニ不及候尤在勤中タリ共貢士差出度輩ハ勝手次第ニ相心得候樣被　仰出候事

布告節錄　元年閏四月二十一日（全文ハ官職ニ載ス）

議政官
下局
議長　二人　辨事兼之
議員　貢士
辭令　元年五月二十四日

當官ヲ以議長之塲相勤候樣被　仰付候事

大木民平
坂田莠

○本文公議所日誌ニ據ル明治史要ニ云軍務官判事大木喬任權辨事坂田莠ヲ以テ公議所議長ノ事務ヲ兼

掘七シムト

辭令　元年六月五日

大木民平

兼テ議長之場相勤候樣被　仰付置候處頃日軍務殊更多端ニ付右被免候事

辭令　元年七月二十三日

秋月右京亮

議長被　仰付候事

○本文公議所日誌ニ據ル明治史要ニ云辨事秋月種樹ヲ以テ公議所議長ヲ兼シムト

辭令　元年十一月九日

坂田莠

徵士權辨事被免候事

諸藩貢士ヘ達　元年四月二十五日

德川慶喜段々悔悟恭順之趣愈謝罪之實効相立候ハヽ慶喜之處分且家名被立下候ニ付相續人幷秩祿高之儀衆議公論ヲ執リ御裁決被遊度　思召ニテ議事有之候間明後二十七日巳ノ刻迄ニ各見込書取候テ太政官代ヘ出參可致旨被　仰出候事

但所勞ニテ不參之向ハ見込之儀書取留主居ヲ以テ可差出候事

諸藩貢士ヘ達　元年閏四月二十九日

別紙三ヶ條御下問被仰出候間各見込相認メ來月二日禁中假建所ヘ可罷出候事

議事策問

一軍備ハ民安ヲ保ツ所以兵制ヲ定メ海陸軍ヲ興ス其術如何

監藩貢士ニ德川慶喜相續人秩祿ノ見込ヲ諮詢ス

監藩貢士ニ兵制理財東征ノ三事ヲ策問ス



貢士對策規則

元年八月朔日發ス公議所日誌前編ニ云元年六月五日租稅之章程十五日廢藩之章程二十五日衣服之議七月五日造貨幣二十五日定權量ノ對策アリト衣服ノ議ハ此ニ載スル條件外ノ問題ナリ下ニ見ユ又云七月二十五日菊亭家並支アリ飛鳥井家ニ移スト

達　元年五月二十四日

貢士對策規則

一貢士對策所當分菊亭家

一貢士對策定日

每月五日　十五日　二十五日

但シ巳刻出仕

右期日之外差掛リ候建議有之候ハヽ辨事傳達所ヘ差出可申事

一政體中所載貢士對策條件

租稅之章程

驛遞之章程

造貨幣

定權量

與外國結新約

內外通商章程

拓　疆

宣戰講和

水陸捕拿

招兵聚糧

一金穀ハ用度之第一庶政皆是ニ依テ擧ル今日會計之道何ヲ以テ其處置アラン

一東軍未奏成功人心猶危懼ヲ抱ク不知何ヲ以テ勦殲鎭定其宜キヲ得ン

○復古記云對策文見ル所ナシ之ヲ元老院ニ質セトモ詳ナラス但シ一二ノ答議諸書ニ散見スルモノアレトモ概ル ニ足ルモノナシ故ニ刪略ニ從フ

貢士ヲ改シ公務人ヲ置タ

元年八月二十日公務人ヲ公議人ト改ム

定兵賦

築城砦或武庫於藩地彼藩與此藩爭訟

右順次ニ一條ツヽ建策シテ定日對策所ヘ持參之事

但書取差出候上尚御用之有無ヲ相伺可致退出尤病氣不參之向ハ以名代可差出事

右之通被　仰出候條各勉强シテ誇大空遠之論ニ不渉時宜之適用ヲ主トシ著實施行之建議專要ニ可相心得旨　御沙汰候事

達　元年五月二十七日

一從來於諸藩留主居役ヲ以公務取扱候儀不相當ニ付向後公務人之職ヲ設ケ貢士是ヲ勤メ都テ　朝廷ニ關係致候事件可爲取扱候事

但公務人ハ國論ニ可代者勿論之事ニ候得ハ　朝廷ニテハ公務人即貢士ニシテ其藩ニテハ國論ニ可代職分タルヘシ其心得ヲ以テ人材任用可屆出事

一公務人於藩々新ニ國論ニ可代職分之者ニ命シ差出候ハヽ其藩是迄之貢士者爲引取可申是迄差出置候貢士ニテ公務人ニ命シ候ハヽ其藩ニテ國論ニ可代職分ニ任擧可致事

一公務人員數被差替等ノ儀ハ可爲貢士規則之通事

但定員之外助役ヲ置病氣等ノ節御用ノ事件傳達等可致候儀ハ可爲勝手事

一公務人ハ始終　朝命ヲ奉シ其藩論ヲ振起シ萬端ノ取扱等幷議事ノ條目各國ノ持論凡テ實著ニ基キ各自固有之見込モ相立敢テ他ノ耳目ヲ借リ强テ雷同不致樣可相心得事

右ノ通被　仰出候ハ　朝廷ノ御趣意諸藩ノ情實脉絡貫通四海一途ノ御規模被爲立候御旨趣ニ付厚ク可相心得事

宇和島藩伺元年六月二十四日

以留守居公務取扱候儀不相當ニ付向後公務人之職ヲ設ケ貢士是ヲ勤メ都テ朝廷ニ關係致候事件可爲取扱旨被仰出候處侍從ニ於テハ宰相勤役中ハ矢張是迄ノ通留守居ニテ公務爲取扱度奉存候此段不苦儀ニ



公務人差出方

元年八月朔日對策ヲ設ス

候哉御伺申上候樣申付越候以上

指令

主人勤役中是迄貢士不差出ニ擧シ公務人對策ハ不致候共公務爲取扱候者ハ稱公務人御布告相當之職分ノ者タルヘキ事

辨事達　元年六月九日

一今般被　仰出候公務人之儀主人在邑等ニテ速ニ任擧難出來向者差當公務ハ從來之留守居等ニテ取扱對策ハ是迄之貢士ニテ相勤早々公務人任擧之運ヒ可致事

但公務人之儀ニ付前文ニ關リ候廉々願伺等有之向ハ一々御差圖ニ不被及候間右前文ニ照シ合セ取計可致事

一對策定則ハ月末御布告之處ハ五日對策定日ニ何之斷モ無之向往々有之布告遲滯之故ニモ可有之候間早々通達致シ已後ハ定日毎ニ兼テ被　仰出候通聊不憚忌諱對策建言可有之事

衣服ノ制ヲ質問ス

御下問　元年六月十一日　貢士ヘ

衣服之制寒　稱身體裁適宜上下之分ヲ明ニシ內外ノ別ヲ殊ニスル所以ナリ然ルニ近世其制一ナラス人各其服ヲ異ニシ上下混淆國體何ヲ以立ツヿヲ得ン故ニ古今ノ沿革ヲ考ヘ時宜ヲ權リ公議ヲ採リ一定ノ御制度被爲立度　思召ニ付各見込之儀書取ヲ以テ來ル二十五日限言上可有之樣　御沙汰候事

尙以前文建議ニ付御定政體中課目對策二十五日分ハ來月五日差出當日ハ前文建議丈ケ對策所ヘ持參可有之候事

駿河以東諸藩公務人東京ニ駐在セシム

布告節錄　元年七月十九日（全文ハ十三ケ國諸侯以下願屆進達）

一駿河以東十三箇國諸藩公務人一兩人ツヽ、東京ヘ可相詰事

但相詰候ハヽ、早々鎭將府ヘ可屆出事

右之通被仰出候事

議事體裁改正ニ付月次ノ對策ヲ廢ス

諸藩公務人貢士ヘ達　元年八月朔日

議事之體裁御改正ニ付毎月三次ノ對策被廢候事

但見込存付之次第ハ何事ニ依ラス不憚忌諱精々建白可致且議事之節ハ臨時ニ被爲召　御下問可有之間兼テ相心得可申旨被　仰出候事

公務人ヲ改テ公議人ト稱シ則ニ公用人ヲ置キ從前留守居役ノ職ヲ掌ラシム

布告　元年八月二十日

過日被　仰出候公務人之儀今般御改ニ相成公議人ト相唱ヘ其職ハ即議員ニシテ　朝命ヲ奉承シ藩情ヲ達スルヿヲ旨トス更ニ公用人ヲ相設從前留守居役ノ職務ヲ掌リ候樣可致旨被　仰出候事

元年十月二十八日公議人職制ヲ定ム

但公議人員數ノ儀ハ從前貢士之通タルヘク候事

三年九月十日藩副ヲ改メ公議人公用人ノ稱ヲ廢ス

議事院開設ノ建議

下局議長秋月種樹上申元年九月十日

別紙名前之者共今日面會仕度申出候間面會仕候處大略申出候ニハ先般貢士差出シ候樣御沙汰有之各藩人撰ニテ人員差出ヲ申候然處貢士ヨリ公務人又公議人ト名目ハ相變シ候得共更ニ御用無之空消光陰申候右ニテハ折角人撰ニテ差出シ候甲斐モ無御坐自然人心ニモ拘リ朝廷拒人口樣之取沙汰等起リ候テハ甚以恐悚仕候間何卒議院下局之御用相勤候樣被仰付度左樣相成候得ハ大ニ上下ノ情モ通シ藩々士氣モ振ヒ可申候間何卒左樣相成候樣相願候右樣申出候故此段申上置候何トカ御所置被付度者歟萬一御所置付不申候得ハ今後右樣申出候節返答振御指圖被成下候樣奉願候（別紙非朱批欠）

一上下之情ヲ通シ天下之公論ヲ開ンタメ議事院ヲ開キ議事ヲ興シ以テ御誓約ノ空文ニ落チス議長其職ヲ不失候樣相成度事

一議事院未開ケサル前ニテモ公議人ヲ鼓舞シ上下ノ情ヲ通シ各其職ヲ盡ケシメ人心ヲシテ倦サラシメンノ實効相立申度事

一御誓約ニ據ルニ萬機公論ニ決スヘキノ儀ニ付今般御東幸ニハ議長議員ヲ率テ供奉スヘキ事

一府藩縣ニ置ク議事院ヲ設ケ議事官ヲ置キ其中ヨリ推テ朝廷ノ議事官トスヘキ條理ナレハ先ツ京都府東京府ニ於テ議事院ヲ開クヘキ事

一大木民平參與ヲ以テ議長被仰付度事

一議員ノ精撰法被爲舉度先有合ノ公議人ヲ以テ衆論ヲ盡シ利害得失ヲ考究シ精撰法ノ端緒ヲ開キ申度事





但公議人中ニ於テ人撰ヲ以テ冊煎ト申職申付度事本議月日ヲ略セス蓋上申書ニ附シテ上リシモノナラン

達　元年九月十二日

過日被仰出候公議人姓名未屆出藩々モ有之候間來十三日迄ニ屆出可申事

但未撰擧分ハ其旨可屆出事

○復古記云議員姓名官記家記等ニ散見スルモノ百二十四藩各家ニ問ヒ得ル所百藩人員合計二百三十五人今共上申書ヲ省キ姓名ヲ左ニ錄ス但シ藩主ノ官職アル者或ハ出シ或ハ否ス亦貢士ノ例ノ如シ公議人姓名之略ス

議事體裁取調總裁ヲ置ク

大木民平鮫島誠藏森金之丞福岡藤次神田孝平ヘ達　元年九月十八日

右議事體裁御取調被仰付候事

議事體裁取調掛ヲ置ク

山内中納言ヘ達　元年九月十九日

當官ヲ以テ議事体裁取調方總裁被仰付候間廣ク萬國ノ制度ヲモ相考ヘ時理的當ノ議事興立可致樣可相心得事

議事体裁取調所ヲ東京ニ設ク

元年十一月十九日布告ヲ以テ議事體裁取調所ヲ東京ニ設ク

但秋月右京亮福岡四位大木民平鮫島誠藏森金之丞神田孝平ヘモ右取調御用掛被仰付候間夫々管轄致シ早々成功可致候事

福岡四位大木民平鮫島誠藏森金之丞神田孝平ヘ達　同日

兼テ被仰付置候議事体裁取調御用此度山内中納言ヘ總裁被仰付候間以後右御用向ニ關係致シ候儀ハ總裁ヘ可伺出事

秋月右京亮ヘ達　同日

議事体裁取調被仰付候事（此後ノ命免ハ略ス）

但山内中納言ヘ右御用總裁被仰付候間其筋ノ儀ハ可申談事

議事體裁ヲ改正スルノ要旨

達 元年九月二十一日

議事院之儀ハ廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スルノ御趣旨ニメ最重大之擧ニ有之先般公議人ヲ被置議員ニ被充課目對策御試相成候處遂ニハ空文ニ流レ却テ對策及第等之弊風可生勢ニ付一先課目對策被廢止改テ大ニ國家實用之輿論公議ヲ被興候　思召ニ候然ル處公議人ハ其材ヲ撰ヒ可代國論旨前以御布令ニモ相成候故各其材ニ不乏事ニハ可有之候得共猶又列藩ヲ　御達觀被爲遊候ニ中ニハ藩論未定公議未立向モ有之哉ニ相聞即今議事之制有之候テモ名實齟齬致シ　朝廷列藩之際氣脈ヲ通シテ公議ヲ興シ候御趣意ニモ不相副徒ニ空論浮議ニ渉リ一己之私見ヲ以テ衆說ニ雷同致ス等之弊ヲモ相生スヘク以テ御遲回被爲在候得共實ニ一日モ不可缺ハ公議ニ付爾以藩論ヲ一定シ公議ヲ振起シ　朝廷ニ於テ大ニ議事之制ヲ御興立可被爲在ニ付追々其制ニ基キ　皇國一致氣脈相通シ候樣銘々可致盡力旨被　仰出候事

諸藩公議人ヲ東京ニ趣カシム

達 元年九月二十一日

此度　御東幸ニ付テハ諸藩公議人之內一國一人宛海陸勝手次第　御警蹕前後東京ヘ可罷越旨被　仰出候事

但右差越候人體之儀ニ付御用有之候間公議人一同來二十五日巳刻飛鳥井家ヘ出頭可致事

諸藩公議人ヲシテ一藩ノ定論ヲ以テ下問ニ奉答セシム

達 元年九月二十四日

今般　御東幸ニ付諸藩公議人之內一國一人宛東京ヘ可差越被　仰出置候處御都合モ有之ニ付當時詰合候公議人何レモ海陸勝手次第　御警蹕前後東京ヘ可指越旨改テ被　仰出候尤病氣等ニテ難差越向ハ別段之儀ニ付其旨可伺出候事

但シ右ニ付過日相達置候明二十五日公議人飛鳥井家ヘ出頭不及其儀候事

諸藩公議人ヘ達 元年十月二十三日

議事之儀ハ先般京都ニ於テ被　仰出候通藩論ヲ一定シ大ニ國家實用ノ公議ヲ御興立被爲在度　思食ニテ當節議事之制御取調中ニ有之候處今般各藩公議人ヲ被召寄候儀ハ東北略及平定候ニ付益以皇國一致朝廷列藩ノ間氣脈相通シ屹度中興之御盛業被爲立度就テハ追々御下問之條件モ可有之ニ付銘々至正公平之　御趣意ヲ奉體認各一藩之定論ヲ以テ可奉答旨被　仰出候事

公議人職制

布告節錄 元年十二月十八日（全文ハ地方官制藩職制ノ條ニ載ス）

公議人

掌奉承朝命代國論備議員

一公議人ハ執政參政中ヨリ出スヘシ

議長ヨリ諸藩公議人ヘ達 元年十月二十九日

奧羽北越諸降賊御處置振見込書取ヲ以來ル十一月八日午刻東京城ヘ持參可致事

但美濃紙ニ認封書ニテ可差出事

諸藩公議人ヘ達 元年十一月三日

奧羽北越諸降賊御處置振見込之處書取ヲ以來ル十日午刻迄ニ非藏人口ヘ持參可致事

但東京ニ於テモ同樣被　仰出候事尤美濃紙ニ認メ封書ニテ可差出事

諸藩公議人ヲシテ奧羽北越諸降賊處置ノ意見ヲ問申セシム

布告 元年十一月十九日

今般議事體裁取調所御取建ニ相成諸藩公議人同所ニテ管轄候樣被　仰出候間其旨相心得以後建言窺屆等同所ヘ可差出候事

公議人ヘ達 元年十一月廿日

今般議事體裁取調所御取建相成諸藩公議人同所ニテ管轄候樣被　仰出候間其旨相心得建言伺屆等同所ヘ可差出候事

議事體裁取調所ヲ置キ公議人ヲ管ス

二年四月十七日議事體裁取調所ヲ廢シ制度寮ヲ置ク

府縣議員ヲ徵集シテ會議ニ列スルヲ定ム

二年二月八日府縣公議人書面ヲ以テ公議所ニ認ムセシム

右之通於東京被　仰出候ニ付而ハ當時在京ノ公議人總テ東下可致候且又公議人不差出藩々ハ早々任撰東京ヘ可罷出旨　御沙汰候事

元老院ヨリ記錄課ヘ問答十八年四月二十三日

元年十一月中議事體裁取調所建設相成候場所ノ儀往第二十一號ヲ以御問合之趣了承右ハ本院記錄中ニハ相見得不申候ヘ共其時右取調掛ノ神山議官ニ承合候處昏姫路藩邸即チ今之大藏省ノ地内ニ有之候トノ事ニ候明治史要中戊辰十二月五日公議所ヲ東京ニ置トアルノ地所ハ右議事體裁取調所ノ跡ヘ置カレタル事ト相見得申候此段及御報候也

布告　元年十一月二十五日　府縣

今般東京ニ於テ議事體裁取調所御取建相成候ニ付テハ追々御體裁相立候上ハ府縣議員モ徵集會議被仰出候間兼テ其心得可有之旨　御沙汰候事

諸藩公議人ヘ達　元年十二月六日

萬民ヲ保全シ永世不朽之　皇基ヲ確定スルハ固ヨリ萬機公論ニ出ルニ在テ即御誓文之大本ニ候依テ當夏議政行政ノ御制度相立各府藩縣ヨリ徵貢士之法御設相成候儀即　御政體之通リニ候然處春來兵禍引續候ヨリ御誓文之　御趣意或ハ未タ周達セサルモ有之候處當今追々四方鎭定彌前條之通廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシトノ　御趣意ヲ以今般改テ被　仰出東京舊姫路邸ヲ以テ當分公議所ト御定相成來春ヨリ開議致シ候樣被　仰出候間各彼我之私見ヲ去リ公明正大之國典確立之處ニ熟議ヲ遂ケ御誓文之　御趣意致貫徹候樣　御沙汰候事

但開議期日御規則等ハ追テ御沙汰可有之候事

別紙之通被　仰出候ニ付當年之儀ハ御暇下賜候間勝手次第歸藩可致候尤來正月中無遲滯東京ヘ可罷出候樣　御沙汰候事（本文ハ東京城日誌ニ依ル左ノ一項ヲ加ヘ本月十三日ニ發ス）

諸藩公議人過日早々東下可致旨相達候處於東京別紙之通被　仰出候ニ付テハ來正月中罷下候樣可致候尤未タ不差出藩々モ同樣相心得正月中屹度差出可申候事

公議所開議期日及公議人差出方

二年二月十三日開議期日ヲ改ム

布告　元年十二月十日　諸藩

一公議所開議之期日來巳年二月十五日ト被　仰出候事

一公議人人員之儀ハ是迄大藩三人中藩二人小藩一人之御規則ニ候處以來各藩一人ツヽ可差出事

一公議人之儀ハ是迄其藩論ニ可代人材差出候樣被　仰出有之候得共右ハ執政參政之内ヨリ一名致撰舉可差出事

一是迄主人在職之藩々公議人差出ニ不及樣被　仰出置候得共以來主人在職之有無ニ不拘各藩總テ可差出事

右之通被　仰出候事

（參考）

布令　元年十二月十二日　公議所日誌抄錄

一過日被　仰出候通來春開公議御開ニ相成候間共節迄ニ一同無相違東京參著可致候右公議所ノ儀ハ東京一所ト御確定相成候間此旨一統心得可罷在候事

一公議所法則案相渡候間致一覽不審ノ廉ハ掛之者ヘ承合可申候尤右ハ草案ノ事候間猶不當ノ箇條モ可有之心得候儀ハ書加來春持參會議ノ上校定可致候事

一來春公議所御開ニ相成候ニ付而者夫迄御用筋有之候ニ付議員中ヨリ入札交選法ヲ以六名ヲ薦舉シ爲惣名代時々參朝可致候事

一公議所開議ノ期日來巳年二月十五日ト被　仰出候事

一公議人人員之儀ハ是迄大藩三人中藩二人小藩一人ト被　仰出候得共先一同一人宛差出候樣被　仰出候事

一公議人ノ儀ハ是迄其藩論ニ可代人才差出候樣被　仰出候得共右者執政參政之内ヨリ一名撰舉致シ可差出候樣被　仰出候事

一是迄主人在職之藩々公議人差出ニ不及樣被　仰渡置候得共以來主人在職之有無ニ不係各藩總テ差出候樣被　仰出候事

公議所法則案ヲ定ム

二年三月日公議所法則案補ヲ定ム

公議所法則案　元年十二月日問

一會議ハ律法ヲ定ムルヲ以テ第一要務トス其餘ノ事ハ議長ノ酌定ニ依ルヘシ臨時非常ノ事ニ至テハ會議ノ關カルヘキ所ニ非ズ

一諸議員在職ノ年限ヲ四年トシ二年毎トニ其半ハヲ改撰スヘシ退職スルモノヲ直チニ再舉スルモ妨ケ無シ然ルトキハ復新舊ノ別アル可ラス

但シ初次改選ノ節ハ圖取ニテ半數ノ退職ヲ定ム可シ

一議員ハ年齡二十五以上ノ者タルヘシ

一議員ハ他ノ職務ヲ兼ヌルヲ許サス

一若シ移任或ハ退職ノ員アレハ速ニ代員ヲ撰舉スヘシ

一議員中建言セント欲スル者ハ議案ヲ作リテ之ヲ議長ニ渡スヘシ

一議員ニアラサルモノ若シ議事所ニ建言セント欲セハ議長若クハ議員ニ議案ヲ托スヘシ

一議案ノ體裁ハ簡易明白ニシテ根據アルヲ要ス

一議長ハ諸議案ヲ受取リ番號ヲ附ケ其大意ヲ抄シテ印行スヘシ

但シ公議ニ出タスノ順序ハ議長免許ヲ與フルノ順序ニ任カセ必スシモ番號ニ拘ハラサル可シ

一毎月二七ノ日ヲ以テ會議ノ定日トス

一會議定日ニハ朝第十字ニ出席スヘシ

一公議所ノ席上ニ預シメ番號ヲ定メ置開席ノ節諸議員圖取ニテ番號ヲ定メ席上ノ番號ヲ見合セテ著坐ス可シ

但右番號ハ毎月ニ相改ムヘシ

一毎月議員中交選シテ幹事六員ヲ定ムヘシ

一會議ノ法毎會一議案ヲ印行シテ之ヲ各議員ニ渡スヘシ

一各議員議案ヲ受ケ取ラハ携ヘ歸リ熟考ノ上評論ヲ加ヘ次ノ會日ニ持參シ衆中ニテ之レヲ讀ミ上クヘシ

但シ右ノ節質問スルモノ有ラハ之レニ答フ可シ

一讀上ケ質問等何レモ兼テ定マリタル番號ニ從フ可シ

一第二次議案ヲ評論スル發言數定ナシ他ハ皆一次ニ過キス

一諸議員互ニ衆說ヲ聽キ退ヒテ再考シ可否ノ二端ヲ決シ第三次ノ會日ニ持參シテ之レヲ議長ニ渡スヘシ

一右議長ニ渡ス紙面ハ最初受取タル議案ヲ用ヒ可トスル者ハ其表ノ右角ニ可ノ字ヲ朱書シ否トスル者ハ左角ニ否ノ字ヲ朱書スヘシ

一議長諸議員ノ決答ヲ悉ク集メテ點檢シ可トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告ケテ可ト決シ直ニ天裁ヲ乞フヘシ

一否トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告ケテ否ト決シ直ニ之ヲ廢スヘシ

一若シ五分三ニ三人迄ノ不足アルトキハ之ヲ決スルノ權議長ニ在ルヘシ

一可否トモ五分ノ三ニ至ラサル時ハ一歲ヲ經テ再議スヘシ

一未タ一歲ヲ經スト雖モ再議スヘシト云フモノ五分ノ三ニ至ラハ直ニ再議スヘシ

一毎會ノ所爲ヲ三事トス第一ハ前々會ニ受ケ取リタル議案ノ可否ヲ決スルナリ第二ハ前會ノ議案ヲ評論スルナリ第三ハ新議案ヲ受ケ取ルナリ之レヲ定例トス

但定例ノ如クスルヿ能ハサルトキハ議長ノ指圖ニ任スヘシ

一會議中執政官ヘ質問スヘキ條アラハ其ノ議ヲ次會マテ延引シ以テ執政官ノ出席ヲ乞フヘシ

一執政官出席ノ節ハ議員幹事之ト應接スヘシ

一右應接ノ節議長之ニ附添居リ双方ノ情實ヲ貫徹シ不都合ナカラシム可シ

一諸議案幷其評論書可否ノ多少勅許ノ有無トモ總テ印行スヘシ

一會議中議長ノ傍ニテ木版ヲ打タハ席上一統無言タルヘシ

一議員故アリテ闕席ノ節ハ他ノ一員ヘ賴ミ置クヘシ

一賴ミヲ受ケタルモノハ其人ニ代ツテ可否ヲ決スヘシ

一一員ニテ二員ノ賴ヲ受クヘカラス

公議所出仕ヲ設ク

一議員五分ノ二缺席ノ日ニハ可否ヲ決スルコトヲ許サス
一議事中言ノ差謬アルトキハ議長之レヲ糾スヘシ議長之レヲ糾サヽレハ他ノ議員ヨリ議長ニ促カスヘシ
一議事中新聞紙及ヒ道路ノ流言ヲ援據スルコトヲ許サス
此書固ヨリ案ノ字ヲ題セルヲ以テ公布スヘキニ非スト雖モ議員ニ付シテ各自ノ所見ヲ加ヘシムル爲メ急ニ上梓シテ以テ傳寫ノ勞ヲ省クノミ

議事體裁調局

辯令　二年正月九日

其方家來佐藤舜五郎儀當分御雇ヲ以公議所ヘ出仕申付候事　　土岐隼人正

其方家來後藤鋌四郎當分御雇ヲ以公議所ヘ出仕申付候事　　多賀覩貧觸下

其方藩士松平甚兵衛家來加藤孫七儀當分御雇ヲ以公議所附申付候事　　杉山權右衛門

其方家來清水錠藏當分御雇ヲ以公議所ヘ出仕申付候事　　德川新三位中將

公議所ヘ出仕申付候事　二年三月二十五日　　諏訪萬吉郎

小林傳左衛門
門谷曹藏



會計軍務刑法ノ基本定ル

諸藩公用人無用ノ集合ヲ禁ス

三年九月十日藩制ヲ改メ公用人ノ稱ヲ廢ス

辨事ヨリ會計官軍務官刑法官ヘ回達　二年正月十四日

會計官權判事被仰付議事取調兼勤　　神田孝平
同　　加藤弘藏
軍務官權判事被仰付議事取調兼勤　　森金之丞
刑法官權判事被仰付議事取調兼勤　　津田眞一郎
同判事試補被仰付議事取調兼勤　　鈴木唯一

會計軍務刑法之三基本取調ノ儀ハ方今之大急務ニ候處現場之事實精細通知不致書生論ノ如キ空說ニ屬シ候テハ實ニ不相叶儀ニ付前書之通人撰イタシ本職被仰付議事調局エ出仕被　仰出度候間其官々諸員トモ合體同力屹ト實用ニ適ヒ候基本早々取調出來候樣有之度御趣意ニ候間此段一應及御掛合候御達見モ有之候ハヽ早々御申越有之度候也
追テ早々御回達可有之候也

布告　二年二月五日

諸藩公用人ノ內間ニハ從前留守居ノ風習ヲ不脫組合ヲ結ヒ用談ニ事寄セ無用ノ集會等相催不宜風儀モ有之哉ニ相聞ヘ甚以如何ノ事ニ候以來右樣ノ儀一切廢絕宿弊一洗候樣其主人主人ヨリ屹度可相示事

布告　二年五月(日闕)

諸藩公用人之內ニハ用談ニ事寄每々遊席ニ參會酒宴ヲ催シ遂ニ不宜風儀モ有之哉ニ相聞此儀ニ付テハ

當春御布告モ有之候處其實効モ不貫全從前留守居ノ弊風不去小藩之内ニハ迷惑筋モ有之趣彼是甚以如何敷事ニ付素ヨリ藩々用辨ヲ以之儀ニ候得者屢參會候共席體正敷候樣有之度今日右等無用之儀有之候テハ第一不叶　朝意事ニ付向後弊習屹度一洗有之度御趣意ニ候間觸下一統示諭候樣被　仰出候事

布告　二年二月八日

公議所開議來ル二月十五日ト治定以來毎月二七ノ日會議有之候間各官ヨリ四等官以上壹人ツヽ出席可致旨　御沙汰候事

公議所會議ノ節各官ヨリ四等官以上一人ツヽ出席

外國官伺　二年二月十二日

當月十五日ヨリ會議御發行ニ付各官ヨリ四等官以上一人ツヽ可罷出旨御沙汰御坐候段御達ノ趣致承知候然ル處當官判事山口範藏儀ハ長崎府出張南貞助儀ハ不日箱館府ヘ發程ノ積ニ有之就テハ殘兩人ノ處一人ハ條約再議ノ取調ニ相掛居候間毎會四等官以上ノ者而已罷出候儀ハ難出來候如何相心得可然哉此段及御問合候以上

指令

當分出席ニ不及旨口達ス

奥羽諸藩公議人差出方

奥羽諸藩へ達　二年二月八日

伊達龜三郎　上村式部　南部彦太郎
酒井德之助　阿部基之介　内藤三郎
丹羽五郎左衛門　久世順吉　南部雄嘗
堀貞次郎　松平豐熊　田村鎮丸
牧野鋭橘　酒井信三郎　本多兵庫助
板倉教之助　織田壽重丸　内藤英之助

諸藩公議人之儀ハ昨年來追々被　仰出候通ニ有之候間其藩公議人一員執政參政中ヨリ相撰來ル五月中ヲ限リ東京公議所ヘ差出可申此段相達候事



布告　二年二月八日

府縣公議人ハ書面ヲ以テ公議所ニ建言セシム

府縣公議人ノ儀ハ兼テ御布告ノ通追テ徵集ノ　御沙汰可有之候ヘ共即今建言致度儀有之節ハ書面ヲ以公議所ヘ差出可申事

諸學校ヨリ公議人一名公議所ヘ出席

學校ヘ達　二年二月八日

諸學校ヨリ公議人一名宛相撰公議所ヘ可差出旨　御沙汰候事

公議所開議期日改定

達　二年二月十三日

公議所御開之儀來ル十五日御定日之處御都合ニヨリ御延日相成候代日之儀ハ追テ　御沙汰可有之候事

公議所開局ノ詔

詔書　二年二月二十五日

二年三月七日開局

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ賴トコロ以テ輕シク定ム可ラス今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜シク速ニ開局シ局中禮法ヲ貫ヒ協和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ　皇祖ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜ニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之ヲ裁決セン

東京城ニ議事所ヲ設ケ公卿諸侯二等官以上會議興立ノ規則ヲ草セシム

議事取調局ヘ達　二年二月二十五日

別紙　詔書之通議事之件々近日　御東臨之上可否　御親裁可被遊　思食ニ付一同篤ク相心得可申猶公議人ヘモ此旨早々可相達樣被　仰出候事

議事取調局ヘ達　二年二月二十五日

今般　御東幸之上東京城ニ於テ議事所ヲ設ケ公卿諸侯在官二等以上毎次會議ヲ興シ候樣被　仰出候ニ付右議事所規則等早々取調可致旨　御沙汰候事

公議人分課ヲ定ム

議長ヨリ公議人ヘ達　二年二月日問

制度律令等ヲ議スルハ都テ公議人一同ノ職務タル事勿論ニハ候得トモ一概多端ニ渉リ候テハ自然疎漏ニ流レ候憂モ可有之候依テ今假ニ別紙之通分課ノ法ヲ設ケ條間公議人何レモ自己ノ好ニ任セ右之内一課ヲ撰ミ專攻精論致シ候樣有之度候尤課目ヲ定候迚モ他事ヲ議シ候儀ハ固ヨリ差支無之筈ニ候若シ別段好ミノ課目無之候ハヽ強テ定候ニ及ハス候事

但諸課何レモ專要ノ事件ニ候間何卒無遺漏熟論有之度就テハ諸課人員可成丈ケ平均ニ行渡リ候樣有之度候事

公議人分課

課目

勧農　租税　驛遞　貨幣　外國交際　外國交易　鑛山　度量　國内商業　開墾　學校出版　刑法

軍律　海軍　宗門　陸軍　營繕水利

公議人ヘ達書

一公議人一同何科ニ限ラス議案ヲ作ルヘキ事勿論ニ候得共其科ニ當リ候者ハ別テ盡力スヘキ事

一公議人ノ本務ハ會議ニテ諸議案ノ可否ヲ論定スルニ有之候事

一公議人中分課ヲ立各其所長ニ從テ一科若クハ二科ノ取調ヲ掌リ取調出來ノ上ハ之ヲ議案トシテ議長ヘ可差出候事

一他向ヨリノ建白幷箱訴ノ類ハ議員幹事ニテ其趣意ヲ取調夫々分課ノ局エ相廻シ可申事

一分課ノ局々ニテ右諸建白ヲ猶又取調可議事ト否トヲ分別シ其議ス可キ者ハ體裁ヲ整ヘ議案ト可爲事

一諸建白箱訴ノ類可議廉ニ候處趣意明了ナラサル歟或ハ法度ニ相觸候樣ノ事有之節分科ノ人員ヨリ其當人ヲ呼出シ篤ト承リ糺シ説諭ノ上删正ヲ加ヘ議案ノ式ニ可合ス事

一議案已ニ出來ノ上ハ議長ニ差出シ公議ニ附ス可シ其節ニハ分科ノ者ト雖モ他員ト同樣公議ヲ遂ク可キ事

公議所開設ニ付四等官以上出席ノ再達

公議所開局及議長ノ命免

一議案

天裁ヲ經テ法令トナリタル後果シテ行ハルヤ否ヤ行ハレシ上ハ其利害如何等ヲ分科ノ向ニテ重立熟察シ之ヲ衆員ニ告示ス可キ事

達　二年三月五日

來ル七日公議所御開ニ付兼テ被　仰出候通五官ヨリ四等官以上一人ツヽ午刻出席可有之事

但直垂着用ノ事

公議所日誌抄録　二年三月七日

明治二年己巳三月七日公議所開議ニ付議定正親町三條前大納言軍務官准副知事久我大納言辨事大原少將議長秋月右京亮ヲ初メ神祇官權判事古川三郎會計官判事長谷川三郎兵衛刑法官判事佐々木三四郎議事取調御用掛ノ面々直垂狩衣著用諸藩公議人二百二十七人禮服著用ニテ同日第十二字公議所エ出仕公議人一同圍取ニテ席順ノ番號ヲ定メ著坐ス須臾ニシテ議長秋月右京亮　詔書ヲ讀上ル一同平伏拜聽ス

詔書（前ニ載ス）

讀上畢テ御下問五箇條ノ議案各議員ニ配分シ異存アレハ次會ニ之ヲ差出スヘキヲ達ス右畢テ第四字一同退散ス（下問五箇條次條ニ載ス）

辭令　二年三月二十三日

森　五位

本官ヲ以テ當分議長同樣可相心得旨被　仰付候事

辭令　二年四月十九日

秋月右京亮

議長被免候事

○秋月種樹ノ議長ヲ命セラレシハ元年七月二十三日ニ在リ下局ノ制及議長命免ノ條ニ載ス

當官ヲ以テ當分副議長兼勤被　仰付候事　　制度寮准撰修　神田孝平

是迄之職務被免議長被　仰付候事　二年四月二十三日　　大原重實

是迄之職務被免公議所副議長更ニ被　仰付候事　二年五月十八日　　神田孝平

本官ヲ以當分公議所副議長心得出仕被　仰付候事　二年六月二十二日　　神祇權判事　丸山作樂

○二年七月八日公議所ヲ改メ集議院ヲ置キ上下二局ト爲シ同月九日大原重實ノ議長ヲ免シ同月十日神田孟恪丸山作樂ヲ集議院下局次官ト爲シ八月十一日丸山作樂ヲ外務大丞ニ任シ同月十四日待詔下院長官阿野公誠ヲ以テ集議院次官ト爲シ神田孝平ヲ集議判官ニ任ス蓋シ是ニ於テ集議院上下二局ノ別ヲ廢ス九月四日大原重德（重實父）ヲ以テ集議長官兼侍詔ト爲ス

（參考）

上局　議長　副議長　議員

二年四月二十六日松浦詮ヲ以テ上局副議長ト爲ス同年五月二日議定鍋島直正ヲ以テ上局議長ヲ兼シム同月七日議定兼制度寮總裁山內豐信ヲ以テ上局議長ヲ兼ネ議定兼上局議長鍋島直正ニ制度寮總裁ヲ兼ネ上局副議長松浦詮ニ制度寮副總裁ヲ兼シム同月十五日大原重德ヲ上局議長ト爲シ阿野公誠ヲ副議長ト爲ス六月十八日上局副議長ヲ罷ム七月八日上局ヲ廢ス

諸侯ヲ上士ニ至ル處置規則案ヲ下問ス

五ヲ第一號議案ト爲ス此外議案之ヲ略ス但其問目ノ概略ヲ抄出シテ參考ニ備フ

御下問　二年三月七日

自諸侯至上士處置規則案

第一　諸侯其持高ノ地ヲ分割シ末家（公然宗家ノ祿高ヲ減シ末家ヘ分割シ別段判物ヲ受ル者）ト稱シ歷然諸侯或元旗下等一家格ヲ立ル者如シ沒籍ノ罪アルトキハ其秩祿　朝廷ヘ召揚ノ事

第二　右等ノ者御一新後德川家ヘ隸スル向モ亦其知行所　朝廷ヘ召揚之事

第三　諸藩ノ藏米等差遣シ諸侯元旗下等建置候向（分割祿高ノ名アリト雖モ實ハ宗家石高ノ中故國役重複相勤ル者）如シ沒籍ノ罪アリト雖トモ其秩祿ハ固ヨリ宗家石高ノ中故其分ニ差置只可爲減籍事

第四　但右等ノ向ト雖トモ一家格ヲ立ル上ハ國役ヲ務スンハアラス因テ其祿高ノ多寡ニ應シ御定額之通軍資金軍役等爲差出候事

第五　尤モ其本末場合ニテ事ナクトモ減籍致シ度向ハ願ノ上差許ニ相成候事

右御下問之御規則案可否如何決議之趣可申候事

（參考）

公議所議題

一號　本文ノ通リ　　二年三月十二日　公議所書記小野清五郎

二號　御用金可廢ノ議　　二年四月二日　福知山藩貝中野雪

三號　里數改定ノ議　　二年四月七日　軍務官判事森金之助

四號　通稱ヲ廢シ實名ヲ可用等ノ議　　二年四月十二日　會計官權判事神田孝平

五號　漢土及第法參用可然ノ議　　二年四月十七日

號外　外國官問題十七條（外交）　　二年四月十七日

號外　同四條（外債金）　　二年四月二十二日　公議所外國交際課

六號　外國商業規則案　　二年五月七日

七號　民間所持船規則案　　同上

八號　外國人ニ被雇候者規則案　　二年五月十二日

九號　天主教芟除ノ議　　同上

號外　御國體之儀ニ付問題　　二年五月十七日　藩非藩議員川四六三

十號　切腹禁止ノ議　　二年五月　制度寮撰修森金之丞

十一號　火葬廢止ノ議　　二年五月二十二日　議政官史官小野清五郎

十二號　帶刀ヲ廢スルハ隨意タルノ議　　同日　總百姓植之丞

十三號　鎭守府將軍ヲ可置ノ議　　二年五月二十七日　制度寮撰修森金之丞

二年五月二十七日　豐後岡藩貝中川潛史外一名

十四號　新規様式御許ノ議　五月二十七日
十五號　敕令廢止可然ノ議　無名
十六號　大名領分飛地ヲ廢スルノ議　二年五月二十七日　制度寮頭岩倉具視　神田孝平
十七號　未詳　二年六月二日　上野國武蔵郡　眞行寺和泉
十八號　未詳
十九號　身體ヘ黥スルヲ禁スルノ議　二年六月七日　備中淺尾藩士　堺和　鎌藏
二十號　利足定限ヲ可廢止ノ議　同日　刑法官判事試補　鈴木唯一

集議院議題

新律撰定ノ議　二年九月二日
皇漢學合併被仰出ニ付大學校規則案　二年九月十二日　大學提出
海陸二軍興張ノ議　二年九月十九日
神祇官中宣教師設置ニ關スルノ議　二年九月廢日
海軍ノ規模方略ノ議　二年十一月二十三日
藩制ノ議　三年五月二十八日
度量衡改正ノ議　三年九月二日　大藏省

行政官達　二年四月日閣

第一號　上裁

第一號自諸侯乃至上士本末處置法則案決議ノ通可然但列藩其圖籍奉納ノ儀ニ付尚追而御沙汰ノ筋可有之其レ迄ハ右法則ノ儀御沙汰ニ難被爲及旨被　仰出候事

第二號　上裁

第二號御用金ヲ廢シ國債法可相用ノ建議可然候得共當時會計ノ基本取調中ニ付追而御沙汰可有之旨被仰出候事

第三號　上裁





第三號里數改定ノ儀建議ノ通可然但シ此儀ハ尚細詳取調可申出旨民部官ヘ被　仰付候ニ付此段可相達旨被　仰出候事

公議所法則案補　二年三月日閣

一先會之議案異論無之者ハ讀上ケニ及ハス且前ニ讀上ケタル者ト同意ナレハ其趣相斷リ讀上ケニ及ハス

一讀上ケ中二字我時一毎ニ三十分時ツヽ休息スヘシ
一第五字ニ至リ終ラサレハ翌々日例刻ニ再會シテ續讀スヘシ
一讀上ケ濟タル後其書面ヲ議案臺上ニ差置ヘシ
一以來第十一字出席正午ヨリ議事ヲ始ムヘシ
一正午ニ至リ百人ニ充タサレハ其日議事ヲ休ムヘシ
一後會ニ可否ヲ決セハ名前印形ヲ加フヘシ
一議案中數箇條アリテ毎條可否一ナラサレハ逐條可否ヲ記スヘシ
一代人ノ向ハ讀上ケ可否共ニ無用タルヘシ
但シ議員中賴合ハ此例ニアラス
一代人ノ向ハ以來出席勝手次第タルヘシ

三月



公議所目安箱立札　二年三月日閣

定

廣ク公議ヲ採リ　御國法ヲ被爲立候御趣意ニ候間存寄有之者ハ書面ニ致シ此内ヘ可入モノ也

巳三月　公議所　議長

伊那縣公用人ヲ選定シテ上京セシム

伊那縣屆　二年三月十一日

當縣庶務方
正木才三郎

右ノ者爲公用人差出候宜御引廻シ御用辨相成候樣御取計被下度仍テ御達申入候也

公議人分課事務調査ノ際縣官ヘ賞罰方

議長ヨリ五官ヘ通牒　二年三月十八日

公議人夫々分課取調爲相立候ニ付テハ各其受課ノ儀ニ付自然御官等ヘ御問合不致候テハ難相分廉有之候節ハ公議人直ニ罷出候義モ可有之候間其節ハ御引合被下候樣致度存候仍テ前以此段御達シ及置候ナリ

縣官ヨリ出席ノ者等取扱方

議長達　二年三月(日闕)

一諸官ヨリ出席ノ者モ議事ニ加リ候テ可然事
一右ノ者可否ヲ決スルノ權ハ無之事
一銓選ノ法相定候マテハ公議人、朝官ニ不被任事

議事取調局ヲ廢ス

達節錄　二年四月十七日(全文ハ太政官ノ部ニ載ス)

今度議事取調局被廢制度察被置候事

公議所史官書記ヲ置ク

小野清五郎ヘ達　二年四月十九日

是迄之職務被免公議所史官被仰付候事
森鉢太郎ヘ達　二年四月十九日





是迄之職務被免公議所書記申付候事
小野清五郎ヘ達　二年四月二十八日

公議所史官被免議政官史官被仰付候事

同人ヘ達　二年四月二十八日

當官ヲ以テ公議所出仕被仰付候事

國是確定ノ會議

公議所日誌抄錄　二年四月二十三日

四月二十三日例刻當分副議長神田孝平議員百五十八人諸藩參聽人列席ヘ出仕外國官問題ノ評論ヲ讀上ケ午後第一字制度察撰脩森金之丞　詔書ヲ持參例席ニテ之ヲ讀上ル一同拜伏敬聽ス

詔書　二年四月二十日(議會ノ部ニ見ユ)

詔朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ揭ケ天地神明ニ質シ綱紀ヲ皇張シ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ルニ兵馬倉卒未タ其績ヲ底サス朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ慙ツ今ヤ乃チ親臨汝百官群臣ヲ朝會シ大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ宜シク腹心ヲ披キ肺肝ヲ表シ可否ヲ獻替スヘシ朕將ニ勵精竭力大ニ經始スル所アラントス汝百官群臣ソレ勗哉

輔相口達　二年四月二十二日

今度御國是ノ大基礎確立可被爲在御會議ニ付勅詔之通被仰出候間右見込之所書取ヲ以來月四日迄ニ可被差出候尙追々箇條ヲ以御下問被爲在候間此旨可被相心得候

但シ別段存付有之面々ハ參朝可有言上事

右讀上ケ了テ第六號外國商業規則ノ議案ヲ各議員ヘ配分シ第四字一同退散セリ

至急問題議定上達方

議長ヨリ公議人ヘ達　二年四月(日闕)

凡至急要件ノ問題コレ有ル節議員一同定見ヲ認メ議事所ニテ讀上ケ衆議ヲ盡シ同論每ニ集メテ一案ヲ

作リ建白スヘシ尤臨時非常ノ事ナレハ定則ノ可否ニ拘ラス惟行政官ノ參考ニ備ルヲ要ス
但シ評論務メテ簡易ヲ要ス策問虛飾ノ文體ヲ用ヒサルヲ欲ス

公議所議長達　二年四月(日欠)

諸侯公議參聽願ノ向ハ前以其藩議員ヨリ申入毎會十人迄差支無之事

諸侯公議協聽規則

達　二年七月八日

公議所ヲ集議院ト改稱可致旨被　仰出候事

公議所ヲ改テ集議院ト稱ス

四年八月二十日左院ニ編シ六年六月布告第二百二十八號ヲ以テ廢ス

達節錄　二年七月八日同八月二十日改正(全文ハ官職總ニ載ス)

集議院官等

集議院
長官(正三位)　一人
掌納議事、總判院務、
次官(從三位)　一人
掌同長官、
判官(從四位)　權判官(正五位)
掌糺判院務、
大主典(正七位)　權大主典(從七位)
少主典(正八位)　權少主典(從八位)
史生(正九位)
院掌(從九位)
使部



諸藩公議人公用人ヲ更ニ東京ニ置ク

諸藩公用人京都駐在ヲ禁ム

集議院ニ幹事ヲ置ク

集議院規則　二年九月改正

達　二年七月八日

諸藩公議人公用人是迄通リ東京ニ可差置事

達　二年七月二十九日

諸藩公用人自今京都ニハ差置ニ不及候事
但御用有之候節相辨ヘ候者差置兼而其姓名可屆置事

辨官ヨリ留守官ヘ通牒三年五月二十四日

諸藩公用人自今京師ニ差置ニ不及尤御用有之節相辨候者差置候樣申達置候末用達ヲ以テ御用伺度旨申出候向去年比一兩度不苦旨相達之付紙有之趣ニテ先般御掛合ノ末ハ尚又右樣不都合ノ次第等無之樣相心得居候故四月四日盤城平藩ヘ用達ノ者ヲ以御用向相辨候テ不苦旨致付紙候儀ハ決テ無之筈ニ候尤尚取調自然共通ノ付紙モ有之候ヘハ取消候樣取計申筈ニ候尤モ小藩等ニテ屋敷無之又ハ追々取拂等ニテ皆以引取候者ヲモ是非一人ハ差置樣トノ御掛合ハ何分難取計一體諸御達事其外共都テ於當地取計候ヘハ先ハ其御地ニテ格別御差支ハ無之ト存候尤別段ノ次第モ有之候節ハ大藩中藩等一兩人位ハ士族ノ內ニテ差置可有之付右ニテ觸下之者ヘハ相達候樣被御取計候テ御用相辨シ可申小藩迄モ一人ハ是非差置候樣ト申テハ至極難澁之向キモ可有之候當節宇田判官歸京ニ付相認候間委細ハ尚御承知可有之候也

明治史要抄錄　二年八月十日

幹事十二員權判官ニ準ス　ヲ集議院ニ置ク(八月二十日ノ衆議院規則中ニ見ユ)

達　二年八月二十日

集議院規則

一集議院中別ニ一局ヲ設ケ天下之進言獻策有用之材ヲ總ヘ寄宿セシメ其德行才能ヲ考試スヘキ事
一諸藩士及農工商トモ待詔出仕可被　仰付者ハ一應議院之考試ヲ經テ任用スヘキ事
但人物ニヨリ特命之撰擧ハ此限ニ非ス

一議院ニ關係之議事アル節ハ長官次官判官正權トモ太政官ニ參預可致事
一議員中ヨリ幹事十二名ヲ公撰シ正權判官ニ準シ可相勤事
　但權判官之次席タルヘク候
一議員中ヨリ名指シ撰舉有之節ハ議院ニ於テ長官次官正權判官幹事等其材能可否ヲ熟議之上可申出事
　但任用之官等職務トモ前以內諭可有之事
一議員中名指ナク擧任被　仰出候節ハ長官次官正權判官幹事等二名ヲ撰定シテ可伺出事
一議員中ヨリ撰舉之節ハ奏任以上ニ可相任事

二十四藩觸頭ヘ達　二年八月二十九日

公議人ハ執參中ヨリ可相勤旨從前之御規則ニ有之今般御改正正權大參事即チ執參ニ相當候間此段爲心得相達候事

路藩公議人ハ正權大參事ヲ以テ之ニ充ツ

集議院規則

集議院規則　二年九月日（規則中既ニ頒布ノ布告アリ然レトモ部ノ刊本ナルヲ以テ重複ヲ避ケス）

詔書

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ賴トコロ以テ輕シク定ム可ラス今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜シク速ニ開局シ局中禮法ヲ貴ヒ協和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ　皇祖ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜ニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之ヲ裁決セン

明治二年己巳三月

規則

一集議院ハ廣ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建タマフ御心ニ體シ奉リ億兆心力ヲ盡スノ場所ナリ故ニ議事ハ詔書ヲ遵奉シ太政官ト心志ヲ合シ專ラ政治ノ根本ヲ旨トシ普ク時務ニ涉リ　皇國內氣脈暌





離セサルヲ要ス
一議案ハ太政官ヨリ下スヘシ當院ヨリ立ツル議案ハ太政官ニ白テ公議ニ付スヘシ
　但未タ公議ヲ經サル議案ハ發行ヲ許サス
一議院ニ關係ノ議事アル節ハ長官次官正權判官トモ太政官ニ參預可致事
一議員中ヨリ幹事十二名ヲ公選シ正權判官ニ準シ可相勤事
　但權判官ノ次席タルヘク候
一會議ノ席ニ於テハ議員位次總テ同等タルヘキ事
一府藩縣トモ議員ハ正權大參事中ヨリ選出スヘキ事
一議員ノ進退ハ官許ヲ乞フヘキ事
一議員中ヨリ名指ノ選擧有之節ハ議院ニ於テ熟議ノ上可申出事
　但シ任用ノ官等職務トモ前以テ內諭可有之事
一議員中名指ナク擧任被　仰出候節ハ長官次官正權判官幹事等二名ヲ選定シテ可伺出事
一議員中ヨリ選擧ノ節ハ奏任以上ニ可相任事
一各員移任或ハ退職スル者ハ速ニ代員ヲ選フヘシ若シ病アツテ六十日ニ滿ル者之レニ準ス
一議員ハ二十五歲以上タルヘシ在職ハ四年ヲ以テ限トシ二年每ニ其半ヲ改選ス時宜ニ因リ直ニ其人ヲ再擧スルモ妨ケナシ
　但操行ヲ按シ勤惰ヲ察シ臨時ニ淘汰スルハ此限ニアラス
一每月二七ノ日ヲ以テ定日トシ辰ノ刻著到辰ノ半刻議事ヲ始ムヘシ
　但議事終ラサレハ翌日再會ス若シ議事ナケレハ定日タリトモ休ス
一每月圈ヲ探テ番號ヲ定メ席次評論等ノ順序トス
一評論ノ體裁簡易明瞭ヲ主トシ忠厚ノ意ニ基クヲ要ス
　但一篇ノ大意ヲ節略シ日誌編輯ニ便ス

一鐘四聲ヲ以テ席ニ就キ磬二聲ヲ以テ議事ヲ始終シ磬一聲ヲ以テ討論ヲ止ム議事終ルト雖モ二聲鐘ヲ聞カサレハ退院ヲ許サス

一毎會議案ヲ頒チ各員受テ歸リ評論ヲ加ヘ次會壇上ニテ之ヲ讀ミ異同ヲ討論シ第三會ニ至熟考可否ヲ決スヘシ

但討論ハ虛心易氣ヲ旨トシ務メテ條晰洞悉センヲ要ス尤評論ノ次第ニ由リ議案ヲ改正シ再三公議ニ付スヘシ

一凡ソ可否ハ目今行フヘキト否トニ就テ之ヲ決スヘシ

一議案ト全ク同意及ヒ異論コレナキ者ハ評論ノ節其由ヲ別記シ幹事ニ出スヘシ

一長官議員ノ決答ヲ集テ之ヲ點檢シ可トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告テ可ト決シ否トスル者五分三以上ナレハ衆ニ告テ否ト決シ幷ニ天裁ヲ仰ク

但可トスル者ハ議案ノ右角ニ可字ヲ朱書シ否トスル者左角ニ否字ヲ朱書シ甲條ヲ可トシ乙條ヲ否トスル者各條上ニ可否ヲ朱書シ皆藩印ヲ押シ議案ノ前ニ姓名ヲ表ス

一議員闕席ノ者ハ評論幷可否他ノ一員ニ託スヘシ

但託ヲ受ケタル者闕員ノ評論ヲ讀ムヘシ

一一員ニテ二員ノ託ヲ受クルヲ禁ス

一可否トモ五分ノ三ニ至ラサル時ハ他日ノ會議ニ付ス若シ即決セント欲スル者五分三ニ至ラハ直ニ再議スヘシ

一議員五分ノ二闕席ノ日ハ評論ヲ休ムヘシ

一議案幷其評論可否ノ多少　勅許ノ有無總テ梓行世ニ公ニスヘシ

一諸官ヨリ出席ノ人員議事ニ加ルモ妨ナシ

但可否ヲ決スルヲ許サス

一議事參聽ヲ欲スル者ハ當院玄關ニ願ヒ出テ許可ヲ受クヘシ

但毎會三十人ヲ許ス

一集議院中別ニ一局ヲ設ケ天下之進言獻策有用ノ材ヲ總ヘ寄宿セシメ其德行才能ヲ考試スヘキ事

但右一局ハ集議院寄宿所ト名ツク寄宿スル者集議院寄宿生ト唱フ

一諸藩士及農工商トモ待詔出仕可被　仰付者ハ一應議院ノ考試ヲ經テ任用スヘキ事

但人物ニヨリ特命ノ選擧ハ此限ニアラス

一待詔出仕ニ命セラルヘキ者幷進言獻策ニヨツテ寄宿セシムル者議事ニ加ラシメ其材能ヲ考試スヘシ

但席次議員ニ準シ可否ヲ決スルノ權ナシ

一臨時ノ規則ハ長官ノ酌定ニヨルヘシ

一先般待詔局被爲開草莽卑賤之者ニ至迄御爲筋之儀獻言可致樣御布令相成候ニ付追々存付申出候就而ハ重大之事件ハ　上裁ヲ經夫々御取捨相成候得共各官府縣限リニ而可否決定可相成程之事件申出候族ハ待詔局ニ於テ一應尋問之上爲證據局印ヲ押其官及府縣江向當人差越書面爲差出候間其事之可否得失ニヨリ取捨可致ハ勿論假令即今採用難相成儀申出候トモ懇切ニ說諭ヲ加ヘ言路洞開下情壅蔽無之樣トノ御旨趣致貫徹候樣可取計旨被　仰出候事

行政官

五月

局印ヲ受諸官及府縣江罷出候節萬一不都合之次第有之候ハヽ不及爭論猶又當局江可伺出事

但建白書差出候向者大意幷姓名月日共必表出シ差出ヘシ

待詔局

七月

待詔院下局之儀ハ天下之才能ヲ待セラルヽ所ニシテ言路洞開上下壅塞之弊ナク草莽卑賤ニ至ル迄各抱負ヲ盡サセ其所長ヲ御採用可被爲在御趣意ヲ以被設置候處今度御詮議ニヨリ集議院中ニ於テ是迄待詔院下局ニテ取扱候御用等裁判可致旨被　仰出候間其旨可相心得候事

太政官

八月

集議院規則追加　二年十月(日欠)

建白取扱規則

一建言者參院スレハ院ノ使部ニ名刺ヲ出スヘキ事
一使部建言者ノ名刺ヲ以テ院掌ニ出ス院掌參院ノ順序ヲ以テ應接所ニ呼出シ建白書一覽ノ上其主意ヲ表出シ姓名月日ヲ簿記スヘキ事
一簿記シ了テ其書ヲ大主典ニ出ス大主典受テ同ク姓名月日ヲ簿記シ權判官ニ出ス權判官受テ之ヲ閲シ落手スヘキ事
一右了テ院掌落手ノ旨ヲ建白者ニ達スヘキ事
一毎日建白掛ノ幹事一名ツヽ集議院ヘ相詰判官權判官ト同ク諸建白類取調可申事
一諸部中ヨリ議員四名ヲ公選シ一人ツヽ交番三八ノ日ニ幹事一同集會諸建白ヲ議シ可否ヲ付可申事
但二七ノ日タリヒ外ニ議事無之節ハ同斷ノ事
一前條會議ノ節建言者ヲシテ出席セシメ自ラ讀上ケ可爲致候事
但讀上迷惑ノ向ハ院中官員ニテ代讀致シ候事
一前條讀上ノ上評論可有之事
右ノ節建白者自ラ辨解致度向ハ任其意又代辨ヲ乞者アラハ可爲勝手事
一衆議ノ上可否ノ數ヲ問ヒ五分三ヲ以決著候事
但可ト決シ候ハヽ長官ノ酌定ニテ官印ヲ押シ向々ヘ差遣可申否ト決シ候ハヽ其旨當人ヘ諭シ建白書差戻シ候事
一可ト決シ候上政府ノ參考ニ備ヘキ書ハ大意ヲ提ケ別記シ本書ト幷テ長官次官參朝ノ時之ヲ呈スヘキ事
一向々ヘ差遣候後時ヲ以掛合其成行ヲ承リ可申事

集議院規則追加
五年七月二十五日集議院建白書受付規則ニ依リ消滅





但向々ニテ取捨ノ次第當人伺出候ハヽ爲申聞候事

集議院ヘ達　二年十二月二十七日

當分重大之議事無之ニ付閉院被　仰出候來春開院之儀ハ前以御達相成候事
但議員一先御暇被下候尤建言取扱之儀ハ可爲是迄通事

集議院閉院
三年三月十四日開院ヲ令ス

諸藩議員ヲ招集ス

布告　三年三月十四日

一集議院開院被　仰出候ニ付諸藩議員來ル四月中可罷出事

集議院ヘ達　三年三月十四日

別紙ノ通被仰出候間爲心得相達候事(別紙ハ前ノ布告ナリ)

大泉藩屆　三年五月七日

先般集議院御開院被仰出候ニ付テハ諸藩議員四月中可罷出旨御達御坐候ニ付大泉表ヘ至急申遣置候處當藩議員病氣ノ趣ニテ未タ到著不仕月限ニモ罷成候ニ付此段御屆申上候以上

指令

兼テ被仰出モ有之儀ニ付外正權大參事ノ内至急差出可申事

集議院上申　三年五月(日欠)

是迄議院ノ内ニハ兎角時勢ノ通セサル向モ有之候處此度議院御開ニ付候而ハ殊ニ新規撰擧ニ相成候議員モ多ク旁以方今　皇國ノ大勢ニ暗ク時機明瞭ナラサル等ノ弊有之候而ハ自然至當之議事モ相整間敷哉ト相察申候間何卒諸官省ヘ被仰達各其所掌ニ從ヒ方今ノ大勢如何當務之急如何應機ノ御所置如何後々成行ニ付見込如何等其略訳ヲ御取集ニ相成集議院ヘ御示有之候樣奉願候左モ無之候テハ議政ト施政ト意味相反シ官藩事情不通ノ基トモ可相成歟ト奉存候最モ近日御開院被仰出候趣ニ付何卒遺念無之樣是亦被仰渡被下度奉願候

卿正臺上申　三年五月二十二日

今般議員新撰ニ付方今ノ大勢ニ暗ク時機ニ明カナラサル由ニテ諸官省ヨリ即今ノ形勢當務ノ緩急應機ノ處置等其略ヲ記シ議院ニ示スヘシト是レ議院ノ拙ヲ天下ニ示ス所以ニシテ議事ニ一益アルヲ見ス何トナレハ議院ハ今日現ニ天下ニ布告シ或ハ施行スル等ノ大事件ノ可否得失ヲ議定シテ大公至正ヲ天下ニ示シ蒼生ヲ安ンセシムル所ロニシテ徒ニ空題ヲ設フケ空論ヲ張リ虛文華辭ニ役々シテ雌雄ヲ爭フヘキトコロニ非サルナリ今官省預メ見ル所ヲ示スモ是亦空題ヲ設ルニ齊シク議事ニオヒテ何ノ益アラン若シ官省ニ關スル事件ヲ議スルニ當テ其事實明ナラス施行スル所審詳ナラナル等ノ事アラハ其時ニ臨

其官省ノ長官以下ヲ議院ニ請フテ其事ヲ問答スヘシ是其情實ヲ知リ氣脈ヲ通シテ議員ヲシテ勉勵自奮議事亦切實ナラシムル所以ナリ今新撰ノ議員ハ悉ク列藩ノ大參事ニシテ其藩政ヲ施行スル者ニアラスヤ今其大任ニ居リ大職ヲ率シ今日ノ大勢ニ通セサル者實ニ窃位ノ人ト云フヘシ宜シク速ニ淘汰ノ法ヲ設ケ之ヲ勦除セシメテ可ナリ謹白

公議人ハ藩政ノ事務ニ通スル者ヲ擧シム

辨官口達覺　三年三月十四日

昨年中差出シ候議員ノ内ニハ藩政ニ預カラサルモノ或ハ東京定住藩廳ノ事務ヲ取扱ハサルモノ等有之趣右ハ藩論御採聽ノ御趣意貫徹イタサス不都合ノ事ニ候此度議院御開キ相成候ニ付テハ兼テ被仰出候通リ藩政向キ篤ト相心得候モノヲ撰擧シ藩論洞徹實地適用ノ議事相立候樣厚ク相心得可申候事

開院

集議院へ達　三年五月二十五日

來ル二十八日開院被　仰出候事

議員へ達　三年五月二十八日

今般開院ニ就テハ昨年　詔書ノ趣ヲ遵守シ愈以公平協議　聖旨ニ可奉答候事

集議院長官以下參朝

達　三年九月八日

明後十日十二字集議院長官判官幷ニ議員一同參朝之事

但衣服之義ハ平服之事

閉院

集議院へ達　三年九月十日

閉院被　仰出候事

公議人ノ稱ヲ廢シ大參事ヲ以テ議員ニ充テ公用人ノ稱ヲ廢シ參事國ヲ以テ之ニ充ツ

布告節錄　三年九月十日（全文ハ地方官制ノ部ニ載ス）

一正權大參事ノ内一人在京集議院開院ノ節即チ可爲議員事



藩制改正ニ依リ議員ニ歸藩ヲ命ス

但半年交代可致尤公議人稱呼廢止ノ事

一公用人ノ稱呼ヲ廢シ其事務ノ大小ニヨリ參事或ハ屬等ニテ用辨ヲナサシムヘキ事

議員へ達　三年九月十日

今般藩制被　仰出候ニ付テハ一同歸藩被　仰付候事

但藩制至重之事ニ付本文之通ニ候條前日御下問度量之儀ハ歸藩之上以書面可申上事

集議院へ達　三年九月十日

別紙ノ通リ議員ヘ御沙汰相成候條此旨相達候事

集議院ヲ左院ニ屬ス

六年六月二十四日集議院ノ稱ヲ廢ス左院ノ部ニ載ス

集議院へ達　四年八月二十日

自今左院ノ被管タルヘキ事

左院へ達　同日

集議院自今其院之被管タルヘキ事

待詔局ヲ東京ニ置ク

東京城内ニ設ク二年四月二十日馬場先門内ニ移ス二年七月八日待詔局ヲ廢シ待詔院ヲ置ク

待詔局待詔院

布告　二年三月十二日

大政更始以來舊弊一洗言路洞開上下貫徹少モ壅蔽無之天下有志ノ者竭丹誠爲國家無忌憚建言致候ニ付追々御採用相成候ヘトモ猶實効ノ不立厥々有之畢竟　御旨趣貫徹不致有志ノ者撰擧ニ相洩候哉ト深ク御煩念被爲在候ニ付此度於東京城待詔局被爲開候間有志ノ者草莽卑賤ニ至迄御爲筋ノ儀早々建言可致篤ト議論相遂其所長ヲ以夫々御用可被　仰付御趣意ニ候間向後潛伏隱遁辭々其志ヲ不達者有之候テハ至誠盡忠ノ素志ニ相悖リ候間尚上下一致偏ニ盡力可致旨被　仰出候事

辨事達　二年三月十七日

今般待詔局被開候ニ付テハ有志ノ者ヨリ建言ノ事柄ニヨリ其關係スル所ノ官員右局ヘ致出席篤ト可遂議論條被　仰出候間此段爲心得申入候也

待詔局ニ建言スルモノアレハ其事項ニ依リ關係ノ官員ヲシテ出席討論セシム

辭令　二年四月二日

山中五位外一名
三好退藏外一名

待詔局御用掛ヲ置ク

當官ヲ以待詔局御用掛被仰付候事

清岡岱作

待詔局知事ヲ置ク

待詔局御用掛申付候事

同　人

辭令　二年四月八日

平川和太郎

待詔局職員ヲ置ク

甲府權判事被免待詔局知事被　仰付候事

辭令　二年五月七日

三好退藏

待詔局知事被免甲斐府判事被免甲斐府判事被　仰付候事

辭令　二年四月十四日

官掌差免待詔局判事試補申付候事



待詔局判事試補申付候事

市原義兵衛
馬場弘助

行政官書記差免待詔局書記申付候事

尾藤忠三
鵜飼義雄

行政官筆生差免待詔局筆生申付候事

河野萬壽彌

御雇ヲ以待詔局判事試補申付候事

各藩議員ヘ達　二年四月二十日

今般待詔局馬場先門內元松平下總守屋敷ヘ被移候間爲心得相達候事

達　二年四月二十五日

今二十五日待詔局馬場先御門內元平岡丹波邸ヘ轉移候間爲心得相達候事

待詔局ヲ馬場先門內ニ移ス

達　二年四月二十五日

皇國基礎御確定之會議被　仰出候ニ付テハ爲國家存付有之族ハ不顧卑賤待詔局ヘ罷出無忌憚可致建言事

國是會議ニ付有志者ヲシテ忌憚ナク待詔局ヘ建言セシム

布告　二年五月九日

先般待詔局ヲ被開草莽卑賤之者ニ至ルマテ御爲筋之儀獻言イタシ候樣御布令相成候ニ付追々存付申出候就テハ重大ノ事件ハ　上裁ヲ經夫々御取捨相成候ヱ共各官府縣限リニテ可否決定可相成程之事件申

待詔局ヘ建言セシモノハ局印ヲ捺シ本人ヨリ各官府縣ニ差出サシム

出候族ハ待詔局ニ於テ一應尋問之上爲證據局印ヲ押シ其官及府縣ヘ向當人差越書面爲差出候間其事之可否得失ニヨリ取捨可致ハ勿論假令卽今採用難相成儀申出候共懇切ニ說諭ヲ加エ言路洞開下情壅蔽無之樣トノ　御旨趣貫徹致シ候樣可取計旨被　仰出候事

待詔局へ達　二年五月九日

別紙之通各官府縣ヘ御達相成候ニ付此旨相心得取計可致樣　御沙汰候事

待詔局職員　二年五月十二日

主　事　三等官　河野萬壽彌
權主事　四等官
參　事　五等官　平川和太郎
權參事　六等官
辭令　二年五月十二日

徵士待詔局參事被　仰付候事

待詔局權參事被　仰付候事

辭令　二年五月二十日

是迄ノ職務被免待詔局副主事被仰付候事

待詔局達　七年二月日闕

待詔局主事參事ヲ置ク

本條原文ヲ佚ス姑ラク明治史要ニ依ル

待詔局副主事ヲ置ク

待詔局越官者心得





局印ヲ受諸官及府縣ヘ罷出候節萬一不都合ノ次第有之候ハヽ不及爭論猶又當局ヘ可伺出事

但建白書差出候向ハ大意幷姓名月日共必表出シ差出スヘシ

待詔院官制ヲ定ム

官位相當表節錄　二年七月八日（官位相當ノ全表ハ八月二十日改正アリ官職總ニ載ス此ニ節錄スル所ハ改正前ノ表ニ據ル改正ノ表ニハ待詔院ノ下ヲ餘白ニシテ官名ヲ載セス）

待詔院

上局　學士ノ位階ハ人材ニ從テ之ヲ定ム

下局

長　官（正四位）　次　官（從四位）　判　官（從五位）

權判官（正六位）　大主典（正七位）　權大主典（從七位）

史　主（從八位）　局　掌（大初位）　使　部（少初位）

○二年七月八日大久保利通木戸孝允後藤元燁板垣正形ノ勤勞ヲ賞シ劇職ヲ解クヲ諭シ利通孝允正形ヲ待詔院學士（尋テ學士ヲ出仕ト改ム）ニ補シ元燁ヲシテ東京ニ在留セシム同月九日阿野公誠ヲ以テ待詔院下局（十日以後ハ待詔下院ト稱ス）長官ト爲ス同月十日照幡寬胤烈之助初諸武兵衛ト稱ス）ヲ以テ待詔下院次官ト爲ス同月二十七日待詔院出仕大久保利通ヲ以テ參議ト爲ス八月十四日待詔下院ヲ廢シ集議院ヲシテ其事務ヲ掌ラシメ待詔下院長官阿野公誠ヲ以テ集議院次官ト爲ス

達節錄　二年七月十三日（全文ハ太政官ノ部太政官規則ノ條ニ載ス）

一宸斷伺ノ儀ハ第一字ヨリ參入ノ事

上待詔院出仕ノ輩預參ノ事

上待詔院出仕ノ輩宸斷伺ニ預ル

待詔院集議院ヘ達　二年八月十五日

待詔院下局之儀ハ天下之才能ヲ待セラルヽ所ニシテ言路洞開上下壅塞之弊ナク草莽卑賤ニ至ル迄各抱負ヲ盡サセ其所長ヲ御採用可被爲　在御趣意ヲ以テ被設置候處今度御詮議ニヨリ集議院中ニ於テ是迄待詔院下局ニテ取扱候御用等裁判可致旨被　仰付候間此旨可相心得候事

集議院中ニ於テ待詔院下局ノ事務ヲ取扱ハシム

六年六月布告第二百二十八號ヲ以テ集議院廢止ニ付消滅ス左院ノ部ニ載ス

待詔下院出仕規則

達　二年八月十九日

待詔下院出仕規則

一隔日十字出仕二字退出之事

一議事之事柄ニ依リ時々　御下問相成候事

一出仕之節各辨官迄可相屆候事

但伺事等同斷

右之通可相心得候事

待詔院ヘ建言ノ聖令後集議院ヘ委セシム

達　二年八月二十日

建言之聖是迄待詔院ヘ罷出候處自今集議院ヘ參上可致事

待詔院集議院ヘ合併ニ付集議院ノ印章ヲ以テ建白書廻送

集議院廻達　二年八月二十四日

待詔院當院ヘ御合併ニ相成候ニ付已來當院ノ印章ヲ以テ諸建白差廻シ候間爲御心得印章相添此段申入候也

建白書討論研究掩印ノ上同付

集議院ヨリ彈正臺ヘ通達　二年十月(日闕)

待詔局集議院ニ合併相成候ニ付諸建白書ノ儀者當人呼出シ諮上ケ爲致議員中ヨリ右取調掛リ十數名ヲ公選衆議討論研究ノ上入札イタシ可ト決シ五分三以上ニ至リ候モノハ檢印ノ上夫々諸官省ヘ廻達及候事ニ規則改正イタシ畢竟言路御洞開ノ御趣意貫徹イタシ候樣衆議一決檢印ノ上差廻シ候建白之儀ニモ有之候間御採用之有無一層反復御熟議有之度存候即改正規則御心得之爲一通相添差出置候此段兼而御達シオヨヒ候也





待詔下院出仕ノ聖ニ藩制改革取調掛ヲ命ス

達　二年十月十七日

待詔下院出仕ノ面々藩制改革取調掛被仰付候事

待詔下院出仕ノ聖ヲ奏任官ニ列ス

達　三年正月五日

待詔下院出仕之聖奏任列ニ被加候事

臨時官

辭令　元年二月九日

右大辨辨城俊政

御親征大坂行幸奉行ヲ設ク

御親征大坂行幸奉行被仰出候事

御親征行幸御用掛ヲ置ク

辭令　元年二月九日

參與小原仁兵衛忠寛

大坂行幸御列奉行ヲ置ク

此度御親征行幸被仰出候ニ付右御用掛被仰付候事　元年五月二十五日被免

御列奉行　元年三月(日闕)

永井土佐守　和田雅樂大屬　富島左近將曹

深尾內藏少允　垣內尾張介　能勢攝津介

進藤左近府生　廣瀨左衛門　下河邊主稅

七條左兵衛尉　白川雅樂　大島大藏

伊藤帶刀　宗岡玄番介　榎原織部

御東幸御用掛ヲ置ク

辭令　元年九月十日

御東幸御用掛被　仰付候間當官ヘ出仕可致事

監察司御用掛　加藤伊平
御屋　山中靜逸
（九月十六日）岡本愿輔

御東幸御用掛附屬申付候事

（九月十六日）太田喜兵衛
（九月十六日）水山豐藏

御列御用掛ヲ置ク

辭令　元年十二月朔日

官掌被免御列御用掛申付候事

松山鐵藏
菅卓馬
安西源之進

使部取締方被免御用掛更ニ被　仰付候事

坊城右大辨宰相

祭祀行幸御用掛ヲ置ク

辭令　二年六月十八日

祭祀
行幸御用掛被　仰付候事



中國西國御巡幸御用掛ヲ置ク

辭令　五年五月九日

御巡幸取調御用掛被仰付候事（此後各地方御巡幸ノ都度御用掛ヲ置ク）

陸軍中將山縣有朋
陸軍少將西鄕從道

御即位新式取調御用并御即位御用掛ヲ置ク

辭令　元年八月十二日

當官ヲ以テ御即位新式取締御用被仰付候事

津和野中將　亟井茲監
神祇官判事　福羽五位美靜

大嘗會御用掛ヲ置ク

辭令　四年三月二十五日

御雇ヲ以テ即位新式取締御用被仰付候事、

津和野藩　佐伯太郎利醫
同　井上隆藏瑞枝
同　山田耕右衛門正英

御即位御用掛被仰付候事

正親町大納言實德
勘解由小路左中辨資生

大納言嵯峨實愛
大辨坊城俊政

（五月十九日）神祇少副福羽美靜
神祇大祐北小路隨光
神祇大祐門脇重綾

外國人上京參內御用掛ヲ設ク

大嘗會御用掛被　仰付候事

辭令　元年二月十六日

（六月二十七日）從一位中山忠能

越前宰相

後藤象次郎

大久保一藏

木戸準一郎

廣澤兵助

中根雪江

英國王子渡來ニ付領客使ヲ設ク

今度外國人上京參內御用掛被　仰付候事

布告　二年七月六日

英國王子渡來ニ付被設領客使候事

伊達中納言へ達　二年七月六日

今度英國王子渡來ニ付領客使被　仰付候事

大原正四位へ達　二年七月九日

領客使被　仰付候事

宮本外務權少丞へ達　二年七月日闕

本官ヲ以掌客被　仰付候事

伊達從二位へ達　二年八月（日闕）

領客使被　免候事





外賓待遇禮式取調委員長ヲ設ク

○此後五年十月露國親王六年八月伊國皇族十一年十二月獨逸國皇孫十二年一月米國前大統領十四年二月布哇國帝十七年八月瑞典國皇子來航ニ際シ接伴掛ヲ設ク外交門外賓接伴ニ載ス

辭令　十二年十月十四日

外賓待遇禮式取調委員長被仰付候事

參議兼外務卿　井上馨

東北征討將官

征討大將軍

辭令　元年正月三日

軍事總裁職被仰出候事

仁和寺宮嘉彰親王

辭令　元年正月四日

征討大將軍被仰出候事

仁和寺宮

○東伏見宮家記ニ云元年正月四日征討將軍ニ任セラレ錦旗節刀ヲ賜フ同月二十八日凱旋大將軍ノ旗幷錦旅節刀返上

辭令　元年正月二日口達

征討將軍仁和寺宮隨行被　仰付候事

平松時厚

辭令　元年正月（日闕）

軍監被　仰付候事　正月二十八日凱旋

平松時厚

辭令　元年正月三日

軍事參謀被　仰付候事　正月八日依願被免

伊達宗城

辭令　元年正月四日

征討參謀被　仰出候事

烏丸光德

辭令　元年正月四日口達

總督仁和寺宮大阪出陳ニ付錦旗奉行被　仰出候事

四條隆謌

辭令　元年正月（日闕）口達

錦旗奉行被免總督宮參謀被　仰出候事　四條隆謌
辭令　元年正月四日
征討將軍嘉彰親王出陳ニ付錦旗奉行被　仰付候事（歷ニハ征討以下ノ十二字無シ）　五條爲榮
辭令　元年正月六日
征討將軍宮軍事參謀被　仰付候事　大山格之助綱良
辭令　同日
大阪出張被　仰付候事　大山格之助
辭令　元年正月日闕
軍事使番被　仰付候事　澤宣種
辭令　元年正月（日闕）
使番役被　仰付候事　穗波經度
辭令　元年正月（日闕）（於東寺東久世少將口達）
征討將軍宮軍事參謀被　仰付候事　高崎正風（左京豐睿）
辭令　元年正月四日
征討總督仁和寺宮副參謀被　仰付候事　山田市之丞顯義
辭令　元年二月九日
御親征大總督　被仰出候事　有栖川總裁宮熾仁親王（大總督）
勅語　元年二月十五日
今般征東軍務委任ノ間速ニ可奏掃攘ノ功事（錦旗節刀下賜）
（參考）
有栖川宮家記抄錄元年二月十四日
御親征大總督　有栖川帥宮
同　參謀　正親町中將



錦旗奉行　西四辻大夫
同　侍手　西郷吉之助　林玖十郎

改爲東海道先鋒兼鎭撫使總督　穗波三位
同　副　河野宮內大錄
同　參謀　平岡掃部權助　上田右兵衛大尉　河野宮內大錄　山中右近番長　橋本左近番長　三澤右近番長　橋本伊勢介　富島左近將曹　座田民部少錄　廣瀨左兵衛權大尉　岩垣大舍人大屬

改爲東山道先鋒兼鎭撫使總督　橋本少將
同　副　柳原侍從
同　參謀　木梨精一郎　海江田武次　岩倉大夫　岩倉八千丸

改爲東山道先鋒兼鎭撫使總督　乾退助
同　副　宇田栗園
同　參謀　高倉三位　四條大夫　小林柔吉　津田山三郎

奧羽鎭撫使　澤三位
同　副　醍醐少將
同　參謀　黑田了助　品川彌四郎

海軍總督　聖護院宮
同　參謀　庭田大納言

右之通被　仰下候事

中山前中納言　元年三月十二日罷
伊東外記
增田左馬進

有栖川帥宮へ達　元年十月二十八日

東北及平定候ニ付大總督辭退錦旗節刀返上ノ趣被聞食候依之來ル二日參內可有之旨被仰出候事

同上　元年十月二十九日

東北鎭定ニ付依願大總督被免候事

辭令　元年二月九日　穗積經度

錦旗奉行被仰出候事

辭令　元年二月九日　河鰭實文

御親征可爲錦旗奉行被　仰下候事　元年八月二日被免　萬里小路左少辨

但來ル十五日可爲發遣候事

辭令　元年七月十日　萬里小路左少辨

河鰭大夫御用ニ付上京中錦旗奉行加勢被　仰付候事

辭令　元年八月二日　萬里小路左少辨

御旗監被　仰付候事

但當分ノ處參謀助勤可有之候事

辭令　元年八月九日　萬里小路左少辨

當分大總督府參謀兼勤被　仰付候事

辭令　元年十月(日欠)　萬里小路左少辨

水戸表不穩形勢ニ付爲鎭定急速出張可有之旨御沙汰候事

辭令　元年二月九日





御親征大總督可爲參謀被　仰下候事　八月二日被免　正親町中將公董

但來十五日可爲發遣候事

辭令　元年二月八日　西四辻公業

大總督府參謀被　仰出候事

辭令　元年二月十四日　西鄕吉之助隆盛

大總督參謀被　仰付候事

辭令　元年二月十四日　林玖十郎通顯

御親征ニ付大總督參謀被　仰付候事　(元年閏四月二十九日被免五月六日參謀可爲是迄之通旨被仰出)　得能通顯亞斯登

辭令　元年二月十四日

大總督下參謀被　仰付候事　寺島秀之助直方秋介

辭令　元年二月二十七日

御親征副參謀被　仰付候事　寺島秀之助

軍防事務局辭令　同日

大總督有栖川宮隨從被　仰付東海道進軍可致旨御沙汰候事　木村三郎重任

辭令　元年四月十七日

御出陣中大總督府參謀助補被　仰付候事　穗波經度

辭令　元年四月(日欠)

參謀加勢被　仰出候事　穗波經度

辭令　元年五月二十日

大總督府參謀被　仰出候事(五月二十六日小田原問罪使總督被仰付)　穗波經度

但錦旗奉行被免候事

辭令　元年八月二日

大總督宮參謀被　仰出候事　　穗波經度
辭令　元年閏四月二十九日

下參謀補助タルヘキ旨大總督宮御沙汰候事　　河田景與
辭令　元年五月二十日

大總督府下參謀被　仰付候事　　河田景與
辭令　元年六月十七日

奥州相馬口ヘ出張被　仰付候事　　河田景與
大總督府辭令　元年五月十九日

東征參謀被　仰付候事　　渡邊清
辭令　同日

武州飯能出張被　仰付候事（五月二十五日凱旋復命）　　渡邊清
辭令　元年五月二十六日

大總督府下參謀助被　仰付候事　　渡邊清
辭令　元年五月二十日

大總督府下參謀被　仰付候事　　吉村長兵衛叙翰
辭令　元年六月十日

大總督府參謀被　仰出候事（九月十三日被免）　　鷲尾隆聚
辭令　元年六月二十四日

大總督府參謀被　仰付候事　　四條少將隆謌
辭令　元年六月（日閏）

東海道總督參謀被免大總督府參謀可爲補助旨御沙汰候事　　木梨精一郎
辭令　元年七月十三日





參謀試補被　仰付奥州出張可致旨御沙汰候事　　高橋熊太郎
大總督府辭令　元年八月日閏

參謀補助被　仰付候事　　小代清八永重
辭令　元年三月二十五日

御親征中軍監被　仰出候事　　烏丸侍從光德
辭令　元年三月二十五日

御親征中軍監兼勤被　仰付候事　　後藤象二郎元燁
但願問兼外國事務局判事是迄之通可相心得事
辭令　元年三月二十八日

御親征中軍監兼勤被　仰付候事（元年四月二十八日被免）　　參與　木村得太郎貞通
辭令　元年閏四月五日

大總督ニ屬シ諸道軍監被　仰付候事　　牧野群馬（茂敬元小笠原唯八）
辭令　元年五月二日

軍監補助被　仰付候事　　土方久元大一郎
辭令　元年五月六日

軍監被　仰付下總野二州爲監察被差遣候事　　島　團右衛門
軍監被　仰付駿州沼津爲監察被差遣候事　　和田藤之助
中村範五郎
三雲爲一郎（六月十七日罷ム）

軍監被　仰付豆相二州爲監察被差遣候條申合盡力可有之候事　　江藤新平
辭令　元年五月十二日

軍監ヲ以テ江戸府判事兼帶被　仰付候事　　小笠原唯八

軍務官辭令　元年五月十四日　　片岡利和
東叡山賊徒討伐中軍監被　仰付候事　　小代清八永重
大監察使辭令　元年五月十四日
軍監被　仰付候事　　十時攝津
辭令　元年五月二十三日　　木呂子善兵衛
御雇ヲ以テ爲軍監東下被　仰付候事　　大音厚龍龍太郎
辭令　元年五月二十五日
徵士軍監補被　仰付候事　　岩村通俊
辭令　元年七月日闕
軍監被仰　付上野國爲監察被差遣候事　　姉川榮藏
軍務官辭令　元年八月九日
軍監被　仰付候事　　聖護院宮嘉言親王
辭令　元年八月日闕

海軍總督
海軍先鋒

其方事先般監察使軍監被申付置候處監察使被爲止候ニ付自今大總督府可爲軍監御沙汰候事　九月被免
辭令　元年二月九日
就　御親征可爲海軍總督被　仰下候事
追テ日限被　仰出候事
（別紙）
一隨從士分不可過五六輩或七八輩事
但下部可準之事
一軍事之儀總テ參謀委任之儀ニ付家來之輩不可預聞之事
但至雜事總テ示談可有之事



東海道先鋒總督

一荷物之儀精々無用之品ヲ除候ハ勿論總テ輕便可爲肝要事
辭令　元年二月十一日　　庭田大納言
海軍參謀被　仰出候事　　肥前侍從
辭令　元年二月十一日
御親征行幸ニ付海軍參謀二人其藩人選ニテ早々名前可差出候事
肥前侍從上申元年二月十二日
御親征行幸ニ付海軍參謀二人相選早々名前可差出旨御書付ヲ以被　仰渡奉畏候依之左之若共近々國許ヨリ參著仕候ニ付著次第早々差出候樣可仕候此段御請旁申上候
伊藤外記
增田左馬助
以上
○海軍總督被免ノ達書無シ元年閏四月六日大坂ヨリ歸京同月七日御旗御船標家來袖印等返上ス蓋是日ヲ以テ總督ヲ罷ム
辭令　元年二月晦日　　大原重實
海軍先鋒被　仰出候事　　大原重實
辭令　元年三月八日
兵庫表ヘ出張軍艦相揃次第同所ヨリ進發可有之候樣御沙汰候事　三月二十三日横濱ニ至ル
辭令　元年閏四月十九日　　大原重實
海軍先鋒總督被　仰出候事　　大原重實
辭令　元年五月十九日
海軍先鋒總督被免江戸鎭臺補被　仰出候事　五月二十四日被免　　大原重實
辭令　元年正月五日
東海道鎭撫總督被　仰出候事　　橋本實梁

辭令　元年正月五日　柳原前光

東海道鎭撫副總督被　仰付候事　木梨精一郎

辭令　元年正月六日

東海道鎭撫總督參謀被　仰付候事　橋本實梁

辭令　元年二月六日

今度御親征被　仰出候ニ付東海道鎭撫使ノ處改メ可爲先鋒總督兼鎭撫使ノ旨被仰出候事　五月十九日被免　柳原前光

辭令　元年二月六日

今度御親征被　仰出候ニ付東海道鎭撫使之處改メ可爲先鋒副總督兼鎭撫使之旨被仰出候事

（參考）明治史要ニ據ル　元年三月十九日東海道先鋒副總督柳原前光往テ甲府ヲ鎭ス四月四日先鋒總督橋本實梁ト共ニ江戸城ニ入ル閏四月四日大總督府前光ヲ遣シテ房總ヲ鎭撫ス七日佐倉城ニ入リ旁近諸藩ノ老臣ヲ召シテ其向背ヲ問ヒ監軍渡邊藩相良長發ヲシテ兵ヲ率ヰテ木更津ノ賊ヲ討セシム賊兵敗走ス二十二日江戸ニ凱旋ス五月朔日前光再甲府ニ赴ク

辭令　元年二月十四日　海江田信義

東海道先鋒總督參謀被　仰付候事　五月日闕被免

東海道先鋒總督辭令　元年閏四月四日　渡邊清

東征軍監被仰付上總國八幡村邊ヘ出張被　仰付候事

東海道副總督辭令　元年閏四月五日　伏谷又左衛門惇

今般參謀助役申付候事

東海道副總督辭令　元年五月朔日　伏谷又左衛門惇

甲斐國爲鎭撫發向ニ付隨從申付候事





東海道副總督辭令　元年五月二十五日　伏谷又左衛門惇

函嶺ニ於テ賊徒猖獗ノ報知有之ニ付兵隊ヲ引率出張申付候事

辭令　元年五月六日　得能通顯亞斯登

甲州軍監被　仰付候事

辭令　同日　得能通顯

甲州鎭撫使參謀兼勤被　仰付候事　十二月二十八日徵士參謀被免

辭令　元年五月二十二日　明治史要五月十九日ニ係ク　柳原前光

東海道先鋒副總督被免海陸軍大總督府參謀被仰付候事　元年十月二十九日被免

但鎭撫使如故

辭令　元年十月二十八日

鎭撫使被免候事

但今般甲斐府御取建ニ相成候ニ付知府事到著萬端引渡相濟候上歸京可有之旨御沙汰候事

辭令　元年正月九日　柳原前光

東山道鎭撫使總督被仰出候事　岩倉具定

東山道鎭撫使副總督被仰出候事　岩倉具經

○二月六日改テ東山道先鋒總督兼鎭撫使ト爲ス東海北陸二道ニ同シ本文闕

辭令　元年正月（日闕）　宇田淵栗園

東山道總督參謀被　仰付候事　元年五月日闕被免

辭令　元年二月十四日　板垣退助正形

東山道總督府參謀被　仰付候事

辭令　元年二月（日闕）

東山道先鋒總督參謀被　仰付候事　伊地知正治
辭令　元年正月(日闕)
東山道先鋒總督府書記被　仰付候事　岩村高俊
辭令　元年二月(日闕)
東山道先鋒總督府監察兼應接掛被　仰付候事　岩村高俊
辭令　元年四月(日闕)
東山道先鋒總督府軍監被　仰付候事　岩村高俊
但信州表出張被　仰付候事
軍防事務局辭令　元年三月四日
東山道總督府內參謀被　仰付候事　河田景與左久馬
東山道總督府辭令　元年四月二十一日
軍監被　仰付候事　香川敬三
辭令　元年正月九日口達
北陸道鎭撫總督被　仰出候事　高倉永祐
辭令　元年正月九日
北陸道鎭撫副總督被　仰出候事　四條隆平
參與ヨリ金澤藩ヘ達　元年正月二十一日
右今度北陸道爲鎭撫總督下向被　仰出候爲心得申達候事
辭令　元年正月(日闕)　總督　高倉三位　副使　四條大夫
北陸道鎭撫使參謀被　仰付候事　小林柔吉隆麟

北陸道先鋒總督

辭令　元年二月六日　高倉永祐
今般御親征被仰出候ニ付北陸道鎭撫使ノ處改テ可爲先鋒總督兼鎭撫使ノ旨被　仰出候事
但是迄隨從諸藩ノ兵隊同樣先鋒被仰付候間此段可被相達候事
辭令　元年二月六日　四條隆平
今般御親征被仰出候ニ付北陸道鎭撫使ノ處改テ可爲先鋒副總督兼鎭撫使ノ旨被　仰出候事
但是迄隨從諸藩兵隊同樣先鋒被　仰付候事
辭令　元年二月(日闕)　津田山三郎信弘
北陸道海軍參謀被　仰付候事　高倉永祐
辭令　元年四月十九日
北陸道鎭撫總督兼會津征討被　仰出候事　高倉永祐
御沙汰　同日

北陸道鎭撫總督兼會津征討總督

北陸道鎭撫總督兼會津征討總督被　仰出附テハ諸事四條大夫中談商量可有之御沙汰候事
辭令　元年四月十九日
新潟裁判所總督兼北陸道鎭撫副總督被　仰出候事　四條隆平　元年七月二十七日被免
御沙汰　同日
新潟裁判所總督兼北陸道鎭撫副總督被　仰出附テハ諸事高倉三位中談商量可有之御沙汰候事　四條隆平
辭令　元年四月(日闕)
越後口總督參謀被　仰付候事　山縣狂介有朋

辭令 元年四月日閏(日逸)　黑田了介清隆

北越征討ニ付參謀申付候事　前山清一郎長定

大總督府辭令 元年閏四月(日闕)

庄内追討授兵可爲參謀之旨大總督宮被　仰出候事　津田山三郎信弘

辭令 元年閏四月(日闕)

北陸道總督參謀被仰付高倉三位四條侍從品川ヨリ外國艦ニテ北越ニ發向ニ付隨從被　仰付候事　津田山三郎

辭令 元年五月八日

越後高田ヘ着ノ上ハ是迄ノ通北陸道總督參謀相勤候樣被仰付候事 同月依願被免

辭令 元年五月(日闕)

越後口總督

北陸道先鋒總督被免奥羽征討越後口總督被仰付諸軍可有指揮旨御沙汰候事 六月二十七日被免　高倉永祐

奥羽鎭撫總督

辭令 元年二月九日

就御親征可爲奥羽鎭撫總督被　仰下候事　澤三位爲量

但來ル十五日可爲發遣候事

御親征ニ付可爲奥羽鎭撫總督副被　仰出候事　醍醐少將忠敬

但來十五日可爲發遣候事

辭令 元年二月二十六日

奥羽鎭撫使總督被　仰出候事　九條左大臣道孝

奥羽鎭撫使副總督被　仰出候事　澤三位爲量

奥羽鎭撫使參謀被　仰出候事　醍醐少將忠敬



達 元年二月二十七日

奥羽鎭撫總督　左大臣(道孝)

同　副督　澤三位(爲量)

同　參謀　醍醐少將(忠敬)

右被仰出來月一日進發被　仰出候

仙臺藩ヘ達 元年二月(日闕)

來月朔日奥羽鎭撫使發向相成候條兼而相達置候通總督ヘ致附屬候樣　御沙汰候事

但大阪ヨリ乘船相成候事

仙臺藩ヘ達 元年二月二十九日

來三月朔日奥羽鎭撫使京都發途之趣相達置候處同二日發途ニ相成候間其旨可相心得　御沙汰候事

辭令 元年二月十九日　大山格之助綱良

奥羽鎭撫總督九條左大臣副將澤三位醍醐少將下向ニ付參謀被　仰付候事　世良修藏

辭令 元年二月十九日

任奥羽鎭撫使參謀 元年閏四月十九日死　黑田了介清隆

辭令 元年二月日闕(日逸)

奥羽征討ニ付九條左大臣參謀被　仰付候事 三月日闕被免　九條道孝

辭令 元年七月十五日

當春出陣後賊徒猖獗殊ニ仙臺其他諸藩反覆候ニ付テハ賊軍ノ中ヘ孤立シ千辛萬苦益大義ヲ重シ勉勵候條其忠情篤志神妙ニ被思食候此後時月遷延及迂寒候テハ艱苦不容易儀ニ付今度肥因及諸兵隊迅速被差向候間諸軍ヲ鼓舞シ同心戮力直ニ賊之巢窟庄内ヲ屠リ奥羽之官軍ト相應シ速ニ平定之功ヲ奏シ可奉安

宸襟御沙汰候事
辭令　元年七月二十日　澤宣種

奥羽鎮撫使應援出兵ニ付同行被　仰付候事
奥羽鎮撫總督府辭令　元年十月(日闕)　澤宣種

南部開城點檢使被　仰付候事
奥羽鎮撫總督府辭令　元年七月(日闕)　和田五郎正秀

參謀副役申付　十一月差免
奥羽鎮撫總督府辭令　元年八月(日闕)　桂太郎

參謀添役被　仰付候事
右ノ通申付候條臨機ノ指揮ハ勿論戰策等專委任致候間尚申談シ精々盡力可致候事
奥羽鎮撫總督辭令　元年八月(日闕)　福島九成禮助

羽州庄内追討ノ際本庄在陣中參謀添役被　仰付臨機ノ指揮及ヒ戰策專任可致事
辭令　元年九月(日闕)　九條道孝

東征第二軍總督

今般函館表ヘ兵隊御差向ニ相成候ニ付澤三位醍醐少將兩人ノ中一人爲總督出張可爲致幷ニ參謀軍監等撰任令引連候樣可取計旨　御沙汰候事
但久我大納言ヘモ同樣御達ニ相成候間申合可取計事
辭令　元年閏四月五日　西園寺公望　長岡護美

第二軍總督被　仰出候事
第二軍副總督被　仰出候事
辭令　元年閏四月五日　西園寺中納言





德川慶喜及伏罪候處會津其外殘黨ノ者益逞野心所々亂行人民安堵ノ思ヲ不爲之趣達叡聽被惱　宸襟候依テ第二軍總督被　仰付候條抽丹誠速ニ殘賊掃擊可泰安　宸襟被　仰出候事
但總督副總督篤ト遂軍議時機ニ仍リ東海東山二道ニ立別レ進軍可致候事
同文　但シ總督ヲ副總督ニ作リ候條ノ下ハ數引連早々出發ノ八字アリ
辭令　元年閏四月五日　西園寺中納言　長岡護美　川南東左衛門　小笠原美濃介

征討第二軍總督參謀被　仰付候事
辭令　元年　四月二十三日　西園寺公望

北國鎮撫使

北國鎮撫使被　仰付候間早々發向可致樣御沙汰候事(六月十三日越後口參謀ニ轉ス)
辭令　元年六月十三日　軍務官知事　仁和寺兵部卿嘉彰親王

會津征討越後口總督

當官ヲ以テ會津征討被　仰付可爲越後口總督事　元年六月二十二日進發賜錦旗御劍十一月四日凱旋錦旗返上
但至急出馬可致旨御沙汰候事　西園寺中納言

北陸道鎮撫使被免此度仁和寺宮爲會津征伐越後口ヘ出馬ニ付其參謀被　仰付候事　三等陸軍將　壬生左衛門權佐

此度仁和寺宮爲會津征討越後口ヘ出馬ニ付當官ヲ以テ其參謀被　仰付候事
但至急發途可致旨御沙汰候事

會津征討ニ付御雇ヲ以テ仁和寺宮副參謀被　仰付候事
但至急發途可致事　楠田十左衛門

會津征討ニ付御雇ヲ以テ越後口軍監被　仰付候事
但至急發途可致事
右同文　土倉修理助
但至急ノ儀ニ付國許ヨリ直ニ發途可致事　荒尾駿河
當官ヲ以仁和寺宮ニ附屬越後口ヘ至急出張被　仰付候事　松平源太郎
仁和寺宮ニ附屬越後口ヘ至急出張被　仰付候事　松尾但馬
軍務官辭令　元年六月十三日　山科能登守
越後表賊焔再熾ニ付當官ヲ以早々出張被　仰付候事　軍務官判事　吉井幸輔
陸軍局辭令　元年六月十六日
今般總督仁和寺兵部卿宮隨從越後口出張被　仰付候事　新井一業陸之助
總督宮辭令　元年七月二十三日　新井一業
高鍋藩戰隊監督先鋒指揮申付候事
總督宮辭令　元年十月十五日　新井一業
依願軍監被免候事
辭令　元年六月二十日　西園寺公望
越後口大參謀被　仰出候事
辭令　元年六月(日闕)　前原彦太郎一誠
參謀被　仰付候事
辭令　元年七月四日　前原彦太郎
同藩山縣狂介儀北越官軍參謀依願被　免其方ヘ右代リ被　仰付候事





辭令　元年十月(日闕)　前原彦太郎
北越本營在勤可致旨御沙汰候事
辭令　元年六月二十日　下間治部卿
森川左織
今般仁和寺宮越後ヘ御出陣ニ付御用有之隨從被　仰付候間精々勉勵可致候事
辭令　元年六月二十二日　三宮耕庵
芳野昇太郎
片岡源馬
宮川助五郎
仁和寺宮北越出張ニ付小監察被　仰付候事
大總督府辭令　元年七月二十一日　芳野昇太郎親義
軍監可相勤旨御沙汰候事　片岡利和
軍務官辭令　元年七月(日闕)　山田市之丞顯義
軍監被　仰付候事　元年十二月日闕被免　岩村高俊
辭令　元年七月(日闕)
海陸軍參謀被　仰付候事(陸字元書加筆ニ係ル無之是歟)
但上陸可爲同樣事
辭令　元年七月(日闕)
越後總督府軍監被　仰付候事
但軍艦乘組新發田表出張被　仰付候事
辭令　元年八月十日

當官ヲ以テ越後口總督陣營ヘ出張可致旨被　仰付候事　元年八月十日　（徵士軍務官判事）中根善次郎貞和

當官ヲ以北越出張被　仰付候事　（軍務官判事）櫻井愼平直發

辭令　元年五月二十日　岩倉具定　岩倉具經

東山道總督被免奥羽征討白河口總督被　仰出候事

東山道副總督被免奥羽征討白河口副總督被　仰出候事

辭令　元年六月四日　牧野茂敬（元小笠原唯八）

奥州白川口爲軍監出張可致候事　八月二十三日戰死

辭令　元年六月六日　岩倉大夫具定

奥羽追討白河口總督願之通被免候事

但當分可爲大監察使三條左大將之附屬候事　岩倉八千丸具經

奥羽追討白川口副總督願之通被免候事

辭令　元年六月七日　鷲尾隆聚

奥羽追討總督被　仰出候事

辭令　元年六月七日　渡邊清

奥羽追討總督參謀被　仰付奥羽進擊被　仰付候事　元年七月二十日凱旋

辭令　元年六月（日闕）　木梨精一郎

奥羽追討總督爲參謀出張被　仰付候事

辭令　元年六月十日　鷲尾隆聚

奥羽追討總督被免候事　是日大總督府參謀被仰出　元年六月十日

辭令　鷲尾隆聚

參謀ヲ以奥羽追討白河口　出張可有之事

辭令　元年六月十一日　板垣退助正形

東山道總督府參謀被　仰付置候處被免大總督府參謀補助被　仰付白河口出張各兵隊駈引可致旨御沙汰候事

辭令　元年六月十四日　板垣退助

鷲尾侍從奥羽追討白河口出張被　仰付候間同人指揮ニ從ヒ當役ヲ以テ可相勤旨御沙汰候事

辭令　元年六月十日　正親町中將公董

奥羽追討爲總督出張被　仰出候事

○復古記云案スルニ公董故アリテ未タ發セス七月三日ニ至リ遂ニ罷メラルト

辭令　元年七月五日　正親町中將

奥羽追討爲總督平潟出張被免候事

辭令　元年七月四日　寺島秀之助直方秋介

奥州追討參謀被　仰付候事

辭令　元年七月十三日　鷲尾隆聚

奥羽追討白川口總督被　仰出候事

辭令　元年七月二十七日　多久與平茂族

白河口出張ノ肥前兵隊致引卒鷲尾侍從參謀被　仰付候事

辭令　元年八月十七日　鷲尾隆聚

奥羽追討白川口總督依病被免候事

辭令　元年八月九日　正親町中將

奥羽追討白川口爲總督出張被　仰付候事

辭令　元年八月(日闕)

當官ヲ以テ仙臺追討兵可爲總軍監旨御沙汰候事　木梨精一郎

辭令　元年九月(日闕)

正親町中將奥州出張中可爲參謀補助旨御沙汰候事　姉川榮藏

辭令　元年九月二十六日

參謀試補被申付奥州二本松ヘ出張可致旨御沙汰候事　增田虎之助

辭令　元年七月五日

仙臺追討爲總督出張可有之事　四條少將

○復古記ニ云隆謌諸道記概略ニ云大總督府參謀勘務之儘七月二十日仙臺爲追討江城發途ニ付從軍如左
薩州藩八數　長州藩八數　吉川藩八數　備前藩八數　筑前藩八數　柳川藩八數
久留米藩八數　郡山藩八數　藝州藩八數　佐土原藩八數　大村藩八數
鎭臺日誌抄錄元年七月二十日
四條少將發城海路奥州平潟口ヘ出張徵兵七番隊隨從ノコト

辭令　元年八月十三日

奥羽追討平潟口總督被　仰付候事　四條少將

但仙臺總督　被免候事

辭令　元年七月二十三日

東北遊擊軍將被　仰付候事　久我大納言

但出張中議定同樣之心得ニテ萬事處置可致事

去六月以來賊焰再熾益肆狂暴梗王師候ニ付至急發途北海航行九條左大臣始夫々等ヘ商議賊徒勦絶速ニ可奏成功候樣御沙汰候事　副島二郎

去六月以來賊焰再熾益肆狂悖梗王師候ニ付其方當官ヲ以テ北行被仰付東北遊擊軍將久我大納言ヲ輔翼





可致旨御沙汰候事

當官ヲ以テ東北遊擊軍將附屬被　仰付候事　吉田遠江　船越洋之助　池田德太郎 種德

當官ヲ以テ東北遊擊軍將副參謀被　仰付候事　近藤數馬

辭令　元年七月二十九日

遊擊軍將附屬被　仰付候事　船越洋之助　池田德太郎

辭令　元年八月五日

當官ヲ以テ東北遊擊軍將副參謀被仰付置候處今度改參謀被　仰付候事

辭令　元年八月十日

越後口總督府ヘ御使トシテ早々出張被　仰付候事　軍務官權判事　船越　衛

(參考)
遊擊軍將府日誌元年八月朔日
東北遊擊軍將久我大納言隨從
參謀　權判事　船越洋之助
副參謀　權判事　池田德太郎
大監察　權判事　吉田遠江
會計方役記兼　同　德岡兼祐
同　三宅寅之助
同　副島左源太
同　有田三之丞
軍監吏　藤村錄平
同　根占才之進
筆生　吉田俊男
日記方　近藤數馬
器械方　田邊嘉三郎

同　島津忠之進
同　目時隆之進
同　目時貞次郎
同　北田貞次
帆前船長　小倉豐
諸事掛　井上大藏
同　御旗守衛　神辰太郎
同　御旗持　山本誠之助
隨從兵隊　田島敬三
廣島藩兵隊六十人　井上干城
佐土藩兵隊同　小林政之進
小倉藩兵隊同　山本友右衛門
軍艦船名ロット　七世精司
但墨利堅ヨリ雇入　高橋・柳徹
鳳凰船四洋製笛船名横笛　山科卿士十八
但土州ヨリ雇入

藤原口軍監

辭令　元年八月十九日

軍監兼鎮撫方被仰付精兵三百人引卒藤原口ヘ守衛可有之旨御沙汰候事　鍋島鷹之助

辭令　元年八月二十六日

軍監鎮撫方被仰付精兵三百人引卒藤原口守衛可有之旨御沙汰候事　鍋島監物

辭令　元年八月二十一日

薩州宇都宮兩藩ノ兵隊藤原口出張ニ付軍監被仰付候事　桐野利秋新作牛次郎

一小隊
一小隊
一小隊
一艘
一艘

病氣ニ付被免



各所鎮撫總督

辭令　元年八月二十一日

薩州宇都宮兩藩ノ兵隊藤原口出張ニ付可爲軍監旨御沙汰候事　中村半次郎

辭令　元年正月四日

山陰道鎮撫總督被　仰付候事　西園寺公望

辭令　元年正月五日

山陰道鎮撫總督參謀被　仰付候事　黑田清綱嘉納

二月七日歸京復命

辭令　元年四月十九日

但州府中裁判所總督被　仰出候事　西園寺公望

但山陰道裁判所兼帶ノ事

口達　元年正月十三日

中國四國追討總督被　仰出候事　四條隆謌

辭令　同日

中國四國追討使副督被　仰付候事　五條爲榮

正月二十八日凱旋

辭令　元年正月十五日

今般四條少將中國四國征討總督トシテ發向ニ付隨行被　仰付候事　大山格之助綱良

辭令　元年正月二十五日

九州鎮撫總督兼外國事務總督被　仰出候事　澤宣嘉

辭令　元年二月二日

長崎裁判所總督被　仰出候事　澤宣嘉

辭令　元年正月二十八日

徵士ヲ以テ外國事務掛九州鎮撫總督附屬被　仰出候事　井上聞多

辭令　元年正月二十九日

九州鎭撫總督參謀被　仰付候事
辭令　元年二月晦日　井上馨

徵士長崎裁判所判事兼九州鎭撫使參謀被　仰付候事
辭令　元年閏四月三日　町田久成三郎

徵士長崎裁判所權判事兼九州鎭撫使參謀助役被　仰付候事
辭令　元年二月朔日　楠本正隆平之允小一郎

大和國鎭撫總督更ニ被　仰付候事　元年五月四日被免
但爲內國事務掛　久我大納言(通久)

○元年正月二十一日大和國鎭臺被　仰付是ニ至リ更ニ此命アリ
辭令　二年三月晦日

當官ヲ以鎭撫使久我大納言ヘ隨從出張被　仰付候事
辭令　元年五月十三日　四條少將隆謌

甲府表鎭撫使被　仰出候事
辭令　元年五月十五日　四條少將隆謌

甲府表鎭撫使被免駿府表鎭撫使被　仰出候事　元年六月二十四日罷
辭令　元年五月二十三日　穗波三位

大久保加賀守問罪使爲總督出張被　仰付候事
辭令　元年五月二十三日　河田景與

小田原藩ヘ問罪之師被差向候ニ付出張被　仰付候事　六月八日凱旋
辭令　元年六月二日

是迄ノ職務被免三河國兼遠江國鎭撫使被　仰出候事　是ヨリ先三河國裁判所總督タリ○六月十二日鎭撫使被免
權判事　櫻井愼平直養　平松時厚





函館追討

辭令　元年八月三十日
當官ヲ以テ攝泉防禦總督被　仰付候間兵隊引卒明曉出張可有之事　坊城侍從　太田黑亥和太　佐田素一郎

當官ヲ以テ攝泉防禦參謀被　仰付候事
辭令　元年九月十五日　坊城俊章

攝泉防禦總督ヲ以テ出張被　仰付置候處兵隊引卒早々上京可有之御沙汰候事
辭令　元年九月(日闕)　久我通久

今般函館表ヘ兵隊御差向ニ相成候ニ付澤三位醍醐少將兩人ノ中一人爲總督出張可爲致幷ニ參謀軍監等撰任令引連候樣可取計旨御沙汰候事
但九條左大臣ヘモ同樣御達ニ相成候間申合可取計事
辭令　元年九月(日闕)

攝泉防禦參謀被免當官ヲ以テ箱館ヘ出張被　仰付候事　徵士軍務官判事試補　太田黑惟信亥和太
辭令　元年十一月十二日

會計官權判事被　仰付候處本職ヲ以テ可爲軍監旨御沙汰候事　林半七友幸
辭令　元年十一月二十七日

本官ヲ以テ青森口總督被　仰付候事　箱館府知事　清水谷公考
辭令　二年六月十二日

箱館表賊徒平定ニ付青森口總督被免箱館府知事是迄ノ通被　仰付候事　清水谷公考

軍務官辭令 元年十一月(日欠)　山田市之丞顕義
青森口陸軍參謀被　仰付候事　山田市之丞顕義
箱館總督府辭令 二年四月(日欠)　中島佐衛四郎
其方事海軍參謀可爲兼勤旨申付候事 二年六月被免　石井貞之進忠亮
辭令 元年十一月九日
徵士船將被　仰付候事　石井貞之進
軍務官辭令 元年十二月(日欠)　石井貞之進
當分軍艦陽春丸艦長代申付候事
但岡部鉄馬ヘ副長申付候以下士官ハ取調推擧可有之候也
軍務官辭令 二年二月(日欠)
當節函館殘賊追討トシテ彼地ヘ被　差遣候事　山縣久太郎信運
軍務官辭令 二年三月(日欠)
今般改テ陽春艦船將申付候事
山口藩口達 二年正月(日欠)
御用有之第一丁卯艦乘組東京廻艦申付候事
軍務官辭令 二年二月(日欠)
流賊爲追討函館表出艦申付候事　山縣久太郎
軍務官辭令 二年二月(日欠)
今般函館脫艦追討トシテ軍艦被差向候條其方儀本官ヲ以テ海軍參謀補助申付候間來月朔日當港發碇可致事　軍務官判事試補　石井富之助國吉
軍務官辭令 二年二月(日欠)





御雇ヲ以甲鐵艦乘込第二等格士官申付候事　山縣少太郎
軍務官辭令 二年二月(日欠)　中牟田倉之助武臣
當分軍艦朝陽丸艦長代申付候事
但福島彌太六ヘ副長申付候以下ノ士官ハ取調推擧可有之候也
辭令 二年五月二日　中牟田倉之助
朝陽艦船將被　仰付候事 二年八月船將被免　黑田了介清隆
辭令 二年二月(日欠)
今般箱館追討ニ付清水谷中將參謀申付候事　三等陸軍將　久我通久
御沙汰書 二年三月三十日
箱館表追討ニ付テハ賊徒內地ヘ立歸リ可及亂暴難計且陸ノ前後今以殘賊潛伏ノ聞モ有之候ニ付當官ヲ以テ鎭撫總督トシテ彼地ヘ出張被　仰付候間速ニ鎭靜方行屆候樣盡力可有之候旨御沙汰候事
辭令 二年四月朔日　森清藏政知
副參謀被　仰付候事
軍務官辭令 二年四月(日欠)　軍務官權判事　曾我準藏祐準
海軍參謀ヲ以テ青森ヘ出張被　仰付候事
青森總督辭令 二年四月(日欠)　堀眞五郎
當分ノ間參謀申付候事
辭令 二年四月十九日　寺田良輔貞風
青森口總督府監軍申付候事 五月二十一日依願被免

明治史要抄錄 元年二月二十八日

大總督府水野忠敬出羽守○沼津ヲ以テ甲府城代ト爲ス

○甲府城代ハ舊幕府ノ職名ヲ用ルモノニ似タリ同書元年正月十五日德川慶喜甲府城代大久保忠禮加賀守○ヲ罷メ箱根關ヲ嚴守セシム二月二十九日慶喜榊原政敬○式部大輔ヲ以テ甲府城代ト爲ストアリ

同上　元年五月二十一日

眞田幸民ヲ以テ甲府城代ト爲ス故アリ任ニ赴カス

同上　元年五月二十八日

大總督府水野忠敬ノ甲府城代ヲ免シ其林忠崇ヲ逸スルノ罪ヲ責ム

水野出羽守ヘ達元年五月

其方儀兼而東山道先鋒總督ヨリ甲府城被預置候ニ付テハ嚴重守衛可致之處去月二十日頃元德川龜之助家來遊擊隊等二百人餘兵器ヲ携ヘ相州小田原邊ヨリ追々甲府ヘ入込市中徘徊イタシ候處一切取締不致而已ナラス却而其方家來共志ヲ通シ候樣ニ相聞ヘ方今關東邊兇徒蜂起不容易形勢ニ付而者深ク被爲惱宸襟候折柄前件朝命ヲ背キ反賊ニ與シ候形跡全ク於無相違者甚以不謂事ニ候此段御取糺被仰付候條重役之者一人早急可致上京旨御沙汰候事

明治史要抄錄　元年六月二十九日

甲府城代眞田幸民ヲ罷ム

鍋島直紀ヘ達　元年七月二十三日

甲府城代被　仰出候事

但早々發向可致候事

鍋島直紀ヘ達　元年九月三日

甲府城代被　免候事

肥前少將內高木權太夫稟報元年八月二十四日

少將末家鍋島甲斐守儀此節甲府御城代被　仰付之旨御書取ヲ以被相達候由同人ヨリ申達於少將モ難有仕合奉存候然處兼テ御達申上置候通同姓欽八郎備中守ニモ同樣他家ニ不相並全內證分之者共ニ付從來家中並ニ出兵等申付置候總テハ當春以來關東及奧羽等ヘ差出置候兵員既ニ五千有餘ニ相成其上長崎表之儀當番ニ付是又多人數差出置彼是國力相任兼候就テハ最早甲府御城代差出候人樣何分不任所存殆當惑之參懸ニ御坐候依之差付難奉願御坐候得共右御城代御差繰ヲ以御免被成下度奉願候樣申付候此段申上候以上

鍋島甲斐守

鍋島甲斐守





東北諸藩賞罰取調掛ヲ置ク

軍功賞典取調掛ヲ置ク

辭令　元年十一月十三日

東北諸藩賞罰取調兼勤被　仰付候事

大原少將

田中五位

香川敬三

軍務官ヘ達　二年二月七日

今般賞典被行候ニ付御用有之候間諸道參謀ノ輩早々東京ヘ可罷出旨被仰出候ニ付右參謀名前一々取調書ヲ以至急行政官ヘ可申出候事

辭令　二年二月十二日

河田五位

軍功賞典取調御用掛被　仰付候事

○明治史要ニ云軍務官判事河田景與ニ軍功賞典取調掛ヲ命シ大山綱良黑田清隆山縣有朋等諸道參謀ヲ東京ニ召シ其殿最ヲ檢覈セシム

辭令　二年四月九日

渡邊清

軍務官ヘ出仕賞典取調御用掛被　仰付候事

辭令　二年五月二十五日

渡邊清

賞典取調中准五等官候事

辭令　二年四月十四日

當職ヲ以賞典取調掛兼勤被　仰付候事

辭令　二年九月（日欠）

箱館戰功賞典取調被　仰付候事

辭令　同日

函館賞典取調御用被　仰付候事

辭令　二年三月二十日

民政取調御用掛ヲ設ク

本官ヲ以民政取調御用掛被　仰付候事

本官ヲ以民政取調御用掛申付候事

諸道總督府三條大納言ヘ達　元年閏四月十日

今度德川慶喜降伏謝罪奉仰　天裁候ニ付以至仁之叡慮寬典之御處置被　仰出候間速ニ東下億兆人心安堵候樣取計可致總テ御委任候且可爲關東監察使之旨　御沙汰候事

關東監察使ヲ設ク

五月二十四日三條實美ノ監察使ヲ罷メ關八州鎭將ヲ命シ更ニ大原少將外一名ニ關八州監察使ヲ命ス

板垣四位
黑田清隆
曾我祐準
東久世中將
後藤象次郎
大隈四位
吉川榮左衛門
久保寺力太郎
外六人





江藤新平小笠原唯八新田三郎松尾伯耆中川對馬ヘ達　元年閏四月十日

三條大納言爲關東監察使下向被　仰出候間附屬被　仰付候事（松尾中川ヘハ十一日ニ達ス）

大阪府判事長谷川景隆ヘ達　元年五月八日

今般紀州和歌山表賊徒潛伏ノ段相聞ヘ候ニ付監察使被　仰付候條早々彼表出張屹度詰問可致旨被　仰付候事

軍務官判事櫻井愼平ヘ達　元年五月九日

同文

和歌山監察使ヲ設ク

土肥謙藏ヘ達　元年五月十三日

隱岐國民情不穩旨相聞ヘ候ニ付江戸府判事被免當官ヲ以テ同國監察使被　仰付候速ニ發向可有之事（當官ハ蓋參與）

同人ヘ達　元年五月二十日

隱岐監察使ニテ下向ノ儀被　仰付置候處即今其國內兵端相開紛擾ノ趣相聞全不容易儀ニ候間只今發足何方ヨリニテモ飛船ヲ差立著島ノ上速ニ取糺可申旨更ニ被　仰付候事

出雲少將ヘ達　元年四月十三日

兼テ舊幕ヨリ預居候隱岐國之儀當分其藩ヘ取締向被　仰付候事

但近年國中之人心不穩趣モ相聞候ニ付テハ一際嚴重取締可致候萬一土人共役場ヘ對シ不法之所業於有之ハ始末取糺舊幕中預之振合ニ拘ラス刑法萬端相當之處置可致事

因幡中將屆　元年五月十四日

隱岐國沸騰之儀ニ付此度雲州ヨリ取締之手段相盡候ニ付兵端ヲ開キ可申旨弊藩ヘ內達仕候處干戈ヲ動候儀ハ實以重大之事件且隣國之儀傍觀難仕右事件ニ付兼テ岩倉殿ヘ言上仕候趣モ有之候ニ付此段御屆申上候以上

松平出雲守ヘ達　元年五月十五日

隱岐國取締ノ儀當分其藩ヘ被　仰付置候處其以前西國寺中納言山陰道鎭撫出張中同國公文所役方之者上京申付有之候ニ付追々右上京之役方申立候趣モ有之取調可被　仰付之處頃日其藩人數隱岐ヘ渡海致

隱岐國監察使ヲ設ク

ゾ島人取締手段無之由ニテ兵力相用候趣其藩使者ヲ以因州藩ヘモ屆致候由即今同藩ヨリ隣境兵端相開不容易儀ヲ以注進候段以之外之儀ニ候王政御一新之御初政飽迄皇化ヲ被爲布候冒度々御布告之御趣意如何相心得候儀ニ有之哉干戈ヲ以テ民ヲ制候義有之間敷冒御沙汰候依テハ差向上京之公文方御取調可有之ニ付是又相心得可申旨被　仰出候事

出雲少將家來ヨリ辨事ヘ屆　元年五月二十日

隱州島後土民共沸騰仕取押方始末之儀ニ付御達之趣奉愚入早速國元ヘ申遣置候處閏四月中旬ヨリ追々應接仕種々說諭致シ候得共開入不申終ニ彼ヨリ發砲候ニ付無據是ヨリモ少々致砲發徒黨ノ者共乍散亂平定致シ候由同所ヘ渡海仕居候者不取敢早驅ニテ上京仕番取ヲ以別紙一冊之通ニ御座候此段不取敢御屆仕候以上（略ス）

鳥取藩屆　元年五月二十八日

雲州御預所隱岐國民先達テヨリ不穩趣ニ相聞候處御汰沙ノ趣モ被爲在候冒ニテ近日爲鎭撫雲州家來渡海以後彼是不容易趣雲州家ヨリ申越候付直樣國方家來之者爲見屆差出申候此段不取敢御屆申上候尤國方家來ノ者共儘隱州ヘ可致滯留雲州家ヘ申聞精々爲致鎭撫居申候此段申上候樣申付越シ候已上

○復古記土肥實匡手記略ニ云戊辰五月中霖雨出水道路不通不得止發程遲延同月二十五日發程若州小濱ヨリ賊船同月晦日隱島ニ到着取紛候處島民ヲ殺傷シ人家ヲ毀壞シ家財ヲ掠奪シ松江藩士隱島出張ノ者ノ粗暴言語道斷ニ有之候當春山陰道鎭撫使之命ニハ隱島一圓松江藩ノ管轄ヲ離レ候趣島民ヘ御達有之同年夏　朝廷ヨリハ隱島取締嚴重ニ可致旨松江藩ヘ御達有之當時兵馬倥偬ノ際前後ノ命令二途ニ出候ニ付雲隱士民ノ間嫌疑ヲ生シ終ニ騷擾ニ立至リ候其節松江藩ヨリ　朝廷ヘ御屆ニハ島民ヨリ發砲ニ及ヒ候儀ハ曾テ無之候若島當日ノ景況ハ士民雙方共鎭靜ニ有之候乍然彼地ニ於テ鞫獄ノ次第ニハ至リ兼候ニ付爾時同行ノ刑法官判事試補椋木彌輔ヲ島地ニ止メ陸私儀ハ六月二十日發島同二十五日一先歸京右始末其筋ヘ申立且右ニ付藩士幷島民出京刑法官ニ於テ鞫獄ニ相成候歟又ハ刑法官員松江ヘ出張鞫獄ニ相成候歟兩條如何之趣申立候處追々御評議之末藩士幷島民出京之方ニ御決定ニ相成自秋至冬藩士島民追々出京鞫獄之處其翌春正月上旬横井平四郎殿之事件差起リ頗大獄ニ付他之聽訟斷獄ハ姑ク閣キ專右事件取調中同月下旬私義甲斐府判事被　仰付候ニ付隱岐之事件未至決獄二月中赴任仕結局御處分等如何相成候歟承知不仕候

大原少將西四辻公業ヘ達　元年五月二十四日

**關八州監察使被　仰出候事**

西四辻公業ヘ達　同日

依願監察使兼勤被免候事

**關八州監察使ヲ設ク**

大原少將ヘ達　元年七月二十二日

是迄之職務被免權辨事被　仰付候事

大原中納言ヘ達　元年五月二十二日

當官ヲ以爲巡察笠松縣ヘ下向被　仰出候事

同上　元年五月二十五日

今般笠松下向被　仰付候付テハ早々發途水害之場所村民之患苦等巡察可致旨被　仰出候事

但凡五七日滯在歸京可致被　仰出候事

渡邊昇ヘ達　元年十二月二十四日

**笠松縣巡察ヲ設ク**

五島表ヘ監察使被　仰付候事

但至急可令發向事

宮脇小源太ヘ達　元年十二月二十四日

五島表ヘ監察副使被　仰付候事

但至急可令發向事

（參考）

肥前國五島ハ舊幕臣五島銃之丞ノ所領ニシテ本家福江藩主五島飛彈守盛德ノ分割付與セシ所ナリ元年七月二日願ニ依リ其領地高三千石ヲ本家ニ返付セシメ更ニ廩米ヲ以テ之ヲ支給スルノ令アリ然ルニ領所ノ村吏小民等之ヲ奉セス民心爲メニ沸騰セリ是ニ於テ監察使ヲ差遣シ之ヲ鎭撫セラレシナリ後チ二年七月十四日銃之丞ヲ謹愼ニ處シ福江藩主盛德ヲ差扣ニ處セラレ事局ヲ結ヘリ

○渡邊昇ノ履歷書ヲ案スルニ元年十二月二十六日五島表鎭撫使被命トアリ監察使ノ名稱ヲ改メラレシモノ歟

**五島表監察使ヲ設ク**

正親町中將ヘ達　二年五月二十一日

十津川巡察使被　仰付候事

**十津川巡察使ヲ設ク**

片岡源馬へ達　二年五月二十一日

十津川巡察使附屬申付候事

早川五位へ達　二年五月二十一日

本官ヲ以十津川巡察使附屬被　仰付候事

（參考）

十津川郷士中へ達二年三月六日

一十津川郷六十箇村土地ノ儀ハ以後奈良府支配被仰付候間府藩縣一致ノ　御趣意ヲ奉戴シ心得違無之樣可致事

一郷士頭立候舊家ノ者十人中士席行政官支配被　仰付候間郷中人民取締可致事

但十人ノ者名前書可差出事

一兵隊規則相立年々交替在京可致事

但兵隊ノ儀ハ是迄通リ軍務官可爲管轄尤在番中扶持方ノ儀ハ五千石ノ内ヲ以テ賄可致事

一献上物等凡テ可爲古例ノ通候事

十津川郷士へ達二年三月六日

其方共往古以來於朝廷御由緒有之勤王之志不淺殊ニ近年之形勢ニ付テハ爲家國奔命盡力候段神妙之事ニ候依之今般格別之思食ヲ以別紙之通下賜候事

十津川郷士中

一現米五千石但藏米

右下賜候事

但是迄御手當トシテ被下候五百石ハ以來不被下候事

奈良府へ達二年五月二十七日

十津川郷是迄其府支配ニ被　仰付置候今度軍務官支配ニ被　仰付候間此旨相達候事

十津川郷へ達二年五月二十七日

是迄奈良府支配之處今後軍務官支配ニ被　仰付候間此旨相達候事

軍務官へ達二年五月二十七日

十津川郷是迄奈良府支配之處今度其官支配ニ被　仰付候間此旨相達候事

兵部省辭令二年十一月十三日

十津川郷略鎮定候ヘトモ人心未タ方向ヲ知ラス依之速ニ入郷精々教育可有之條申達候事

同上二年十一月（日閏）　陸軍少將　鷲尾隆聚　陸軍少將　鷲尾隆聚

今般十津川入郷申付候ニ付テハ尋常普通ノ諸務小事ハ總テ出張所ニ於テ裁決シ大事件ニ至リ候テハ本省ヘ伺ノ上可取計候事

兵部省ヨリ十津川郷士ニ諭告二年十一月十五日

一十津川郷ノ儀ハ御由緒有之ヲ以格別之御扱モ被　仰付置候儀ニ付孰レモ禮義廉恥ヲ辨別シ協和一致一層土風正シク厚相心得可罷在筈之處御復古内外御多端之御時モ不顧近來混雜之筋不少殆確執之勢ニ立到不容易御手煩ヲ相掛不相濟事ニ候向後屹度相改郷中淳信一和致シ士道相守御奉公筋厚相心懸可申事

一此度其地ヘ當省出張所ヲ設郷中大小之事務總テ所置致候ニ付テハ指揮命令聊無違背堅相守可申ハ勿論萬一御政體之得失存付モ有之候ハヽ無忌憚出張所ヘ可申出候若存意雜相貫徹モ有之節者一應出張所ヘ其主趣申立屆之上本省ヘ可申出猥ニ内緣ニ托シ越訴筒間敷儀於有之ハ可爲曲事者也

兵部省ヘ達三年二月二十七日

今般大和國ニ五條縣被建候ニ付其省十津川出張所被廢候間此旨相達候事

山口藩立撫使ヲ設ク

德大寺大納言ヘ達　三年二月十二日

爲宣撫使山口藩ヘ下向被　仰付候事

吉井彈正少弼ヘ達　三年二月十二日

德大寺大納言爲宣撫使山口藩ヘ被差向候ニ付出張被　仰付候事

巖谷大史ヘ達　三年二月十二日

爲宣撫使德大寺大納言山口藩ヘ下向ニ付隨從被　仰付候事

土方中辨ヘ達　三年二月十三日

德大寺大納言爲宣撫使山口藩ヘ被差向候ニ付附添被　仰付候事

井上權少史ヘ達　三年二月十三日

宣撫使隨從申付候事

毛利山口藩知事ヘ達　三年二月十七日

今般爲宣撫使德大寺大納言被差向候間此旨相達候事

山口藩知事伺三年二月七日

去冬兵制改革一條ヨリ隊卒沸騰鎮撫相加候ヘトモ願我意申募候ニ付此上ハ干戈ヲ以テ處置不仕候テハ

平定ノ目的難相立候ニ以奉恐入候ヘトモ臨機ノ取計仕候テモ不苦候哉此段奉伺候以上

山口藩知事ヘ達三年二月七日

伺出之趣不容易事件ニ付不得已勢ニ至リ候ハヽ臨機ノ處置可致旨　御沙汰候事

東京府京都府大坂府兵庫縣神奈川縣倉敷縣濱田縣堺縣日田縣長崎縣四國九州中國筋五畿内諸藩ヘ

達三年二月七日

山口藩隊卒沸騰ニ及ヒ處置方ノ儀伺出候ニ付不得已節ハ臨機ノ取計可致旨被　仰出候就テハ萬一右ノ徒脫走ニ可及モ難測條兼テ無油斷取締可致候此段相達候事

但脫走ノ者見當リ次第召捕可屆出事

兵部省ヘ達三年二月七日

山口藩徴兵一大隊依願被差下候間此段可相達事

兵部省ヘ達三年二月七日

山口藩兵隊歸藩ニ付運用船一艘御貸渡相成候間早々取計可申事

宣撫使日記三年二月(日闕)

山口藩脫隊卒沸騰ニ付宣撫使德大寺大納言ヲ始メ土方中辨吉井彈正少弼毅谷大史林從七位井上權少史等幷ニ附屬隨從ノ輩二月十九日乘艦品川沖ヲ發同二十二日兵庫港ヘ到着ノ處同藩ヨリ佐々木源藏ヲ以テ既ニ鎮定ノ趣ヲ東京ヘ報知ノ爲來ルニ會ス即チ本營ヘ罷出其事狀委詳言上ス

二十六日兵庫港ヲ發シ二十八日三田尻港ヘ著

二十九日山口ヘ著本營ニ於テ知藩事ヘ相達左之通

山口藩知事ヘ達三年二月(日闕)

共藩脫隊卒騷恣暴動ノ擧動有之ニ付爲宣撫下向候處既ニ臨機不得止干戈ノ處置ニ及速ニ鎮定候趣歸京ノ上可及奏聞候尤巨魁ノ者ハ相當ノ處置可致候猶追々悔悟歸正ノ輩ハ撫馭ノ道ヲ盡シ一藩協和國民安堵候樣可致事

山口藩知事請書三年二月(日闕)

私藩脫隊卒騷恣暴戾ノ擧動有之候ニ付爲宣撫使御下向候處既ニ臨機不得止干戈ノ處置ニ及ヒ速ニ鎮定候趣御歸京ノ上可被及　御奏聞尤巨魁ノ者共ハ相當ノ處置可致猶追々悔悟歸正ノ輩ハ撫馭ノ道ヲ盡シ一藩協和國民安堵候樣可仕旨奉畏候以上

三月三日

宣撫使一行ノ者本日山口ヲ發シ三田尻一泊四日同港ヲ發九日横濱ヘ著同日歸京

山口藩日記三年三月二日

先般御屆申上候藩内兵隊中奸猾ノ徒兵力ヲ恃益亂暴相募候ニ付不得止過ル九日十日及討伐候處脅從無知ノ徒ハ不及申巨魁ノ者モ前非ヲ悔ミ伏罪平定仕候ニ付夫々解兵申付候追テ精細取調可申上候得共先御屆申上候間此段宜御執　奏所仰御坐候以上

山口藩日記三年二月

脫隊罪狀條書





一軍律ヲ破リ脫走ニ及ヒ候事

一猥ニ所々ヘ砲臺ヲ築候事

一海陸ノ往來ヲ塞キ候事

一知事父子ノ直諭ヲ奉承セサル事

一支藩知事ノ申諭ヲモ奉承セサル事

一百姓ヲ煽動セシメ候事

右ノ數箇條罪惡有之候ヘトモ寛大ノ處置ヲ以前罪ヲ不問ト迄申聞候トイヘトモ猶又左之條々

一知事ヨリ呼出シノ干城隊ヲ銃器ヲ以恣ニ相支候事

一銃器ヲ以朝廷ノ藩屏ヲ圍ミ候事

附米穀其外日用ノ品ヲ絶チ候事

附館門前ニテ篝火ヲ焚昼夜共大參事其外諸役人ノ出入ヲ支ヘ候事

一小監察ヲ陣所ヘ連歸候事

一官庫ノ米穀器械ヲ盜ミ出シ農町ノ私財ヲ掠奪スル事

一諸部署ノ器械ヲ押取セシメ候事

一再ヒ道路ヲ塞キ候事

一豐浦知事ノ出立ヲ途中ニオイテ相支ヘ支藩ノ家中往來ヲ絶チ候事

一農町ノ者ヲ威シ隊中ヘ引入候事

暴動巨魁人名幷處置方屆

吉津庄藏(外三十四人姓略ス)

以上三十五人

右之者共脫隊ノ酋長ト爲リ兵卒ヲ煽惑シ藩政ヲ擾亂シ不容易令擧動其罪難赦ニ付死罪ニ處シ其餘頭立候者ハ罪ノ輕重ニ依リ囚獄遠流申付兵卒末々悔悟歸正仕候者ハ格別寛大ノ典ヲ以撫卹仕候心得御座候以上

富永有隣(外四人姓略ス)其外

右ノ者共脫隊ノ酋長ト爲リ兵卒ヲ鼓動シ共末他藩ヘ令脫走候ニ付召捕候上ハ相當ノ處置仕候心得御座候以上

山口藩屆元年五月

此度脫隊卒ノ者共及暴動候次第畢竟長官共ニ被欺候事ニ付歸順ノ上ハ一統其罪ヲ免シ無祿ノ者ハ最前賞典差遣候年限ニ應シ格別撫恤ヲ加ヘ扶持米一人半分立遣シ人柄ニ依リ此往キ兵隊其外召仕候儀モ可有之候ヘトモ一先舊藩ヘ歸入申付候都合ニ御座候事

歸順卒之内

農商之者

千三百八餘

右ノ内六百八餘舊功有之一人半口遣シ候

日田縣巡察使ヲ設ク

四條陸軍少將ヘ達　三年十二月十八日

近來浮浪ノ徒豐後路邊各所ニ潛伏致シ時々出没暴行ニ及候趣ニ付爲巡察使日田縣ヘ被差向候依之ニ中隊隨從被　仰付候事

但河野彈正少忠兼テ爲取締差遣置候ニ付打合可申候事

兵部省大坂出張所ヘ達　三年十二月十八日

今般四條陸軍少將爲巡察使日田縣ヘ被差向候ニ付其省ニ中隊隨從被　仰付候事

高屋兵部權大丞外一名ヘ達　三年十二月十八日

今般四條陸軍少將爲巡察使日田縣ヘ被差向候ニ付同行被　仰付候事

日田縣ヘ達　三年十二月十八日

今般四條陸軍少將爲巡察使其縣被差向候條此旨相達候事

兵部省ヘ達　四年正月十七日

巡察使四條隆謌未タ日田縣引取無之候ハヽ其儘爲鎮撫滯在候樣可相達事

巡察使四條隆謌ヘ達　四年二月十四日

先達テ九州表出張之處復命之趣被聞食尚又日田縣出張被　仰付候事

大藏大丞井田讓熊本藩少參事大田黑惟信ヘ達　四年二月十四日

今般陸軍少將四條隆謌巡察使トシテ日田縣ヘ被差遣候ニ付爲參謀出張被　仰付候事（井田讓被免之辭令缺）

山口藩大屬山根忠主ヘ達　四年二月十四日

陸軍少將四條隆謌巡察使トシテ日田縣ヘ出張ニ付隨從トシテ被差遣候事

高知藩士屋可也ヘ達　四年二月十五日

今般陸軍少將四將隆謌巡察使トシテ日田縣ヘ出張ニ付爲參謀被差遣候事

熊本藩鹿兒島藩山口藩ヘ達　四年二月十四日



信州巡察使ヲ設ク

近來浮浪ノ徒及山口藩脫隊ノ輩九州路各所ニ潛伏出没暴行ニ及候ニ付先達テ以來厳御沙汰ノ旨モ有之候處今以捜索ヲ得ス依之尚又巡察使四條隆謌日田縣ヘ被差遣候就テハ其藩兵一大隊同所ヘ可差出候尤諸事巡察使指揮ニ隨ヒ進退可致候事

但本文之儀ニ付テハ其管内取締向ハ勿論其他手配厳重行屆候樣可致候事

兵部省ヘ達　四年二月十九日

熊本藩兵一大隊今般日田縣ヘ出張被　仰付候ニ付テハ兼テ其省ヨリ相達置候東京御守衛兵一大隊右縣ヘ差出候樣更ニ可相達候事

陸軍少將四條隆謌ヘ達　四年五月二十九日

巡察使被免候事

熊本藩少參事大田黑惟信高知藩士屋可成ヘ達　四年五月二十九日

巡察使參謀被免候事

山口藩大屬山根忠主ヘ達　四年五月二十九日

巡察使隨從被差免候事

但取扱之御用ハ鎮臺ヘ引渡可申事

兵部權少丞澤宣種ヘ達　四年正月四日

巡察使トシテ信州ヘ出張被　仰付候事

但出張ノ上吉井民部大丞林民部權大丞諸事打合セ可申事

長崎縣知事井田讓ヘ達　四年正月四日

從四位澤宣種巡察使トシテ信州ヘ出張ニ付爲參謀被差遣候事

但出張ノ上吉井民部大丞ヘ諸事可打合事

民部大丞吉井德春　民部權大丞林友幸ヘ達　四年正月四日

今般澤從四位爲巡察使信州ヘ被差遣候ニ付諸事可打合候事

巡察使澤宣種ヘ達　四年正月六日

信州地方不穩趣自然不逞ノ徒其機ニ乘シ煽動暴行候哉モ難計ニ付寛猛機宜ノ處置ハ勿論藩兵進退御委任候事

本官ヲ以テ巡察使被仰候ニ付テハ出張中從三位相當可相心得事

信越諸藩ヘ達　四年正月六日

今般兵部權少丞澤宣種巡察使從三位相當ヲ以テ信州地方ヘ出張被仰付候條兼テ御達之通可相心得事

民部省ヨリ民部權大丞林友幸ヘ達三年十二月七日

松代藩ヘ出張被　仰付候事

明治史要抄錄三年十二月十七日

松代藩小民擾亂ス（藩製紙幣兌換買米ノ事ニ係ル）是日民部權大丞林友幸ヲ差遣シ之ヲ處分セシム

庶務正北代正臣ヘ達三年十二月二十三日

信州路土民動搖ニ付爲取締被差遣候條臨機ノ取計可致猶林權大丞可申合事

民部權大丞林友幸ヘ達三年十二月二十三日

信州路土民動搖ニ付爲取締北代庶務正被差遣猶其方申合可取計旨御沙汰相成候條爲心得相達候事

明治史要抄錄三年十二月二十三日

松代藩ノ擾亂スルヤ中野縣下ノ民群起シテ縣廳ヲ焚ク大參事高石和道松代ニ通ル須阪椎谷二藩ノ管民高井郡穂波郡ヲ遣シ便宜處分セシム翌日兵部權少丞澤宣種ノ子名春等ト俱ニ之ニ赴カシメ尋テ宣種ヲ巡察使ト爲ス　又信越尾濃諸藩ニ令シ豫メ兵部權少丞澤宣種ヘ達三年十二月二十四日

中野縣出張被　仰付候事

名古屋藩松代藩大垣藩高田藩松本藩上田藩高島藩高遠藩岩村藩飯山藩小諸藩飯田藩龍岡藩苗木藩清崎藩椎谷藩須坂藩岩村田藩高冨藩ヘ達三年十二月二十四日

今般中野縣管下小民沸騰縣廳ニ迫リ加之各所不穩之趣自然其機ニ乘シ不逞ノ徒動搖暴行候哉モ難計ニ付爲鎮撫兵部省官員兵隊引率出張臨機ノ處置可致旨被仰付候間時宜ニヨリ出張先キニ於テ其藩々出兵申達候儀モ可有之候條此旨相心得嚴重手配リ候樣御沙汰候事

兵部省ヘ達三年十二月二十五日

中野縣騷擾ノ儀ニ付近傍ノ諸藩ヘ別紙之通被仰付候條此旨相達候事

兵部省ヘ達四年三月二十七日





監察使布政使等ハ臨時選任ノ官トス

布政使ヲ置キ都テ罷ム

中野縣下動搖鎮定ニ及候ニ付近傍諸藩出張ノ兵隊引揚候樣可相達候事

布告節錄　四年八月十日（全文ハ官號ニ載ス）

官制例言第四項

一監察使布政使等ノ如キハ常ニ之ヲ置カス臨時選任ノ官トス

辭令　四年八月二十三日

免本官

金澤縣大參事　林　厚德

五等出仕被　仰付候事

從五位　林　厚德

布政使被　仰付候事

但金澤縣ヘ早急出張可致候事

同　人

免本官

廣島縣大參事　河野敏鎌

六等出仕被　仰付候事

從六位　河野敏鎌

布政使被　仰付候事

但廣島縣ヘ早急出張可致事

同　人

辭令　四年八月二十七日

内閣職員ヲ以テ監察按撫布政等ニ充ツ

臨時巡察使ヲ派出シテ治績功過ヲ檢察ス

地方巡察條規

## 布政使被　免候事

（參考）

左院上申四年九月四日

右布政使被免大藏省五等出仕ニテ各縣ヘ出張被仰付候旨致承知候右者如何樣之御趣意有之事ニ候哉難測候得共全體御改革中ニテ專ラ　朝旨ヲ體シ海内同一之軌轍ニ立至候樣夫々相運ヒ候職掌ニ候得者正院ヨリ直ニ御發遣候方至當ト奉存候然ルニ大藏省中ヨリ御發遣ニ相成候テハ租税勸業等一分課限職掌之姿ニ相成甚御不體裁之儀ト奉存候加之慶藩後地方官御發遣之御手初ニ有之候得者深ク御注意被爲在度奉存候兎角向後ハ右等之類御議事之節ハ一應當院之見込御尋有之候上御施行有之度此段申上候也

從五位　林　厚德
正六位　河野敏鎌

林　從五位
河野　從六位

太政官職制節錄　六年五月二日（全文ハ太政官ノ部ニ載ス）

内閣ノ職員ハ各地方監察按撫布政等ノ故ヲ以テ特命派出シ各部ヲ巡回スルコトアルヘシ

達節錄　十五年七月二十七日第四十四號官省院廳府縣（全文ハ官吏雜規ニ載ス）

行政官服務紀律

第十二條　臨時巡察使ヲ派出シテ官吏ノ治績及功過ヲ檢察シ狀ヲ具シテ直チニ太政大臣ニ上申セシムヘシ

達　十六年四月七日第十八號官省院廳府縣

地方巡察條規左ノ通相定候條爲心得此旨　相達候事

地方巡察條規

第一條　行政官吏服務紀律第十二條ニ從ヒ臨時巡察使ヲ地方ニ派遣スヘシ





特命全權大使ヲ設ケ歐米各國ニ遣ス

四年十一月十日東京ヲ發シ六年九月十三日歸朝ス

第二條　巡察使ハ勅任官中ヨリ臨時特選ヲ以テ之ニ充ツ

第三條　全國ヲ五部ニ分チ各部巡察使ヲ派遣ス

第四條　巡察使ハ法律規則ノ實施行政事務ノ擧否利弊ヲ驗視シ官吏服務紀律ニ照シテ功過ヲ檢シ幷ニ治蹟ヲ察スルヲ以テ務トス

第五條　巡察使ハ各官署ニ臨ミ主任官ニ就テ事務ノ狀況ヲ訪問シ其簿册文書等ヲ檢スルコトアルヘシ直ニ其行政處分ニ干預スルコトヲ得ス

第六條　巡察使鎮臺鎮守府又ハ營所アル地方ニ到ルトキハ事宜ニヨリ行政事務ト軍務トノ關係ニ付事情如何ヲ訪問スルコトアルヘシ

第七條　巡察使ハ其巡察檢視スル所ノ事情ヲ具ヘ太政大臣ニ上申スルヲ以テ其職ヲ終ル者トス

辭令　四年十月八日

特命全權大使トシテ歐米各國ヘ被差遣候事

右大臣　岩倉具視

參議　木戸孝允　六年七月二十三日歸朝

大藏卿　大久保利通　六年五月二十六日歸朝

工部大輔　伊藤博文

外務少輔　山口尙芳

辭令

（四年十月八日）

（同日）

（同日）

（同十月十八日）

今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付一等書記官トシテ隨行被仰付候事

外務少丞　田邊太一
外務大記　鹽田篤信
福地源一郎
文部少教授　何禮之

（四年十月八日）
（同日）
（四年十月二十四日）
今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付二等書記官トシテ隨行被　仰付候事
外務大記　柴田昌吉（五年正月十九日被免）
外務少記　渡邊洪基
小松濟治
林董三郎
長野桂次郎
（四年十一月八日）
（四年十月二十二日）
今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付三等書記官トシテ隨行被　仰付候事
川路簡堂
山内六三郎（十一月八日被免）
（四年十一月四日）
（四年十月二十二日）
今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付三等書記官トシテ隨行被　仰付候事
文部大助敎　池田政懋
外務大錄　安藤忠經
（同日）
（四年十月二十二日）
今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付四等書記官トシテ隨行被　仰付候事
（理事官）戸籍頭　田中光顯
（同日）
（同日）
（同日）
（四年十月二十二日）
特命全權大使會計兼務被　仰付候事
式部助　五辻安仲
外務大記　野村靖
兵庫縣知事　中山信彬
神奈川縣大參事　内海忠勝
租稅權頭　安場保和
權少外史　久米丈市
（四年十一月三日）
（四年十一月五日）
今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被　仰付候事
東京府知事　山田利公正
（五年四月晦日）
特命全權大使隨行歐洲各國ヘ被差遣候事
（五年五月九日）
知府事山田利公正歐洲各國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事

特命全權大使書記官等級

六年九月十三日大使歸朝ニ依リ消滅ス

## 特命全權大使へ達　四年十月二十日

書記官等級左ノ通可心得事

一等書記官　官等四等
二等書記官　同　五等
三等書記官　同　六等





四等書記官　同　七等
五等書記官　同　八等
理事官及隨行官員ハ本官ノ等級タルヘキ事

理事官ヲ設ケ歐米各國ニ遣ス

## 辭令　四年十月二十二日

（四年十月二十二日）
（同日）
（同日）
（同日）
（同日）
（四年十月二十三日）
（右年十一月五日五年正月二十日理事官ヲ被免各國被差遣ノ儀仰付）

### 理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候事

辭令

（四年十月二十二日）
（同日）
（同日）
今般佐々木司法大輔理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被　仰付候事
司法大輔　佐々木高行
侍從長　東久世通禧
陸軍少將　山田顯義
戸籍頭　田中光顯
文部大丞　田中不二麿
造船頭　肥田爲良
少議官　高崎豐麿
（四年十月二十四日）
今般山田陸軍少將理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被　仰付候事
司法少判事　中野健明
司法少判事　平賀義質
司法少判事　岡内重俊
長野文炳
（四年十月二十二日）
今般東久世侍從長歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被　仰付候事
宮内大丞　村田經滿
（四年十月二十二日）
今般田中戸籍頭理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被　仰付候事
兵學大敎授　原田一道
租稅權助　若山儀一
阿部潛
沖守固

（四年十月二十二日）
（同日）
今般田中戸籍頭理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事
（四年十一月十日）
（五年五月十三日）
理事官田中戸籍頭隨行歐米各國ヘ被差遣候事
（四年十月二十二日）
（同日）
今般田中文部大丞理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被仰付候事
（四年十月二十二日）
（同日）
今般田中文部大丞理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事
（四年十一月四日）
今般肥田造船頭爲理事官歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行被仰付候事
（四年十月二十三日）
今般肥田造船頭理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事
（四年十一月五日）
今般高崎少議官理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事

檢査大屬　杉山一成
租稅權大屬　富田命保
吉雄永昌

文部中教授　長與專齋
正七位　中島永元
文部中助教　近藤昌綱
文部中助教　今村和郎
內村良藏

鑛山助　大島高任
鐵道中屬　瓜生震

少議生　安川繁成（五年正月二十日隨行被免各國視察命セラル）

辭令　五年五月二日

## 爲理事官歐米各國ヘ被差遣候事

辭令

司法卿　江藤新平

司法少丞　河野敏鎌
明法助　鶴田皓
權中判事　岸良兼養
司法省七等出仕　沼間守一
司法省七等出仕　名村泰藏
登保助　川路利良

（五年六月十日）
（同日）
（五年七月五日）
（同日）
（五年九月八日）
司法卿江藤新平爲理事官歐洲各國ヘ被差遣候ニ付隨行被仰付候事
（五年六月十四日）
（五年六月十九日）

司法中錄　井上毅
司法八等出仕　益田克徳





理事官ヘ勅旨

特命全權大使派遣ニ付大臣參議各省長官約定書

同文隨行申付候事

## 理事官ヘ勅旨　四年十一月（日闕）

一各國ノ內文明最盛ナル國於テ本省緊要ノ事務目今實地ニ行ル景況ヲ親察シ其方法ヲ研究講習シ內地ニ施行スヘキ目的ヲ立ツヘシ
一研究講習スル事務ノ科目ヲ分チ及其國ヲ定メ便宜行事ノ循序期限等ハ特命全權大使ノ指揮ニ從フヘシ
一隨行ノ官員ニ事務ノ科目ヲ分ツハ特命全權大使ノ指揮ニ由ルト雖モ其分任ノ事務ヲ督シ之ヲ整理スルノ責ニ任スヘシ
一本省要用ノ爲メ外國人ヲ雇ヒ書籍器具等ヲ講スル事アラハ特命全權大使ノ決判ニ從フヘシ
一臨機ノ事ハ凡テ特命全權大使ノ指揮ヲ受ケ處置スヘシ
一當務ノ顚末研究習學ノ功程等時々書錄シテ報告スヘシ
右勅旨件々宜ク遵奉シテ愆ルヿ勿ルヘシ

奉勅

太政大臣　三條實美　花押

明治四年辛未十一月

## 岩倉特命全權大使歐米各國ヘ派遣ニ付大臣參議各省長官約定書　四年十一月（日闕）

約定

今般特命全權大使派出ノ一擧ハ詢ニ不容易大事業ニテ全國ノ隆替　皇運ノ泰否ニ關係スル事ナレハ中朝ノ官員派出ノ使員ト內外照應氣脈貫通一致勉力セサレハ成功難奏萬一議論矛盾シ目的差違ヲ生スル時ハ國事ヲ誤リ國辱ヲ釀スヘキニ由リ爰ニ其要旨ノ條件ヲ列シ其事務ヲ委任擔當スル諸官員連名調印シ一々遵奉シテ之ニ違背スルナキヲ證ス

第一款　御國書幷遣使ノ旨趣ヲ奉シ一致勉力シ議論矛盾目的差違ヲ生スヘカラス

第二款　中外要用ノ事件ハ其時々互ニ報告シ一月兩次ノ書信ハ必ス缺クヘカラス

第三款　中外照應シテ事務ヲ處置スル爲メ特ニ大使事務管理ノ官員ニ命シテ之ニ從事セシメ來歲大使歸國ノ上ハ中朝事務ニ任スル官員ト共ニ理事官等ニ交代シテ外國ニ派出セシムヘシ

第四款　大使使命ヲ遂ケ歸國ノ上ハ各國ニ於テ商議及考案セシ條件ヲ參酌考定シ之ヲ實地ニ施行スヘシ

第五款　各理事官ノ親見習學シテ考案セシ方法ハ酌定ノ上順次之ヲ實地ニ施行シ習學了ラサルモノアレハ代理事官之ヲ引請完備ナラシムヘシ

第六款　內地ノ事務ハ大使歸國ノ上大ニ改正スル目的ナレハ其間可成丈ケ新規ノ改正ヲ要スヘカラス萬一已ヲ得スシテ改正スル事アラハ派出ノ大使ニ照會ヲナスヘシ

第七款　廢藩置縣ノ處置ハ內地政務ノ純一ニ歸セシムヘキ基ナレハ條理ヲ逐テ順次其實効ヲ擧ケ改正ノ地歩ヲナサシムヘシ

第八款　諸官省長官ノ缺員ナルハ別ニ任セス參議之ヲ分任シ其規模目的ヲ變革セス

第九款　諸官省トモ勅奏判ヲ論セス官員ヲ增益スヘカラス若シ已ヲ得スシテ增員ヲ要スル時ハ其情由ヲ具シテ決裁ヲ乞フヘシ

第十款　諸官省トモ現今雇入外國人ノ外更ニ雇入ルヘカラス若シ已ヲ得スシテ雇入ヲ要スル時ハ其情由ヲ具シテ決裁ヲ乞フヘシ

第十一款　右院定日ノ會議ヲ休メ議スヘキ事アルニ方テハ正院ヨリ其旨ヲ下シ每會期日ヲ定ムヘシ

第十二款　款內ノ條件之ヲ遵守シテ違背スヘカラス此條件中若シ增損ヲ要スル時ハ中外照會シテ之ヲ決スヘシ

明治四年辛未十一月

太政大臣　三條實美　印



特命全權大使事務取調局ヲ置ク

十年一月廢ス　五年十月四日內史所管中大使事務課ヲ置キ六年五月內史章程大內史專任科目中大使事務ノ項アリ太政官ノ部ニ載ス

辭令　六年十月七日

特命全權大使事務取調御用掛被　仰付候事

右大臣　岩倉具視　印
參議　西鄕隆盛　印
參議　木戸孝允　印
參議　大隈重信　印
參議　板垣正形　印
議長　後藤元曄　印
神祇大輔　福羽美靜　印
外務卿　副島種臣　印
大藏卿　大久保利通　印
大藏大輔　井上馨　印
兵部大輔　山縣有朋　印
文部卿　大木喬任　印
工部大輔　伊藤博文
司法大輔　佐々木高行　印
司法大輔　宍戸璣　印
宮內卿　德大寺實則　印
開拓次官　黑田清隆　印

外務大輔　山口尙芳

五等出仕　栗本貞二郎

特命全權大使事務取調被　仰付候事

（六年十月十二日）　五等出仕　杉浦弘藏

特命全權大使事務取調中同局へ出仕被　仰付候事

權少外史　久米邦武
外務三等書記官　小松濟治

特命全權大使事務取調御用ノ節々同局へ出仕被　仰付候事

福地源一郎
外務省六等出仕　何禮之

特命全權大使事務取調中同局へ出仕中付候事

外務大錄　安藤忠經

達六年七月十四日

先般理事官大使隨行トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付テハ御委任ノ條件ヲ奉シ發航前上陳候件々實際取調ノ書類早々可差出候也

元司法大輔佐々木高行
侍從長東久世通禧
陸軍少將山田顯義
文部省三等出仕田中不二麿
海軍大丞兼主船頭肥田爲良
式部助五辻安仲
外務省五等出仕中山信彬
外務省七等出仕內海忠勝

舊司法大輔佐々木高行侍從長東久世通禧陸軍少將山田顯義文部省三等出仕田中不二麿海軍大丞兼主船頭肥田爲良式部助五辻安仲外務省五等出仕中山信彬外務省七等出仕內海忠勝右ノ輩辛未十一月中大使隨行及理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣本省緊要ノ事務實地ノ景況ヲ視察シ內地施行ノ目的ヲ以テ其方法ヲ研究講習シ奉務ノ顚末習學ノ功程等書錄報告可致旨御委任相成且此輩ヨリモ解纜前其當務ノ目的件々書面ヲ以テ上陳致候儀ニ候處容冬以來追々歸朝相成候ヘトモ于今一片ノ復命書モ不差出此儘御差遣相成候テハ實功ノ有無及派出中ノ勞逸勤惰モ不相見甚タ不可然事ニ有之候





依テ左ノ通御達相成可然哉此段相伺候也

副議長佐々木高行ヘ達八年三月三十一日

先般司法理事官トシテ歐米巡歷ノ際取調書類ノ中見聞筆乘加里州典等早々可差出候也

陸軍會計監督田中光顯ヘ達

先般理事官トシテ歐米各國ヘ被差遣御委任ノ條件ヲ奉シ發航前上陳候件々實際取調ノ書類早々可差出候也

從四位由利公正ヘ達

先般全權大使隨行トシテ歐米歷行ノ砌本務ノ件々實際取調候書類早々可差出候事

先般二等官西岡逾明ヘ達　高崎正風ヘ達

先般各國視察トシテ歐米歷行ノ際實地研究講習ノ件々及ヒ大使ヨリ相達候スタチスチック取調ノ書類等早々可差出候也

權少外史安川繁成ヘ達

先般各國視察トシテ歐米巡歷ノ際實地研究講習ノ書類早々可差出候也

先般大藏省七等出仕川路寬堂檢査權助杉山一成ヘ達

先般歐米歷行ノ際全權大使ヨリ相達置候荷蘭水利取調書類早々可差出候也

內務省七等出仕池田寬治ヘ達

先般歐米歷行ノ際全權大使ヨリ相達シ置候佛國アドミニストラーション取調ノ書類早々可差出候也

租稅權助長岡義之ヘ達

先般全權大使ヨリ相達置候マルセール、プリンヂシー及ヒ香港稅關規則取調書早々可差出候也

先般鑛山察頭助大島高任ヘ達　鑛山察七等出仕長野桂次郎ヘ達

先般全權大使ヨリ相達置候各國抗桑取調ノ書類早々可差出候也

外務省五等出仕中山信彬ヘ達

先般歐米歷行ノ砌全權大使ヨリ相達置候歸途支那開港場地方規則取調候書類早々可差出候也

先般全權權少頭吉原重俊ヘ達　外務省五等出仕野村靖ヘ達

先般全權大使ヨリ相達置候外務取調ノ書類早々可差出候也

勸業權助岩山敬義ヘ達

先般全權大使ヨリ相達置候耕牧事務取調書類早々可差出候也

追テ本文ノ趣阿部潛由良守應沖守固ヘハ史官ヨリ相達置候也

製作寮六等出仕宇都宮三郎ヘ達

先般全權大使歐米巡歷中相達置候工業ニ關係セル化學等取調書類早々可差出候也

名東縣士族小室信夫ヘ達

先般各國視察トシテ歐米歷行ノ際實地研究講習ノ書類早々可差出候也

士族阿部潛由良守應沖守固ヘ達

先般全權大使ヨリ相達置候耕牧事務取調書類早々可差出候也

各國視察ヲ設ク

追テ本文ノ趣岩山勘業權助ヘハ太政大臣ヨリ被相達候也

東京府士族福地源一郎ヘ達

先般歐米巡歷中全權大使ヨリ相達置候都見格日多外務取調書類早々可差出候也

大使事務局伺八年三月十七日

先般全權大使歐米派遣ノ際各省官員及ヒ左院議官等隨行或ハ理事官各國視察トシテ緊要ノ事務實地ノ景況ヲ親察シ內地旅行ノ目的ヲ以テ研究講習ノタメ被差遣且在外中大使ヨリノ分課以テ取調候樣夫々御達シ有之候處節、朝後書錄上陳ノ輩モ有之候ヘトモ左ノ人名司法理事官ヲ除ノ外ハ于今一片ノ報告書モ不差出此マヽ御差置相成候テハ實効ノ有無及ヒ派出中ノ勞逸勤惰モ不相見甚不可然事ニ有之且今般大使事務局ヲ被置關係書類一切整頓候ニ付テハ左ノ通御達相成速ニ爲差出可然哉此段相伺候也

大史上申十年(月日闕)

先般大使事務局ヲ開キ遊歐米大使ノ事務書類幷ニ隨行各理事官等取調書類ヲ整頓スルコトヲ命セラレ爾來此ニ從事罷在候處此頃整頓略ホ其功ヲ竣ヘ別紙目錄ノ通各二部上呈仕候然ルニ大使書類ハ不幸ニシテ先年太政官ノ回祿ニ遭ヒ悉皆烏有ニ屬シ唯其以後ニ得ル所ト大使ノ手ニ存セルモノトヲ蒐輯シタレハ完備ノ成ヲ闕ケトモ尙ホ其現有ノ書ニ就テ當時大使所務ノ概況ハ略其要領ヲ失フニ至ラス且理事官書類ニ至テハ間々散逸紛亂シ百方搜索ノ手ヲ盡セトモ尙其所在ヲ逸セルモノ一二ナシトセス姑ク之ヲ不得已ニ付シ先ツ各現有ノ書類ヲ以テ局ヲ結ヒ之レヲ上呈スルモノナリ但理事官中ニハ他ノ事故ニヨリ未タ報告書ヲモ指出ニ及ハサル者モ數名アリ是等ハ既ニ督促ヲ經タレハ他日指出スニ隨ヒ逐次整頓ニ付シテ可ナルヘシ抑彙者全權大使ノ歐米各國ニ派發アリシハ實ニ曩世ノ盛舉因テ以テ益々我國ノ光輝ヲ發シ和親貿易ヲシテ益々盛大ノ運ニ進マセンメタルハ固ヨリ言ヲ待タス從テ理事官等ニ至ツテハ各々命ヲ奉シテ分課擔任シ海外各國ノ政風民俗學術工業等ヲ目見耳聞ノ間ニ筆シ齎歸復命以テ採長補短ノ資ニ供シ其我國治ノ進步ヲ裨補シタルコト小少ナラス況シヤ千里外ノ地ニ趣キ各國ノ事情ヲ探訪ス其事ノ甚ハタ困難ニシテ頗ル辛苦ヲ經タルコト是レ小官等ノ竊ニ自カラ信スル所ニシテ即チ其書類皆之ヲ永年ニ保有シ時々ノ參考ト記憶トニ供セシコト是レ或ハ意想ノ外ニ出ルアラン故ニ右等ノ書類皆之ヲ整頓ヲ命セラレタル所ノ旨意モ亦此ニ在ルカ依テ該書ノ內一部ハ太政官ニ藏シ一部ハ外務省ニ下付セラレ候方可然此段乞高裁候也 則紙書目略ス

辭令　五年正月十九日

中議官　西岡逾明
少議官　小室信夫
同　高崎豐甞
中議生　鈴木貫一





大分縣下人民暴動ニ付臨機處分

敦賀縣下人民暴動ニ付臨機處分

## 各國視察被仰付候事

大藏省ヨリ大分縣ヘ達　六年一月十二日

其縣管內頑民暴動ノ趣小倉縣ヨリ屆出候就テハ早々鎭定ニ至リ候樣安撫可致尤猖獗ニモ及候ハヽ隣縣ヘモ牒合臨機即決ノ處分可致事

但シ目今實際ノ景況早々可屆出事

大藏省屆六年一月十二日

別紙ノ通大分縣ヘ相達候間此段爲御心得致上達候也

正院ヨリ陸軍省ヘ達　六年一月十三日

大分縣管內頑民騷擾ノ趣小倉縣ヨリ屆出候就テハ鎭壓ノ儀鎭西鎭臺ヘ可相達候也

司法省ヘ達　六年一月十四日

大分縣下騷擾ニ付其省官員速ニ出張爲致取糺可申事

明治史要抄錄

六年一月十三日大分縣下豐後大分直ノ小民擾亂スト雖モ復ス路邸入速見等ノ事ヲ訴フ大藏省モ亦委員ヲ派シ本縣ニ令シテ臨機處分セシム○四月三十日是ヨリ先大分縣ノ黨民平定ス是日首謀後藤某吉十等三人阿南千代五郎麻生菊治ヲ斬ニ處シ安部某音不四人非ヲ絞ニ處ス其餘准流懲役以下各差アリ 總計二萬七千九百十三人

大藏省ヨリ敦賀縣ヘ達　六年三月十四日

其縣管內頑民暴動ノ次第屆出ノ趣早々鎭定ニ至候樣安撫可致尤猖獗ノ模樣ニヨリ隣縣ヘモ牒合臨機即決ノ處分可致事

但目今實際ノ景況至急可屆出事

大藏省屆六年三月十四日

敦賀縣管內暴動一件過刻上陳仕置候處猶別紙內書一綴同縣權令藤井勉三ヨリ進呈仕候ニ付從前ノ例規ヲ遂ヒ即決處分ノ儀相達候依テ右內書寫相添此段更ニ上申仕候也

北條縣下人民暴動ニ付臨機處分

明治史要抄錄

六年三月十四日敦賀縣下越前大野郡今ノ小民教部說教ノ意ヲ誤解シ群起亂ヲ作ス是日大藏省本縣ニ令シテ速ニ之ヲ鎭定シ臨機處分セシム教部省モ亦共官吏及ヒ教導職ヲ差遣シテ之ヲ說諭ス○四月二十二日敦賀縣ノ亂ルヤ本縣共士族ヲ募リテ假ニ兵隊ト爲シ又援ヲ隣近鎭臺及ヒ分營ニ乞フ既ニシテ鎭定ス乃チ首謀高橋某多左衛門大野郡俗稱大野郡農竹生寺橋專藏專福寺右衛門ヲ斬ニ處シ桑崎某野郡農等二人桶屋治助ヲ絞ニ處スノ即犯人及等刑ノ月日詳ヒ懲役已下金子下及ヒ處刑ノ月日詳ナラス此日具狀上申ス

北條縣ヘ達　六年六月三日

其縣下人民暴動ノ趣岡山縣ヨリ電報有之就テハ速ニ鎭定候樣可取計候尤此度ニ限リ鎭壓中ノ處分ハ臨機即決被差許候事

但魁首幷連累ノ者共捕縛ノ上處斷ノ儀ハ鎭定ニ至リ候ヘハ可伺出事

飾磨岡山鳥取小田四縣ヘ達　六年六月三日

北條縣ヘ別紙ノ通相達候條此旨相心得同縣ヨリ打合等有之候ハ、差支無之樣可取計事

司法省ヘ達　六年六月三日

北條縣其外ヘ別紙ノ通相達候條此旨可相心得事

陸軍省屆　六年六月四日

北條縣下頑民沸騰ニ付大坂鎭臺歩兵第十大隊ノ內二小隊去月二十九日出兵爲致候旨同臺ヨリ屆出候間此段御屆申候也

司法省ヘ達　六年六月二十二日

先般北條縣下頑民騷擾ノ末巨魁及連累等就縛ノ者凡三百餘名當今專糺彈中ニ有之且更ニ追縛ノ者モ有之趣ニ付テハ其省官員同縣ヘ出張被仰付候條早々出發取調可致事

北條縣ヘ達　六年六月二十二日

別紙司法省ヘ相達候條此旨可相心得事

明治史要抄錄





福岡縣下人民暴動ニ付臨機處分

六年六月三日北條縣下四條作勝北條四ノ小民新令ヲ悅ヒス徵兵令ニ血稅ノ字アルヲ以テ流言相煽シ蜂起亂ヲ作ス此日本縣ニ令シテ速ニ鎭定セシメ臨機處分ヲ委ス黨與處刑ハ又飾磨岡山鳥取小田四縣ニ令シテ緩急赴援セシメ○二十二日北條縣ノ亂ルヤ本縣急ヲ大阪鎭臺ニ告ク鎭臺兵二小隊ヲ發シ本縣兵ト相救應シ遂ニ黨民四百餘人ヲ捕獲ス是日司法官吏ヲ遣シ首謀笹保卯太郎美作四西北條郡高橋辨藏川田嘉平治宇治貞藏內山豐藏淺谷島五郎勝北郡農水島實不大谷類治郡川島ヲ斬ニ處シ其餘懲役已下各差アリ即伴犯三十人附和人員及ヒ處刑ノ月日詳ナラス

福岡縣ヘ達　六年六月二十日

其縣管下人民暴動ノ趣小倉縣ヨリ電報有之就テハ速ニ鎭定候樣可取計候尤此度ニ限リ鎭壓中ノ處分ハ臨機即決被差許候事

但魁首幷連累ノ者共捕縛ノ上處斷ノ儀ハ鎭定ニ至リ候後可伺出事

佐賀小倉三潴三縣ヘ達（各通）六年六月二十日

福岡縣ヘ別紙ノ通相達候條此旨相心得同縣ヨリ打合等有之候ハ、差支無之樣可取計事

司法省ヘ達　六年六月二十日

福岡縣其外ヘ別紙ノ通相達候條此旨可相心得事

陸軍省ヘ達　六年六月二十日

福岡縣下人民暴動致候趣電報有之ニ付別紙ノ通同縣ヘ相達候條同縣打合次第出兵鎭壓可致樣急速鎭臺ヘ可相達事

陸軍省ヘ達　六年六月二十四日

福岡縣下頑民暴動差募リ候趣追々電報有之就テハ急速最寄鎭臺ヨリ出兵鎭壓可致此旨更ニ相達候事

大藏大丞林友幸ヘ達　六年六月二十七日

福岡縣出張被　仰付候事

同人ヘ御委任狀　六年六月二十七日

今般福岡縣下蜂起爲鎭靜出張被　仰付候ニ付左ノ件件御委任相成候事

一福岡縣下蜂起ノ儀ニ付テハ西海道鎭臺本分營ヘ打合總テ臨機處分速ニ鎭定可致事

一同縣從來ノ官奏判任共黜陟ノ儀便宜處分可致事

一大藏省六等出仕牟田口通照始同縣ヘ出張ノ官員ハ便宜縣務ニ從事可致事

一立木福岡縣下赴任ノ間ハ同縣令ノ心得ヲ以諸事可取扱事

一同人著縣ノ上ハ諸事打合處分致シ鎭靜ノ上歸京可致事

一同縣士族黑田播磨始暴動ノ際ニ乘シ私ニ縣廳ニ出仕致シ擅ニ縣務ヲ執行候始末糺問ノ上本人ハ勿論其黨與ノ者臨機處分可致事

一此度召連候邏卒ハ同縣ヘ據置候共又ハ都合ニ寄リ隣縣ヘ分賦致候共總テ臨機ノ處分可致事

一暴動ノ者其他連累ノ者タリ共捕縛糺彈罪件明白ノ上ハ死刑ト雖モ臨機處分可致事

一右條條ノ外急務ニ付難經伺件件ハ臨機ノ處分可致事

大藏大丞林友幸ヘ達　六年六月二十八日

福岡縣下暴動ニ付テハ他縣ノ人民雷同致候儀有之候ハヽ、同縣ニ不限兼テ御委任ノ條件ニ準シ臨機處分可致事

陸軍省ヘ達　六年六月二十七日

福岡縣下暴動ニ付テハ最寄鎭臺ヨリ出兵鎭壓可致旨相達シ置候處今般大藏大丞林友幸同縣出張被仰付別紙ノ通御委任相成候條諸事打合臨機ノ處分可致旨更ニ鎭臺ヘ可相達候事

司法省ヘ達　六年六月二十七日

邏卒五十人福岡縣ヘ出張可申付事

但大藏大丞林友幸同縣出張被仰付候條諸事同人ノ指揮ヲ可受旨可相達事

明治史要抄錄

六年六月二十日福岡縣下筑前嘉穗郡等ノ小民旱災ニ乘シ群起擅亂人家ヲ燒毀シ官吏ヲ殺傷ス是日本縣ニ令シテ速ニ之ヲ鎭定セシメ臨機處分及ヒ黨與處刑ハ北條縣ノ例ニ依ル佐賀小倉三潴三縣及ヒ共傍近鎭臺ヲシテ緩急赴援セシム○同月二十四日福岡縣ノ亂民暴行滋甚シ本縣士族ヲ募リテ四出防禦ス亂民遂ニ縣廳ニ入ル是日再ヒ陸軍省ニ令シテ急ニ鎭臺兵ヲ發シ尋テ大藏大丞林友幸ヲシテ邏卒五十人ヲ率ヰテ之ニ赴キ臨機處分セシム○七月五日福岡縣ノ亂鎭定ス是日參事水野千波權參事國尙靜ヲ免シ尋テ亂首井上勝次(筑前嘉穗郡農)石橋小九右衛門(同郡長尾村)三人(糟屋郡)ヲ斬ニ處シ淵上琢璋(遠賀郡)ヲ絞ニ處シ其餘懲役已下各差アリ(總計一千六百四十人)收贖千零一百五十四百零七圓(大藏八代利征士)收贖金一萬五千四百七十一本(同)又權典事時枝明耀大屬堀川俊雄已下六人(中村用六柴田鶴七山崎常士)及一千九百八十家(同)屋四百七十一軒(同)焼毀シ家屋長石(同)小澤(同)田畑(同)鹿兒島(同)紙幣少屬宮尾矯(長野縣士)ノ死事ヲ賞シテ祭祀金ヲ賜ヒ其家屬ヲ賑恤ス

權少判事北村泰一ヘ達　六年八月十八日

今般英國人民ヨリ御國政府ヘ掛ル訴訟ノ件々有之候ニ付テハ右原告ニ對シ答辯ノ爲メ御國政府代人被仰付候事

但權大判事玉乃世履原被ノ事理取糾ノ爲メ出席致候ニ付諸事同人ヘ可打合事

土木頭小野義眞ヘ達　六年九月九日

英國人民ヨリ御國政府ヘ掛ル訴訟ノ件々有之候ニ付右原告ニ對シ答辯ノ爲メ御國政府代人被　仰付候事

但先般代人被　仰付候權少判事北村泰一ヘ諸事可打合事

大藏省ヘ達　六年九月二十五日

英國商民ヨリ御國政府ヘ對セル訴訟一件名代人ノ儀ハ其省所管ト可相心得就テハ省中別局ヲ設ケ可取調旨土木頭小野義眞權少判事北村泰一ヘ指令候條此旨相達候事

權大判事玉乃世履ヘ達　七年三月十七日

英國人民ヨリ我政府ニ對スル訴訟七件裁決ノ儀委任候事

---

陸軍省ヘ達　七年二月四日

佐賀縣下貫屬士族動搖致シ候趣電報有之候條急速最寄鎭臺ヨリ出兵同縣打合セ鎭壓可致此旨相達候事

同上　七年二月七日

英國人民訴件ニ付答辯ノ爲メ御國政府代人ヲ設ク

六年八月十八日大藏省ニ本件ノ取調所ヲ設ケ十月七日答辯局ト稱ス大藏省ノ部ニ載ス

佐賀縣下動搖ニ付最寄鎭臺ヨリ出兵

佐賀縣下貫屬士族動搖致候趣電報有之ニ付急速最寄鎮臺ヨリ出兵同縣打合セ鎮壓可致旨相達置候處萬一近傍諸縣ヘ波及候節ハ同樣相心得臨機ノ處分可致此段相達候事

陸軍省ヘ達　七年二月四日

佐賀縣下貫屬士族動搖候趣ニ付臨機處分ノ節ハ本縣士族ヲ召集鎮定イタシ度段權令岩村高俊申請ノ趣聞屆候條爲心得此旨相達候事

岩村佐賀縣權令伺　七年二月四日

本日當縣ヨリ電報ヲ得候處貫屬士族共寺ニ集リ征韓論ヲ唱ヘ勢日々ニ盛ニ候由其巨細ハ固ヨリ不分明ニ候ヘ共不容易事件ニ付早々赴任鎮定仕度心得ニ御座候然ルニ萬一多人數ニ候ハヽ暴舉ノ程モ難計候間左ノ件々御委任相成度此段奉伺候以上

一赴任ノ上貫屬ノ者共征韓論等ノ儀ニ付集會致候ハヽ自然人心動搖ノ基ト存候間制止可仕事

一先般某寺ニ集會議事致候趣如何ノ筋ニ候哉其始末僞然取糺シ可申事

一急征韓ヲ唱ヘ人心ヲ煽動イタシ候樣ノ儀有之候ハヽ事々難易ヲ論セス其巨魁ヲ捕縛シ糺問可仕事

一貫屬共建言等ノ儀ニ付多人數上京ノ儀申出候ハヽ斷然制止可仕事

一前文處分ノ儀ニ付彼等暴舉不得止ノ節ハ兵力ヲ以テ鎮定可仕事

但臨機處分ノ節ハ本縣貫屬ヲ召集鎮定可仕事

指令　七年二月四日

伺之通

內史本課議案　七年二月四日

佐賀縣士族暴舉云々ニ付同縣權令岩村高俊ヨリ別紙ノ通リ伺出候ニ付テハ御許可可相成候哉

外史議案　七年二月四日

別紙佐賀權令岩村高俊伺ノ趣御許可相成候ニ付陸軍省ヘ御達案

參議兼內務卿大久保利通ヘ達　六年二月九日

御用有之九州表ヘ出張被　仰付候事

大久保內務卿上申　七年二月七日

近日佐賀縣士族輩激論ヲ主張シ疎暴ノ擧動ニ及ヒ候趣追々電報有之甚以不容易事ニ候既ニ本縣令モ直ニ發遣シ陸軍省ヘ御沙汰ノ次第モ有之候ヘ共抑國內安寧保護ノ責任ヲ致負荷候臣利通職掌上ニ於テ實以恐悚不安ノ至ニ候依テハ御多端ノ折柄恐入候ヘトモ臣利通現地ヘ出張被　仰付可成丈ケ速ニ暴焰ヲ未燃ニ鎭定シ奉安宸襟度懇願ノ至ニ候右御許容ノ上ハ著手ノ次第等伺定メ迅速發程可仕候此段宜敷御執奏ノ程承希候以上

辭令　七年二月十日

參議派內務卿大久保利通九州ヘ出張非御委任狀

參議兼內務卿大久保利通隨行九州表出張被　仰付候事

（七年二月十二日）

內務少丞　武井守正
內務省五等出仕　北村正臣
內務省六等出仕　石井邦猷
內務省七等出仕　西村亮吉
內務省六等出仕　河野通信

御用有之九州表出張被　仰付候事

但參議兼內務卿大久保利通隨行ノ心得ヲ以テ同人指令ヲ可受事

權大判事　河野敏鎌
大檢事　岸良兼養

御委任狀　七年二月十日

佐賀縣下凶徒暴動ノ報有之爲鎭靜出張被　仰付候ニ付左ノ件件御委任候事

參議兼內務卿　大久保利通

一凶徒犯罪判然タル上ハ捕縛處刑ノ儀ハ勿論臨機兵力ヲ以テ鎭壓ノ事

但死刑ト雖トモ臨機處分ノ事

一他縣ノ方向ヲ誤リ凶徒ニ應援等可疑擧動有之候ハヽ臨機處分兵隊ヲ分配ノ事

一縣官奏任以上ト雖トモ方向ヲ失シ其職ヲ誤ルモノハ之ヲ免黜シ隨行官員又ハ其他人選ヲ以テ參事等心得申付候事

一縣官中衆ニ超ヘ盡力奏功候モノヘ一時ノ慰勞褒賞等取計ノ事

一臨時縣官ヘ命令ヲ傳ヘ候事

一時機ニ應シ陸軍出張官員ヘ協議シ鎮臺兵ヲ招キ又ハ最寄縣縣ヨリ人數ヲ召募候事

大久保内務卿ヘ達 七年三月一日

今般東伏見二品親王ヘ賊徒征討總督トシテ進發被仰付別紙ノ通御委任相成候ニ付テハ前日出張ノ節御渡シノ委任狀中兵事ニ關スルノ條件ハ自今總督權内ニ屬シ候此旨可相心得事 別紙ハ總督宮ヘノ詔敕ヲ云

東艦雲揚艦九州鎮撫ノ爲メ回艦

海軍省ヘ達 七年二月十三日

東艦雲揚艦九州爲鎮撫廻艦被　仰付候事

但參議兼内務卿大久保利通ノ指揮ヲ可受事

鳳翔艦西海ヘ回艦

海軍省屆 七年二月二十八日

鳳翔艦ノ儀征討トシテ西海ヘ回艦別紙ノ通相達候條此段御屆仕候也

（別紙）

鳳翔艦

征討トシテ西海ヘ回艦　被仰付候事

但征討參軍伊東海軍少將ノ指揮ヲ可受事

同上 七年三月十四日

佐賀縣賊徒征討總督及參軍ヲ置ク并御委任狀

征討總督俸給旅費共陸軍大將ニ準シテ賜フ兵制門賞恤賜與ニ載ス

鳳翔艦ノ儀征討トシテ西海ヘ回艦相達候段先般御屆仕候處御用相濟昨十三日午後第八時品海ヘ歸艦仕候條此段御屆申上候也

達 七年二月二十五日 當外院省使

二品親王　東伏見嘉彰

征討總督被　仰付候事 七年二月二十三日





征討參軍被　仰付候事 同日祐麿ヘハ翌日

陸軍中將　山縣有朋

海軍少將　伊東祐麿

右ノ通被　仰付候條爲心得此旨相達候事

宮内省ヘ達 七年二月二十七日

征討總督宮ヘ近衛隊御附與ノ儀本日午後第四時參朝ノ節於御前被仰出度此段豫テ奏聞ヲ可被遂候也

追テ右刻限ニハ拙者（太政大臣三條實美）陸軍大輔近衛都督士官等參朝ノ筈ニ候條爲心得此旨申入置候也

達 七年二月二十七日 當外院省使

征討總督二品親王　東伏見嘉彰

進發ノ儀ハ追テ御沙汰候事 七年二月二十五日

右ノ通被仰出候條爲心得此旨相達候事

達 同日 當外院省使

征討總督二品親王　東伏見嘉彰

來ル三月一日進發被　仰付候事 七年二月二十七日

右ノ通被仰出候條爲心得此旨相達候事

布告 七年二月二十八日 第二十五號

東伏見二品親王征討總督被仰付三月一日進發候條此旨布告候事

海軍省ヘ達 七年二月二十八日

征討總督二品親王東伏見嘉彰幷同參軍陸軍中將山縣有朋同海軍少將伊東祐麿龍驤艦乘組被仰付候條此旨相達候事

御委任狀 七年三月一日

征討總督二品親王　東伏見嘉彰

朕曩ニ佐賀縣下士民嘯聚ヲ聞キ内務卿大久保利通等ヲ遣シ之ヲ鎮靜セシメント欲ス然ルニ益暴逆ヲ逞フシ擅ニ凶器ヲ弄シ遂ニ王師ニ抗スルニ至ル其罪討セサルヘカラス乃チ卿ヲ以テ征討總督ニ任シ委スルニ陸海軍務一切幷ニ將官以下撰任黜陟等ノ事ヲ以テス汝有朋祐麿ニ參軍ヲ命ス其レ能ク帷幕ノ機謀ニ參シ凡ソ陸軍海軍ニ關スルノ事ハテ卿カ區處ヲ聽ス沿道諸縣ノ士民招募編制モ亦宜ク便宜事ニ從フヘシ且朕カ近衞歩兵二大隊ヲ假シ以テ朕カ黎元ヲ保護スルノ意極メテ切ナルヲ明ニス卿其レ此旨ヲ體シ速ニ捷ヲ闕下ニ奏セヨ

勅　七年三月一日

征討參軍　山縣有朋
征討參軍　伊東祐麿

佐賀縣賊徒征討ニ付二品親王東伏見嘉彰ヲ以テ征討總督ニ任シ委スルニ陸海軍務一切ノ區劃幷ニ將官以下撰任黜陟等ノ事ヲ以テス汝有朋祐麿ニ參軍ヲ命ス其レ能ク帷幕ノ機謀ニ參シ凡ソ陸軍海軍ニ關スルノ事ハ厚ク總督ヲ輔翼シ速ニ成功ヲ奏セヨ

征討總督二品親王東伏見嘉彰ヘ達　七年三月三日

佐賀縣賊徒平定ノ報知有之候ヘ共猶軍事取纏トシテ縣地ヘ出張被仰出候近衞兵二大隊ノ儀ハ參軍山縣有朋ヘ引率セシメ歸京候樣御沙汰候事

征討參軍山縣有朋ヘ達　七年三月三日

佐賀縣賊徒平定ノ趣報知有之候ニ付テハ前日出張被仰出候近衞兵二大隊引率歸京可致事

征討參軍伊東祐麿ヘ達　七年三月三日

征討總督嘉彰親王ヘ別紙ノ通被　仰出候條此旨相心得尚隨行可致候事

陸海軍兩省ヘ達　七年三月三日

別紙ノ通征討總督嘉彰親王幷征討參軍山縣有朋同伊東祐麿ヘ相達候條此旨可相心得事

陸軍省ヘ通達　七年三月三日

征討總督宮幷參軍ヘ御沙汰書相廻シ候早々傳達方可被執計此旨申入候也

陸軍省宛　七年三月九日

嘉彰親王ニ賊徒等犯罪處刑ヲ委ス

征討參軍陸軍中將山縣有朋御用ノ都合ニ寄暫時滯阪御用相濟次第歸京候樣相達候旨征討總督ヨリ申越候ニ付此段御屆申候也

二品親王東伏見嘉彰ヘ達　七年三月二十七日

征討總督被　免候事

陸軍中將山縣有朋海軍少將伊東祐麿ヘ達　七年三月二十七日

征討參軍被　免候事

二品親王東伏見嘉彰ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣賊徒平定ニ付テハ出張兵士幷軍艦等引揚ノ儀便宜指揮可致候此旨相達候事

陸軍省ヘ達　七年三月二十七日

內務卿大久保利通ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣賊徒平定ニ付テハ軍艦引揚ノ儀便宜指揮可致候此旨相達候事

海軍少將伊東祐麿ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣賊徒平定ニ付テハ出張軍艦引揚ノ儀ハ東伏見二品親王大久保內務卿ノ指揮ヲ可受候此旨相達候事

陸軍省ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣賊徒平定ニ付テハ別紙ノ通御沙汰相成候條兵士ヘハ其省ヨリ通達可致此旨相達候事別紙ハ二品親王ヘノ達ヲ云フ

海軍省ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣賊徒平定ニ付テハ別紙ノ通御沙汰相成候條軍艦ヘハ其省ヨリ通達可致候此旨相達候事別紙ハ內務卿ヘノ達ヲ云フ

二品親王東伏見嘉彰ヘ達　七年三月二十七日

佐賀縣下賊徒及平定候ニ付征討總督被免賊徒等犯罪處刑ノ儀更ニ御委任被　仰付候事

內務卿大久保利通ヘ達　七年三月二十七日

二品東伏見嘉彰親王ヘ佐賀縣下賊徒征討總督被仰付置候處既ニ及平定候ニ付征討總督被免賊徒等犯罪處刑ノ儀更ニ御委任被仰付候條親王ノ指揮ヲ受夫々可致處分旨御沙汰候事

明治史要抄錄

七年二月四日佐賀縣士族征韓封建擁夷ヲ名トシ黨ヲ分テ嘯聚シ凡ソ二千五百餘人小野商會ノ金帛ヲ掠奪ス本月一日ニ在是日熊本及ヒ佐賀傍近ノ鎮臺ニ命シ兵ヲ出レテ之ヲ鎮定セシム○九日參議兼內務卿大久保利通ニ命シ往テ之ヲ鎮撫セシメ內務司法二省ノ官吏之ニ屬ス權大判事河野敏鎌大檢事岸良兼養內務少丞武井守正等七人尋テ陸軍少將野津鎮雄ニ命シ兵ヲ率テ熊本ニ赴カシム○十五日夜佐賀ノ賊縣廳ヲ襲フ權令岩村高俊鎮臺兵ニ令シテ防戰ス既ニシテ食竭キ筑後ニ奔ル大屬小出光照中屬中島修平十五等出仕大橋春次之ニ死ス○十七日征討ノ令ヲ各地方ニ下シテ其逃逸ニ備ヘシム○二十三日嘉彰親王ヲ以テ征討總督ト爲シ陸軍中將山縣有朋ヲ參軍ト爲シ佐賀ノ賊ヲ討ス特ニ近衛第二聯隊ヲ假シ及ヒ東京鎮臺兵一中隊ヲシテ之ニ從ハシム尋テ海軍少將伊東祐麿ヲ以テ參軍ト爲シ陸軍少將野津鎮雄ヲ參謀長ト爲ス○三月一日征討總督嘉彰親王横濱ヲ發ス是ヨリ先佐賀ノ賊ヲ朝日山寨水村井ニ佐賀縣ニ擊テ大ニ之ヲ破リ賊隊長鍋島市之允ヲ斬ル賊降附相屬シ巨魁江藤新平以下悉ク奔竄ス是日陸海官軍佐賀城ニ入ル參議大久保利通及ヒ本縣官吏皆至ル○二十七日嘉彰親王ノ征討總督陸軍中將山縣有朋海軍少將伊東祐麿ノ征討參軍ヲ罷ム是ヨリ先島義勇副島義高助勝等十三人ヲ鹿兒島ニ捕獲シ是日江藤新平以下九人ヲ高知縣ニ捕フ○四月十三日佐賀賊徒ノ罪ヲ判シ江藤新平島義勇ヲ佐賀ニ梟シ副島義高等十人ヲ斬ニ處ス懲役以下各差アリ○二十四日嘉彰親王內務卿大久保利通等佐賀ヨリ至ル

臺灣蕃地事務ニ付外務卿ヲ清國ニ派遣ス

外務卿副島種臣ヘ御委任ノ敕　六年三月九日（政體門詔敕ニ見ユ）

朕聞ク臺灣島ノ生蕃數次我人民ヲ屠殺スト若シ棄テ問ハスンハ後患何ソ極ラント今爾種臣ヘ委スルニ全權ヲ以テス爾種臣其往テ之ヲ仲理シ以テ朕カ民ヲ保ンスルノ意ヲ副ヘヨ欽哉

別敕

辛未冬我琉球藩民臺灣島ニ漂到シ其島ノ東部ニアル生蕃人ノタメ五十四人横殺ニ逢シ事件汝種臣ニ命シテ清國政府ニ派遣シ其處置ヲ談判セシム因テ朕カ委任スル要旨ヲ宣示ス

一清國政府ニ於テ臺灣全島ヲ其所屬地トナシ右談判ヲ引受ケ其所置ヲ施スコトヲ委任スルニ於テハ横殺ニ逢シ者ノ爲メ十分ナル伸寃ノ處置ヲ責ムヘシ

但右處置ハ罪人ヲ相當ニ罰シ横死ニ逢シ遺族ノ者ニ若干ノ扶助金ヲ與ヘ且向後取締右ノ如キ暴逆ノ所業ナキコトヲ堅ク保セシムル事

臺灣蕃地事務ニ付清國ニ派遣ス

一清國政府ニ於テ若政權ノ及ハサルヲ以テ之ヲ其所屬地トセスシテ右談判ヲ引受サル時ハ之ヲ朕カ處置ニ任スヘシ

一清國政府ニ於テ若シ臺灣全島ヲ屬地ト爲シ事ヲ左右ニ托シ其談判ヲ引受サル時ハ清國政府政權ヲ失セル次第ヲ明辨且生蕃人無道暴逆ノ罪ヲ論責シ而シテ服セサレハ此上ノ處置朕カ意ニ任スヘシ

一右談判振三條ノ外ニ出ル答アラハ公法ヲ遵守シ公權ヲ失ハサル樣審思注意シ臨機ノ談判ヲナスヘシ

右敕旨ノ件件宜シク欽奉シテ愆ルコト勿ルヘシ

奉敕

辭令　七年四月四日

太政大臣從一位　三條實美　花押

陸軍中將　西鄕從道

臺灣蕃地事務都督被　仰付候事

敕　七年四月五日（政體門詔敕ニ見ユ）

臺灣蕃地事務都督タラシム凡ソ陸海軍務ヨリ賞罰等ノ事ニ至ルマテ委スルニ全權ヲ以テス乃チ委任ノ條款ヲ遵奉シ黽勉從事其レ能ク成功ヲ奏セヨ

一我國人ヲ暴殺セシ罪ヲ問ヒ相當ノ處分ヲ行フヘキ事

一彼モシ其罪ニ服セサレハ臨機兵力ヲ以テ之ヲ討スヘキ事

一爾後我國人ノ彼地方ニ至ルノ時土人ノ暴害ニ罹ラサル樣能ク防制ノ方法ヲ立ツヘキ事

明治七年四月五日

御名　御璽

臺灣蕃地事務都督ヲ置ク

都督ハ一等官參軍ハ三等官相當ノ月給ヲ賜フ兵制門官憲賜與ニ準ス

臺灣蕃地事務都督ヘ敕旨

奉勅

特諭

太政大臣　三條實美

臺灣蕃地事務都督　西鄕從道

明治四年十一月我琉球ノ民漂流シ臺灣ノ蕃地ニ至リ土人ノ爲ニ刼殺セラルヽ者五十四名又六年三月我小田縣下備中淺口郡ノ住民佐藤利八等四名漂到シテ又爲ニ衣類器財ヲ掠奪セラル其土人兇暴ヲ逞ウスルヤ如此而シテ支那政府ノ管轄ニ屬セス化外自肆ニ任ス若シ棄テ問ハスンハ後患何ソ極ラン今膺懲ヲ行フノ意ハ彼野蠻ヲ化シテ我良民ヲ安スルニ在リ宜ク此旨ヲ體シ左ノ條款ヲ遵守シ以テ從事スヘシ

第一款　第一著眼トスヘキハ土人ノ服從セル者ハ專ラ恩惠ヲ以テ之ヲ懷ケ綏スルニアリト雖モ若シ抗敵シ服セサルニ於テハ兵威ヲ以テ之ヲ制壓スヘキ事

第二款　鎭定後ハ漸次ニ土人ヲ誘導開化セシメ竟ニ其土人ト日本政府トノ間ニ有益ノ事業ヲ興起セシムルヲ以テ目的トナスヘシ

但シ此場合ニ於テ支那政府トノ關係及ヒ後來ノ利害等ヲ詳明ニシ上奏シテ命ヲ乞フヘキ事

第三款　彼ノ地ニ手ヲ著クルニ方テハ支那人及ヒ他ノ外國人ノ妬猜ノ念ヲ引起シ我所爲ヲ妨ルコト無カラシムルニ注意スヘキ事

第四款　若シ支那政府ヨリ異議ヲ起スコトアラハ之ニ關係セス我北京在留ノ公使ヨリ應接ニ及フヘキ旨ヲ以テ答フヘキ事

第五款　著手ノ際ニ臨テ便宜支那人及ヒ他ノ外國人ヲ傭役スヘキ事

第六款　一行役員中ニ於テ少シモ不和ヲ生セシムルコトナキニ注意シ每事必ス協同商量セシムヘキ事

第七款　李仙得ヲシテ輔翼タラシメハ其考案ヲ諮ヒ且土人ヲ懷服セシメ又支那地方官或ハ他ノ各國領事ニ對シテ應接等ノ事ヲ掌ラシムヘキ事

第八款　支那管轄地ト犬牙錯雜スルノ處ハ能ク其ノ經界ヲ明ニシ彼ヲシテ我ヨリ侵略スルノ嫌疑ヲ生セシムルコト勿キニ注意スヘキ事

第九款　此地ニ別ニ事務局ヲ開キ命令布告等總テ之ヨリ達スレハ凡ソ申請報告等一切本局ヲ經テ上奏スヘキ事

第十款　諸費用ハ務テ簡約ニ從ヒ濫冗ノ弊ナカラシムルニ注意スヘキ事

右條款ノ外細事ハ專決シ大事ハ上奏シテ命ヲ乞フ可シ

明治七年四月五日

御名　御璽

臺灣蕃地事務局ヲ置ク

辭令　七年四月五日

臺灣蕃地事務參軍被　仰付候事

參軍谷干城赤松則良ヘ勅　七年四月六日

太政大臣　三條實美

陸軍少將　谷　干城

陸軍少將　赤松則良

臺灣蕃地事務參軍　谷　干城

臺灣蕃地事務參軍　赤松則良

臺灣蕃地處分ニ付陸軍中將西鄕從道ニ命シテ事務都督タラシム凡ソ陸海軍務ヨリ賞罰等ノ事ニ至ルマテ委任スルニ全權ヲ以テス汝干城則良ニ參軍ヲ命ス其能ク帷幕ノ機謀ニ參シ凡ソ陸軍海軍ニ關スルノ事ハ厚ク都督ヲ輔翼シ速ニ成功ヲ奏セヨ

臺灣蕃地事務都督西鄕從道ヘ達　七年四月四日

今般臺灣蕃地處分ニ付事務局被置候條此旨相達候事

陸軍海軍兩省ヘ達　同日